

上奏案(官紀振肅)第五回帝國議會

衆議院議長臣星亨等謹奏ス。伏惟レバ 陛下忠孝ヲ以テ億兆ヲ率キ、廉節ヲ以テ郡臣ヲ御シ、二綱因テ張り羅因テ立ツ。古聖王ノ治ト雖モ何ヲ以テ之ニ尙ヘムヤ。任ニ輔弼ニ當ル者宜シク風紀ヲ嚴ニシ、内行ヲ肅ミ、以テ 陛下聖明ノ治ニ奉答スベキ也。今ヤ我邦 陛下ノ盛徳ニ頼リ國民以テ安シト雖モ、宇内ノ形勢ハ敢テ臣庶ノ懈惰疎慢ヲ容サズ。閣臣タル者宜シク日夜惴々トシテ敢テ寢食ヲ安ゼズ、或ハ民心ヲ失ヒ以テ 陛下ノ至治ニ負カムコトヲ是レ懼ルベキノ秋ナリ。然ルニ閣臣自ラ誠メズ、漫ニ臨ムベカラザルノ席ニ臨ミ、會スベカラザルノ人ニ會シ、饗讌ヲ享ケ、其官僚ヲシテ贈遺ヲ容レシメ、醜聞道塗ニ盈チ、惡聲街巷ニ喧シ。政府ノ威嚴行ハレズ、宰臣ノ信用地ニ墜チタリ。今ニシテ之ヲ正サズムバ臣等恐ラクハ上 陛下ノ盛徳ヲ累ハシ、下衆庶ノ離心ヲ致サムコトヲ。臣等願クハ 陛下聖斷以テ閣臣ノ不肅ヲ誡メ給ハムコトヲ。臣星亨等誠恐誠惶謹デ奏ス。

明治二十六年十二月一日

元 田 肇

外四名提出

現行條約履行建議 (第五回帝國議會)

衆議院ハ政府ガ現行條約ノ實施上我帝國ノ權利ヲ汚損スル所アルヲ認ム。故ニ衆議院ハ切ニ政府ニ望ム。政府ガ條約ノ權義ヲ明確ニシ、以テ之ヲ履行セラレンコトヲ。敢テ建議ス。

明治二十六年十二月八日

安 部 井 馨 根 提出

官紀振肅ニ關スル決議案 (第五回帝國議會)

衆議院ハ去ル四月官紀振肅ノ上奏案ヲ可決シ、政府ノ威嚴行ハレズ宰臣ノ信用地ニ墜チ、今ニシテ之ヲ正サズンバ上 陛下ノ盛徳ヲ累ハシ、下衆庶ノ離心ヲ致サンコトヲ 天聽ニ達セリ。然ルニ當局大臣ハ今日ニ至ルモ尙ホ未ダ決スル所ヲ見ズ。依テ衆議院ハ茲ニ内閣ハ速ニ處決スベキモノナリト決議ス。

上奏建議並決議案

一八五

明治二十六年十二月十八日

河 島 醇 提出
緊急動議

千島號事件ニ關スル上奏案 (第五回帝國議會)

衆議院議長臣楠本正隆本院ノ決議ヲ具シ謹ミ奏ス。伏シテ惟ミルニ 陛下登極ノ初メ、汎ク宇内ノ形勢ヲ察シ、大ニ國威ヲ四方ニ宣揚シ、天下ヲ富岳ノ安キニ置カムコトヲ誓ハセ給フ。殊ニ曩日陛下閣臣ニ賜フ所ノ 大詔ヲ拜讀スルニ、開國進取ノ國是ヲ終始スルノ叡旨ヲ示サセラル。臣民タル者孰レカ肯テ感泣奉効ヲ圖ラザランヤ。然ルニ臣等我軍艦千島英國商船ラヘンナト衝突ノ事ニ關スル政府ノ措置ヲ見ルニ 聖謨ニ背違シ國權ヲ毀損スル實ニ甚シキモノ有リ。茲ニ左ノ五事ヲ敷奏ス。

第一 堂々タル帝國軍艦一外商船ノ爲メニ衝破セラル。其國辱ヤ既ニ明カナリ。政府ハ宜シク之ニ對シテ大ニ國耻ヲ雪ムルノ道ヲ講ズベキナリ。計ニ出デズ、僅カニ一外商民ヲ對手トシテ要償ノ訴訟ヲ提起シタリ。

第二 日英條約ヲ按ジ、當時締結ノ精神ヲ釋スルニ、英國人民ニ其自國ノ裁判ヲ受クルコトヲ許シタルハ條約ニ明記スル所ノ外決シテ政府以上ニ對スルトキニ及ボスモノニ非ズ。然ルニ政府ハ此要償ノ訴ヲ在橫濱英國領事裁判所ニ提出シ、政府自カラ外國主權ノ下ニ屈シタリ。

第三 日英條約ヲ按ズルニ外人ガ我人民ヲ對手トスルハ總テ我法廷ニ出訴スベキナリ。然ルニ被告英商ノ反訴ヲ爲スニ當リ、政府ハ甘ジテ之ガ答辯ヲ爲シ、遂ニ裁判權ナキ領事裁判所ヲシテ裁判ヲ爲サシメタリ。

第四 我國法ニハ私權ノ行使上、國ヲ代表スルモノノ規定アリ、然ルニ政府ハ訴訟ノ進行中畏レ多クモ 天皇ノ尊稱ヲ濫用シ、終ニ英國判官ヲシテ尊稱ヲ英國一商民ト伍シ奉リ其判決ヲ爲スニ至ラシメタリ。

第五 日英條約ニ於テハ我臣民ト雖モ領事裁判所ノ判決ヲ受クルニ止マリ、其他ノ英國裁判所ノ召喚ニ應ズベキ義務ナシ。然ルニ政府ハ在清上海英國裁判所ノ召喚ニ應ジタリ。

以上敷奏スル所、國權ノ毀損ヲ顧ミズ、條約ノ權義ヲ確守セズ、正當ノ條約ニ基カズ、叨リニ帝國ヲ舉テ英國ノ主權ノ下ニ屈從セシメタルモノニシテ、實ニ千古ノ失體ナリ。 陛下中興ノ大業ヲ空フシ、各國ノ凌侮ヲ招ク是ヨリ甚シキハナシ。而シテ内閣大臣等恪トシテ顧ミズ、其重責ニ負クヤ大ナリ。臣等屢々 宸襟ヲ煩ハシ奉ルニ忍ビズト雖モ、事全ク帝國ノ大體ニ關シ、臣等衷情

止ム能ハズ、伏シテ 陛下ノ聖鑑ヲ仰グ。臣楠本正隆誠恐誠惶謹ミ奏ス。

明治二十六年十二月二十九日

鳩山和夫

外五名提出

上 奏 案 (第六回議會)

衆議院議長臣楠本正隆、本院ノ決議ヲ具シ謹デ奏ス。伏テ案ズルニ今ヤ閣臣苟且偷安内治外交共ニ其職責ヲ誤リ、綱紀頹廢シ、威信地ニ墜ツ。曩キニ第五議會ニ當リ閣臣叨リニ非理無名ノ解散ヲ奏請シ、擅マニ國家立法ノ機能ヲ阻格ス。是レ憲法ヲ輕視シ議會ヲ侮蔑スルモノナリ。臣等深ク現行條約ノ實施ニ關シ、國權ヲ汚損スルコト尠カラザルヲ慨キ、閣臣ヲシテ其權義ヲ明確ニシ、之ヲ厲行セシムルノ建議ヲ提起ス。其意素ヨリ開國進取ノ 皇謨ヲ翼賛スルニ外ナラズ。然ルニ閣臣之ヲ誣テ以テ鎖國攘夷ノ言議ト爲シ、惶惶停會ヲ奏請シ、次グニ解散ヲ以テシ、臣等ヲシテ始メヨリ口ヲ開ク能ハザラシム。是レ上下ヲ欺罔シ 皇謨ニ背戾スルモノナリ。曩キニ我軍艦千島英國商船ヲウエンナト衝突スルヤ、閣臣叨リニ外國法廷ニ出訴シテ之ニ加フルニ畏多クモ 陛下ノ尊

號ヲ濫用ス。是レ天威ヲ汚辱シ國權ヲ毀損スルモノ、我國振古以來未ダ曾テ有ラザル所ト爲ス。臣等曩キニ内閣總理大臣伯爵伊藤博文ガ貴族院議員公爵二條基弘等ニ答フル書ヲ見ルニ、擅恣無狀帝國議會ヲ視テ以テ單ニ閣臣諮詢ノ府ト爲ス。是レ憲法ヲ蔑如シ、議會ヲ輕侮スルモノナリ。況ンヤ豫算ノ如キニ至リテハ未ダ院議ニ附セザル者ヲ以テ早クモ己ニ和協ノ望ナキモノト爲スヲヤ。是レ事實ヲ誣罔シ枉テ口實ヲ作爲スルモノナリ。唯是レ而已ナラズ、内治外交共ニ經紀ヲ失シ、百揆日ニ益々紛亂シ、終ニ復タ理ム可カラザントス。然ルニ閣臣動モスレバ 衰龍ノ御袖ニ隱レ以テ其責ヲ逃レントス。立憲ノ 聖旨ニ背キ、輔弼ノ大義ニ戾ル是ヨリ大且ツ甚シキハナシ。若シ夫レ今ニシテ其責ヲ正サズンバ臣等竊カニ恐ル、民心内ニ乖離シ、國威外ニ失墜シ、延テ以テ大憲ノ廢滅、皇道ノ壞頹ヲ致サンコトヲ。是レ臣等ノ憂憤危懼措ク能ハザル所ナリ。臣等比年屢々奉疏シ以テ 宸聽ヲ煩ハシ奉リ、臣子ノ分萬忍ビザルノ所ト雖モ、事國家ノ命脈ニ關シ、衷情洵ニ止ム能ハズ。敢テ赤心ヲ披キ伏シテ 聖鑑ヲ仰グ。臣楠本正隆誠恐誠惶謹ミ奏ス。

明治二十七年五月十五日

大井憲太郎

外十名提出

上 奏 案 (第六回帝國議會)

衆議院議長臣楠本正隆誠恐誠謹ミ奏ス。

勅聖文武 天皇陛下登極ノ首メ五事ノ誓文ヲ下シ明カニ億兆ニ示シ給ヒ、上下心ヲ一ニシ盛ニ
經綸ヲ行ハシム。 大詔ノ嚴ナル屹トシテ山嶽ノ如ク、 天恩ノ厚キ穆トシテ春風ニ似タリ。
臣等瞻仰景從日夜孳々トシテ盛徳ヲ翼賛シ、 鴻旨ニ奉答セント欲スルモノ年已ニ久シ。比年閣
臣ノ施設スル所率ネ輿望ニ稱ハズ、第四期帝國議會ニ至リ閣臣ノ見ト臣等ノ議ト相觸レ、臣等内閣
ト竝ビ立ツ能ハズ。謹デ上奏以テ罪ヲ待ツ。 陛下畏クモ誓文ノ意ニ基カセラレ 大詔ヲ下シ、
在廷ノ臣僚及帝國議會ノ各員ニ告ゲ、和協ノ道ニ由リ以テ大事ヲ補翼シ、有終ノ美ヲ濟サンコトヲ
望ミ、特ニ閣臣ニ命ズルニ行政各般ノ整理ヲ以テシ給ヘリ。國務大臣モ亦隆渥ノ 聖旨ヲ奉ジ第
五期帝國議會ヲ期シ、政綱ヲ振厲シ政費ヲ節減シ、海軍ヲ釐革センコトヲ誓ヘリ。是ニ於テカ舉國
ノ民 陛下ガ輿論ヲ嘉納シ給フヲ聽キ、額手シテ第五期帝國議會ヲ俟チ來蘇ノ慶アラランコトヲ
翹望セリ。然ルニ閣臣ノ經營一時ヲ彌縫スルニ止マリ、政綱未ダ振厲セズ、海軍未ダ釐革セズ、惟
僅ニ費途ヲ節シ吏員ヲ沙汰シ以テ大事ヲ模稜スルノミ。何ヲ以テカ人心ヲ一ニシ民意ヲ慰スルコト
ヲ得ンヤ。是レ臣等ガ偏ヘニ 聖旨ニ背戾センコトヲ恐レ、戰兢自ラ安ズル能ハザル所以ナリ。

臣等區々ノ微衷恭ク 大詔ニ遵ヒ、努メテ經綸ヲ行ヒ、至誠以テ 天皇ニ奉答セント欲スト雖
モ、閣臣ノ所爲既ニ斯ノ如シ。臣等ヲシテ默セント欲シテ默スル能ハザラシム。仰ギ願クハ 陛
下天地覆載ノ恩ヲ垂レ、臣民ノ輿望ヲ容納シ、風霜嚴肅ノ威ヲ以テ閣臣ノ行事ヲ戒飭シテ和協ノ道
ヲ盡サシメラレンコトヲ。衆議院議長臣楠本正隆誠恐誠謹ミ奏ス。

明治二十七年五月十五日

片 岡 健 吉

外 五 名 提 出

現内閣ノ行爲ニ對スル本院ノ意志ヲ表明スベキ
議案ヲ起艸セシムル爲メノ特別委員修正案 (第六回帝國議會)

衆議院議長臣楠本正隆誠恐誠謹ミ奏ス。

勅聖文武 天皇陛下登極ノ首メ五事ノ誓文ヲ下シ、明カニ億兆ニ示シ給ヒ、上下心ヲ一ニシ盛
ニ經綸ヲ行ハシム。 大詔ノ嚴ナル屹トシテ山嶽ノ如ク、天恩ノ厚キ穆トシテ春風ニ似タリ。臣
等瞻仰景從日夜孳々トシテ盛徳ヲ翼賛シ、 鴻旨ニ奉答セント欲スルモノ年已ニ久シ。然ルニ

上奏建議並議決案

「其」ハ原本
朱書ニ據ル
モノナリ
此以下如皆倣

比年閣臣「其」施設「ヲ」誤リ、内治外交共ニ其職責ヲ失シ、動モスレバ則チ累ヲ
スニ至ル曩ニ「第四期帝國議會ニ」方「リ」閣臣ノ見ト、臣等ノ議ト相觸レ臣等内閣ト竝ビ立ツ能ハ
ズ。云々（中畧。）

第五期議會ヲ俟チ來蘇ノ慶アランコトヲ翹望セリ。然ルニ閣臣ノ經營一時ヲ彌縫スルニ止マリ、
政綱未ダ振厲セズ、海軍未ダ釐革セズ、惟僅ニ費途ヲ節シ吏員ヲ沙汰シ以テ大事ヲ模稜スルニ、過
ギズ。特ニ外政ニ至ツテハ偷安姑息唯外人ノ歡心ヲ失ハンコトヲ是レ畏レ、内外親疎輕重ノ辯別ヲ
顛倒スルニ至ル。是レ臣等ガ偏ヘニ 聖旨ニ背戾センコトヲ恐レ戰兢自ラ安ズル能ハザル所以ナ
リ。臣等區々ノ微衷恭ク 大詔ニ遵ヒ、努メテ經綸ヲ盡シ、至誠以テ天意ニ奉答セント欲スト雖
モ、閣臣「常ニ和協ノ道ニ背キ」臣等ヲシテ「大政翼贊ノ重責ヲ全フ」スル能ハザラシム「此ヲ以
テ臣等閣臣ニ信ヲ置ク能ハザルナリ。今ニシテ之ヲ匡正セズンバ臣等竊ニ恐ル、憲政内ニ紊亂シ、
國威外ニ失墜センコトヲ。是レ臣等ガ默セント欲シテ默スル能ハズ、敢テ赤心ヲ披瀝シ 陛下ニ
陳奏スル所以ナリ」仰ギ願クハ 陛下天地覆載ノ恩ヲ「敷キ日月ノ照鑒ヲ垂レ玉ハンコトヲ」衆
議院議長臣楠本正隆誠惶誠恐謹ミ奏ス。

明治二十七年五月三十日

江原委員長 報告

同特別委員少數者修正意見（第六回帝國議會）

衆議院議長臣楠本正隆誠惶誠恐謹ミ奏ス。

勅聖文武

天皇陛下

以下本文
原案ニ同ジ

仰ギ願クハ陛下「風霜嚴肅ノ威ヲ以テ綱紀ヲ振張シ、天地覆載ノ恩ヲ垂レ、輿望ヲ容納シテ明カ
ニ宸斷ヲ下シ給ハラン」コトヲ。衆議院議長臣楠本正隆誠惶誠恐謹テ奏ス。

明治二十七年五月三十日

三 崎 委員

外 七 名 提 出

會期ニ關スル決議案（第六回帝國議會）

明治二十七年第六期帝國議會ヲ二十一日間ト定メタルハ憲法ニ違反シ、帝國議會ノ議權ヲ侵犯シ
タルモノト認ム。因テ本院ハ會期ニ關スル政府ノ行爲ヲ不當ナリト決議ス。

上奏建議並議決案

明治二十七年五月十五日

山田東次

外一名提出

解散ニ關スル決議案 (第六回議會)

明治二十六年第五期帝國議會ニ於テ本院未ダ其意思行爲ヲ表發セザルニ當テ、政府ガ之ヲ解散シ、且ツ其理由ヲ明示セザルハ立憲的動作ニアラスト認ム。因テ本院ハ第五期議會解散ニ伴ヘル政府ノ行爲ヲ不當ナリト決議ス。

明治二十七年五月十五日

河野廣中

外一名提出

千島艦事件ニ關スル決議案 (第六回帝國議會)

日本政府對英國ビーラー會社千島艦衝突損害要償ニ關スル民事訴訟ニ於テ、我が日本政府ガ日本皇帝ノ權利ヲ代表シテ訴求スルモノナルコトヲ論陳シ、 皇帝陛下ノ稱號ヲ用ヒタルハ取りモ直サズ我が 天皇陛下ヲ民事訴訟ノ當事者ト爲シ奉リタルモノナリ。是レ我が國法律制度ノ許サル所ナリ。因テ本院ハコノ行爲ヲ背法不當ナリト決議ス。

五月二十九日

岸小三郎

外二名提出

明治二十六年度ニ於テ國庫剩餘金ヲ以テ豫算超過及豫算外支出ノ件 (第六回帝國議會)

右ハ憲法ニ違反シタル所爲ニシテ且ツ岡山縣外五縣水害補助費支出ハ事實上甚ダ不當ト認ム。依テ承諾ヲ與ヘザルコトニ決議ス。

明治二十六年度ニ於テ中央備荒儲蓄金ヲ以テ豫

算超過支出ノ件

右ハ憲法ニ違反シタル所爲ナルヲ以テ承諾ヲ與ヘザルコトニ決議ス。

明治二十七年五月二十九日

江原委員長 報告

國庫剩餘金支出ニ關スル決議案 (第六回帝國議會)

明治二十六年度ニ於テ國庫剩餘金ヲ以テ豫算ノ不足及豫算外ニ生ジタル費途ニ充用シタルハ憲法ヲ無視シタルモノナリ。依テ本院ハ内閣大臣ガ其違憲ノ責ニ任ズベキモノト決議ス。

明治二十七年五月二十九日

鎌田榮吉

外二名提出

同審査委員會修正

本院ハ明治二十六年度ニ於テ國庫剩餘金ヲ支出シタルハ憲法ニ違反シ、且ツ事實ニ於テモ不當ト認ムルモノアリト決議セリ。因テ内閣大臣ハ其責ニ任ジ、自ラ處決スル所ナカルベカラズ茲ニ之ヲ決議ス。

日清交戦ニ關シ伊藤首相ノ演説

明治二十七年十月十九日廣島貴族院ニ於テ (第七回臨時議會)

諸君、此節ノ事件ニ附キマシテ大體ノ御報道ヲ致シマス。

朝鮮事變ヨリシテ延テ日清間ノ交戦トナリ、我 皇上陛下既ニ大霧ヲ茲地ニ進メラレ、親ラ統帥ノ天職ヲ盡サセラレ、而シテ諸君ヲシテ軍國ノ急務ニ參與セシムルタメ、臨時帝國議會ヲ大本營ノ下ニ召集セラル、ニ當リ、本大臣ハ其奉ズル所ノ職務ニ由リ、日清兩國間終ニ此事局ヲ生ズルニ至リタルノ顛末ヲ略述スルノ光榮ヲ荷フ。

抑々朝鮮ハ夙ニ我帝國ガ卒先シテ其獨立ヲ認メ、之ト條約ヲ締結シ、宇内列國ニ紹介シタル所ニシテ、爾來數年ノ間、各國モ亦齊シク自主對等ノ一獨立國トシテ漸次條約ヲ締結シ、交通ノ道ヲ開キマシタ。朝鮮ハ我ト僅ニ一葦帶水ヲ隔ツルノミデ、其國ノ治亂盛衰我ニ於テ緊切ノ痛癢ヲ感ズルコト最モ深イノデアル。然ルニ其國力微弱ニシテ國勢振ハズ、政治モ亦從ツテ其宜ヲ失シ、動モスレバ内亂ヲ醸シ上下相訐クニ至ツテ、而シテ政府ノ力遂ニ之ヲ鎮壓スルコト能ハズ、其禍害時ニ或ハ延テ居留ノ外人ニ及ボスニ至リマシタ。其國情既ニ此ノ如ク日ニ衰頹ニ赴クニ當リマシテ、我國

其自滅ニ一任シテ顧ミザレバ則チ止ム。苟モ然ラズ、率先其獨立ヲ確認シ、列國ニ對シ、先蹤ヲ啓キタルノ初志ヲ完クシ、併セテ我帝國ノ權利利益ヲ保護セント欲セバ、斷ジテ其獨立ヲ鞏固ナラシメ、以テ東洋大局平和ノ基礎タラシメネバナラヌ。

我國維新以來中興ノ 宏謨ニ則トリ、内ハ文化ヲ敷キ外ハ交通ヲ開キ、専ラ東洋大局ノ平和ヲ重ンジ、俱ニ與ニ文明ノ域ニ進マンコトヲ冀圖シマシタ。故ニ朝鮮ニ事アルニ際シテモ毎ニ此方針ヲ以テ之ニ臨ミ、又清國ニ對シテモ誠ヲ披キ正ヲ履ミ、隣交ヲ重ンズルヲ以テ主要トシタノデアル。既ニ今回ノ事ノ如キ日清協同事ニ從ヒ天津條約ノ精神ニ依リ、共ニ同一ノ地位ニ立チ隣邦ノ孤弱ヲ拯ヒ、東洋ノ平和ヲ維持スルノ責任ヲ兩國間ニ分タント欲シタ。然ルニ清國ハ之ヲ顧念スルコト無ク、徒ラニ口實ヲ求メテ我ノ提議ヲ峻拒シマシタ。於是乎我政府ハ止ムヲ得ズ獨力以テ朝鮮ニ勸ムルニ其稅政ヲ釐革センコトヲ以テシ、朝鮮ハ已ニ之ヲ肯諾シタルニ、清國ハ終ニ陰ニ陽ニ百方術ヲ盡シテ之ヲ妨碍シ、終ニ戰爭ノ以テ避クベカラザル形勢ニ陥レシメタノデアル。

本大臣ハ茲ニ此事局ニ關スル兩國間往復ノ公文ヲ諸君ノ前ニ提出シ、其顛末ヲ見ルノ一端ニ供シタイト思フ。

當初東學黨ノ亂起ルニ際シ、清國北洋通商大臣李鴻章ヨリ東京駐在ノ其國全權公使ニ訓令ノ出兵ノコトノ公文ヲ第一ニ諸君ノ前ニ朗讀致シマス。彼レノ公文ハ漢文デアリマスルガ是レハ日本文ニ

翻譯致シテゴザキマス。

以書簡致啓上候。陳者今般北洋大臣李ヨリ本使へ左ノ通電報有之候。

光緒十一年清日兩國ニテ議定セシ條約中ニ、將來朝鮮ニテ若シ變亂事件有之、清國ニテ派兵ヲ要スル場合有之候節ハ應サニ先ヅ行文知照スベク、事定リタル上ハ直チニ撤回シ再ビ留防セズト有之、本大臣今朝鮮政府ノ來文ニ接シ候處、全羅道所轄ノ人民ハ習俗凶悍ニ有之、東學教匪ニ糾合シ衆ヲ聚メテ縣邑ヲ攻陷シ、又北方ノ全州ヲ竄陷致候ニ付前キニ已ニ練軍ヲシテ往テ征討セシメ候得共戰利アラズ、就テハ若シ滋蔓日久シキトキハ憂ヲ上國ニ貽スコト尤モ多カルベシ。然ルニ壬午甲申敵邦兩度ノ内亂ノ節ニモ中野ノ兵士ニ頼リテ代テ爲メニ之ヲ戡定セシコト有之因テ其例ニ依リ數隊ノ兵ヲ酌遣セラレ速カニ來テ代テ征討セラレムコトヲ懇請致候。尤悍匪ノ挫殄スル上ハ直チニ其兵ヲ撤回セラレ候様致度、敢テ更ニ之ヲ留防セシムルコトヲ請フテ以テ天兵ノ久シク外ニ勞セラル、コトヲ致サルベシトノ趣ニ有之、本大臣之ヲ覽ルニ其情詞迫切ナルノミナラズ、兵ヲ派シテ援助スルコトハ我朝ガ屬邦ヲ保護スルノ舊例ニ有之候得者、奏聞ノ上諭旨ヲ奉ジ直轄提督葉ヲシテ勁旅ヲ選帶シ、馳セテ朝鮮全羅忠清道一帶ノ地方ニ赴カシメ、時機ヲ見計ラヒ防堵攻討シ、期ヲ剋シテ之ヲ撲滅セシメ、務メテ屬邦ノ境土ヲシテ又安ナラシメ、各國人ノ朝鮮地方ニテ貿易ヲ爲ス者ヲシテ皆ナ各其生業ヲ安ズルコトヲ得セシメ度、尤平

定次第直チニ右兵ヲ引揚ゲ更ニ留防セシメザル様可致候。右至急條約ニ從ヒ行文知照スベキ筈ニ付、貴大臣へ電報致候間早速日本外務省へ照會有之度候。

右ノ通り申來候ニ付本使ハ之ヲ貴大臣へ及御照會候。敬具

光緒二十年五月三日(我六月七日)

清國特命全權公使 汪 鳳 藻

日本國外務大臣 陸 奥 宗 光 閣下

此照會ニ對シマシテ我政府ヨリ彼ニ回答ニ及ビマシタ文案ハ則チ次ノ通デアリマス。

以書簡致啓上候。陳者今般貴國政府ニテ朝鮮國へ派兵被成候ニ付、明治十八年四月十八日、日清兩國政府ニテ締結ノ約書第三款ニ遵ヒ、行文知照ノ趣本日貴簡ヲ以テ御申越相成致承知候。然ルニ貴簡中保護屬邦ノ語相見居候處、帝國政府ニ於テハ未ダ曾テ朝鮮國ヲ以テ貴國ノ屬邦トハ認居不申ニ付、此段御回答旁言明致置候。本大臣ハ茲ニ重ネテ敬意ヲ表シ候。敬具

明治二十七年六月七日

外務大臣 陸 奥 宗 光

清國特命全權公使 汪 鳳 藻 閣下

之ニ引續キマシテ我國ヨリ朝鮮ニ出兵致スニ付テ、北京駐在ノ我代理公使ヲシテ清國ノ總理衙門

日清交戦ニ關シ伊藤首相ノ演說

ニ通牒致シマシタ公文デアリマス。

以書簡致啓上候。陳バ朝鮮國ニ於テ現ニ變亂重大ノ事件アリテ我國ヨリ派兵ノ必要有之候ヲ以テ、帝國政府ハ若干ノ兵ヲ派遣スル積ニ有之、因テ明治十八年四月十八日貴我兩國政府ニテ議定セシ條約ノ明文ニ從ヒ、清國政府ヘ行文知照スベキ旨唯今我政府ヨリノ電訓ニ接シ候ニ付、右之趣及御照會候。敬具

明治二十七年六月七日

日本國臨時代理公使 小村 壽 太 郎

清國總理各國事務王大臣御中

其次ニハ總理衙門ヨリ我出兵ニ付テ種々ノ異存ヲ申述ベタノデアリマス。總理衙門王大臣ヨリ我公使館ヘノ照會デアリマス。

以書簡致啓上候。本月四日(我六月七日)貴簡ヲ以テ朝鮮國ニ於テ現ニ變亂アルヲ以テ、若干ノ兵ヲ派遣セラルベキニ付兩國ノ條約ニ從ヒ右ノ趣行文知照スベキ旨貴國政府ヨリノ訓命ヲ受ケラレ候旨御申越相成候處、我國ニテハ朝鮮ノ求ニ應ジテ兵ヲ派遣シ、其亂民討伐ノ援助ヲ爲ス次第ニシテ、是ハ從來屬邦ヲ保護スルノ慣例ニ有之、且ツ專ラ内地ノ亂民ヲ討伐スル爲メニシテ、平定次第直チニ引揚可申、目下仁川釜山各港ノ模様ハ靜穩ナレドモ、通商ノ地ニ候ヘバ保

護ノ爲メ暫ク軍艦ヲ留置候ノミニ有之候。貴國ヨリ兵ヲ派遣セラル、ハ專ラ公使館領事館及商民ヲ御保護相成候爲メナルベケレバ、申迄モナク多數ノ兵ヲ御派遣相成候必要可無之、又朝鮮ヨリ請求シタル次第ニモ無之候得バ、決シテ朝鮮内地ヘ進入シテ驚疑ヲ起サシメザル様被致度加之我國ノ兵士ト出逢ヒ言語不通軍禮ノ差異アル爲メ、或ハ不慮ノ事ヲ生ズルガ如キ場合モ有之候半ト懸念致居候ニ付テハ、右ノ趣貴下ヨリ貴國政府ヘ電報ニテ御申送相成度致希望候。右及回答候。敬具

光緒二十年五月六日(我六月九日)

清國總理各國事務王大臣

日本國臨時代理公使 小村 壽 太 郎 貴下

之ニ對シテ我代理公使ハ政府ノ訓令ヲ奉ジテ下文ノ通り回答ニ及ビマシタ。

以書簡致啓上候。陳者本月九日貴簡ヲ以テ貴國ヨリ朝鮮ヘ派兵セラレシハ從來屬邦ヲ保護セラ
ル、ノ慣例ニ有之、我國ヨリハ多數ノ兵ヲ派遣スルノ必要可無之、又決シテ朝鮮内地ヘ進入不
致様致度トノ趣相成候ニ付、本官ニハ早速其旨我政府ヘ致電報置候處、只今我政府ヨリノ回電
接到帝國政府ニ於テハ未ダ曾テ朝鮮ガ貴國ノ屬邦ナルコトヲ認居不申、今回我國ヨリ朝鮮ヘ派
兵セシハ濟物浦條約ニ依リタル義ニ有之、而シテ出兵ノ手續ハ天津條約ニ依リテ取計ヒ置タル

次第ニ候、又帝國ヨリ派遣ノ軍隊ノ衆寡ハ帝國政府自ラ之ヲ裁決可致義ニ有之、又其行動ノ如何ニ至テハ赴クベキ必要ナキ處ヘハ無論赴カザルベケレドモ、他ヨリ掣肘セラルベキ筋毫モ無之又兩國ノ兵士相出逢ヒ言語不通軍禮ノ差異アル爲メ或ハ不慮ノ事ヲ生ズルガ如キ場合モ可有之トノ義ニ至テハ、我國ノ兵士ハ紀律ヲ守ルコト嚴肅ナレバ、貴國ノ兵士ト出逢フコトアリトモ故ラニ事ヲ生ズルガ如キコト決シテ無之ハ我國政府ノ固ク信ズル所ナレバ、貴國政府ニ於テモ其邊已ニ豫メ御加意相成居候事ニ可有之旨申越候ニ付右及回答候。敬具

明治二十七年六月十二日

日本國臨時代理公使 小村 壽 太郎

清國總理各國事務王大臣御中

此間段々談判モアリマシテゴザキマスルガ、東京駐在ノ清國ノ公使ト我外務大臣トモ談判ヲ致シテ、又本大臣ノ所ヘモ來訪致シ、我政府ノ主意ノ在ル所ヲ十分彼ノ公使ヘモ申聞カセマシタ。然シテ我政府ヨリ一ノ企ヲ爲シテ彼ノ公使ヘ照會ヲ致シマシタ。其書翰ハ左ノ通りデアリマス。
以書簡致啓上候。陳者朝鮮國ニ於ケル目下ノ事變及善後ノ方法ニ關シ、昨日御面晤ノ節帝國政府ノ提案トシテ貴國政府ヘ御協議致候要旨ハ左記ノ通りニ有之候。
朝鮮事變ニ付テハ日清兩國相勦力シテ速ニ亂民ノ鎮壓ニ從事スル事。

亂民平定ノ上ハ朝鮮内政ヲ改良セシムル爲メ日清兩國ヨリ常設委員若干名ヲ朝鮮ニ派シ、先ヅ大略左ノ事項ヲ目的トシテ其取調ニ從事セシムル事。

- 一、財政ヲ調査スルコト。
 - 一、中央政府及地方官吏ヲ淘汰スルコト。
 - 一、必要ナル警備兵ヲ設置セシメ國內ノ安寧ヲ保持セシムルコト。
- 右爲念茲ニ申進候本大臣ハ茲ニ重ネテ敬意ヲ表候。敬具

明治二十七年六月十七日

外務大臣 陸 奥 宗 光

清國特命全權公使 汪 鳳 藻 閣下

之ニ對シテ清國全權公使汪鳳藻ハ本國政府ノ訓令ヲ奉ジテ左ノ如ク答ヘマシタ。

以書簡致啓上候。陳者本使ハ唯今本國政府ヨリノ電訓ニ接シ候處、貴國政府ヨリ御商議相成候朝鮮事變及善後ノ方法ニ付テハ篤ト考慮ヲ加ヘタル上左ノ通り及回答候。

- 一、朝鮮ノ變亂ハ已ニ鎮定シタレバ最早清國兵ノ代テ之ヲ討伐スルヲ煩ハサズ、就テハ兩國ニテ會同シテ鎮壓スベシトノ說ハ之ヲ議スルノ必要ナカルベシ。
- 一、善後ノ方法ハ其意美ナリト雖モ、朝鮮自ラ釐革ヲ行フベキコトトス。清國尙ホ其内政ニ關

與セズ、日本ハ最初ヨリ朝鮮ノ自主ヲ認メ居レバ、尙更其内政ニ關與スルノ權ナカルベシ。
一、變亂平定ノ後兵ヲ撤スルコトハ乙酉ノ年兩國ニテ定メシ條約ニ具在スレバ、今茲ニ又議スベキコトナカルベシ。

以上ハ本使ヨリ已ニ御面話ニ及置候得共尙爲念以書簡申進候。敬具

光緒二十年五月十八日（我六月二十二日）

清國特命全權公使 汪 鳳 藻

日本國外務大臣 陸 奥 宗 光 閣下

之ニ對シテ我外務大臣ヨリ尙ホ又左ノ通り照會ニ及ビマシタ。

以書簡致啓上候。陳バ閣下ハ貴國政府ノ訓令ニ從ヒ朝鮮國變亂鎮定並善後ノ辦法ニ關スル帝國政府ノ提案ヲ御拒絕相成候趣、貴曆光緒二十年五月十八日附ノ貴簡ヲ以テ御申越相成致閱悉候。顧テ朝鮮國刻下ノ情勢ヲ察スルニ於テ、貴政府ト所見ヲ同フスル能ハザルハ帝國政府ノ遺憾トスル所ニ有之候。之ヲ既往ノ事蹟ニ徵スルニ、朝鮮半島ハ朋黨爭鬪内訌異動ノ淵藪タルノ慘狀ヲ呈シ、而シテ斯ク事變ノ屢々起ル所以ハ獨立國ノ責守ヲ全フスルノ要素ヲ缺クニ職由スルモノト確信スルニ足ルベキ義ニ有之候。

疆土接近ト貿易ノ重要トヲ慮ルニ於テモ、亦朝鮮國ニ對スル帝國ノ利害ハ甚ダ緊切重大ナルヲ以テ、彼國內ニ於ケル斯ル慘情悲況ヲ拱視傍觀スルニ堪ヘズ候。情勢此ノ如クナルニ當リ、帝國政府措テ之ヲ顧ミザルハ當ニ平素朝鮮ニ對シ抱持スル隣交ノ友情ニ戾ルノミナラズ、我國自衛ノ道ニモ背クノ誚ヲ免レズ候。

帝國政府ニ於テ朝鮮ノ安寧靜謐ヲ求ムル爲メニ種々ノ計畫ヲ施スノ必要ハ已ニ前述ノ理由ナルヲ以テ、更ニ之ヲ看過スル能ハズ。今ニシテ遲疑施ス所ナクシテ日ヲ曠フセバ、該國ノ變亂愈ヨ長ク滋蔓スルニ至ルベク候。是ヲ以テ帝國政府ニ於テ其兵ヲ撤去スルニハ必ズ將來該國ノ安寧靜謐ヲ保持シ政道其宜ヲ得ルコトヲ保證スルニ足ルノ辦法ヲ協定スルニ非ザレバ決行シ難ク候。且ツ帝國政府ガ斯ク撤兵ヲ容易ニ行ハザルハ當ニ天津條約ノ精神ニ依遵スルノミナラズ、復タ善後ノ防範タルベクト存候。

本大臣ガ斯ノ如ク胸襟ヲ披キ誠衷ヲ吐クニ及ビ、假令貴國政府ノ所見ニ違フコトアルモ、帝國政府ハ斷ジテ現在朝鮮國ニ駐在スル軍隊ノ撤去ヲ命令スルコト能ハズ候。此段御回答旁本大臣ハ茲ニ重ネテ敬意ヲ表候。敬具

明治二十七年六月二十二日

外務大臣 陸 奥 宗 光

清國特命全權公使 汪 鳳 藻 閣下

此間數日ノ間ニ於テ双方平和ノ局ニ至ランコトヲ試ミマシタ末、遂ニ十分ノ結果ニ至リマセヌノ
デ、我政府ヨリ總理衙門ヘ左ノ通り申込マセマシタ。

以書簡致啓上候、陳者明治二十七年七月九日貴衙門ニテ朝鮮事件ニ付及御面談候節、貴王大臣ヨ
リ御陳述ノ次第ハ總テ即日我外務大臣ヘ電報致置候處、唯今我政府ヨリ電報到著、朝鮮ニテ屢
屢變亂有之候ハ其内政ノ紊亂ニ基因スル義ニ有之、而シテ我政府ハ日清兩國ノ該國ニ於ケル何
レモ其關係常ニ緊要ナレバ、今該國ヲシテ内政ヲ釐革シ以テ變亂ヲ未萌ニ絶タシムルニハ、日
清兩國勦力同心シテ之ヲ爲スニ加カザルベシトノ意見ニテ、此意ヲ清國政府ニ提出シタリシ處
詎ゾ料ラム清國政府ハ此提議ニ從ハズ、只望ムニ撤兵ノ一事ノミヲ以テセラル。是實ニ我政府
ノ深ク訝ル所ニ有之、又其後在北京英國公使ハ友誼ヲ顧重シ日清兩國ヲシテ妥協ノ局ヲ結バシ
メムコトヲ欲シ、盡力調停セラレタリシ趣ナレドモ、清國政府ハ依然撤兵ノ事ノミヲ主張シ、
毫モ我政府ノ意ニ應ズルノ色ナシ。是ニ由テ之ヲ觀レバ清國政府ハ意アリテ事ヲ滋スモノニシ
テ、則チ事ヲ好ムニ非ラズシテ何ゾヤ。就テハ今後因テ以テ不測ノ變ヲ生ズルコトアルモ我政
府ハ其責ニ任ゼズトノ旨申來候ニ付、右電報譯文相添此段申進候。敬具

明治二十七年七月十四日

日本國臨時代理公使 小村 壽 太郎

清國總理各國務王大臣御中

表面往復ヲ重ネマシタ兩國ノ間ノ照會文ハ唯今朗讀ヲ致シマシタ通りデアリマス。此外ニモ其以
後ニ於テ双方ノ公使ヲ撤回スルニ付キマシテモ往復文ガアリマスケレドモ、格別諸君ノ電覽ニ供ス
ルノ必要ヲ見マセヌ、依ツテ省キマス。

清國ノ妄慢此ノ如ク漸ク甚シキヲ致シ、一方ニ於テハ屬邦ヲ主張シ、又一方ニ於テハ朝鮮ノ自主
ヲ認ムト云ヒ、己レ自ラ干涉シテ他ノ容喙ヲ拒ミ、獨リ其事ヲ專ニセントスルノデアアル。想フニ其
意朝鮮内亂ノ時機ニ投ジ、先ヅ自國ノ權勢ヲ擴充シ、毫モ其不振ヲ恢復シ、自立ヲ扶持スルノ念ナ
クシテ、却ツテ終ニ其獨立ヲ滅シテ之ヲ併吞セント欲スルニ在ルハ明白デアリ、故ニ彼レ一面ニ於
テハ東徒ノ未ダ平ガザルニ既ニ鎮定スト説キ、以テ我兵ヲ撤回セント請ヒ、而シテ時機ヲ緩ニシ漸
次自國ノ兵ヲ増遣シ、以テ威壓ヲ試ミントシ、他ノ一面ニ於テハ天津條約ノ精神ヲ違視シ、陰ニ朝
鮮ヲ使噉シテ我好意ノ勸告ヲ拒絶セシメント圖リマシタ。其證左ハ歷々掩フベカラザルモノガ許多
アリマスルガ、今爰ニ之ヲ縷陳スルノ要ヲ見マセヌ。

此間一二ノ大國ハ好意ヲ以テ居中調停ノ勞ヲ試ミ、由テ以テ兩國ノ間ニ往復シタノデスガ、清國
ハ終ニ之ヲ聽キマセヌ。是ニ於テ我政府ハ我代理公使ヲシテ清國ガ事ヲ滋ウスルニ意アツテ、將來
不測ノ變アルモ其責ハ清國ニ在ルコトヲ宣言セシメマシタ。清國已ニ我好意ヲ斥ケ、東洋ノ平和ヲ

阻格セントスルノミデナク、早く已ニ戰端ヲ開ク、則チ我ノ之ニ對スル只交戰ノ一途アルノミデア
ル。宣戰ノ詔勅ガ下リマシテ以來、上ハ 皇上ノ威徳ト下ハ陸海軍ノ精銳ノ忠武ニ依リ、屢々戰
捷ノ報ニ接シタコトハ諸君ト俱ニ國家ノタメ齊聲稱賀スル所デ、諸君ハ已ニ 聖詔ヲ奉ジ上下一
致以テ此大局ニ當リ、其目的ヲ達スルタメニ能ク奮勵シテ協贊ノ任ヲ盡サンコトハ本大臣ノ信ジテ
疑ハザル所デアリマス。

廣島臨時議會ニ於ケル伊藤首相 ノ演說

明治二十七年廣島衆議院ニ於テ (第七回臨時議會)

諸君、日清交戰ノ事起リシ以來、我 皇上陛下ハ統帥ノ事ヲ親シク行ハセ給ヒ、既ニ大纛ヲ此地
ニ移サセラル。而シテ立法ノ急務ヲ舉行セラル、タメ、臨時議會ヲ大本營ノ下ニ於テ兵馬倥偬ノ間
ニ召集セラル。諸君、今ヤ我陸軍ハ櫛風沐雨久シク異郷ニ暴露シ、成歡ニ平壤ニ既ニ赫々ノ偉勳ヲ
奏シ、又海軍ハ遠ク風濤ノ險ヲ超エ、豊島ニ黄海ニ硝煙彈霧ノ中ニ於テ奕々大功ヲ顯ス。本大臣ハ
諸君ト共ニ之ヲ稱揚慶賀スルト同時ニ、我交戰ノ目的ヲ達スルニ於テ前途尙ホ幾多ノ艱辛ニ處スル
コトヲ覺悟セザルベカラズ。而シテ軍事ニ關スル國家ノ急要ナル議案ハ既ニ旨ヲ奉ジテ本院ニ諸君
ノ机上ニ横レリ。諸君ハ既ニ 聖詔ヲ忝ウセラル。希ハクハ方今ノ事局ニ鑑ミ、協同一致以テ軍
國ノ大事ヲ翼贊セラレ、政務軍務ノ當局ヲシテ 聖裁ヲ大權ノ下ニ仰ギ、機宜ノ處斷ヲ行フニ於
テ後顧ノ憂ナカラシメラル、ハ、本大臣ノ信ジテ疑ハザル所ナリ。

第八回帝國議會ニ於ケル伊藤首相ノ演說（一）

明治二十八年一月八日衆議院ニ於テ（第八回帝國議會）

諸君、方今ノ軍國重大ナル關係ノ大體ニ就キマシテハ、本期議會開院ノ 勅語ニ於キマシテ既ニ御承知ニ相成ツテ居ルコトト存ジマスルガ、昨年七月日清交戦ノ事起リマシタ以來、既ニ半歳ヲ經過致シテ居リマスルガ、此間ニ於テ軍事ノ進行ニ就キマシテハ諸君ニ於テモ御熟知ニ相成ツテ居ル通ノコトデアリマスルニ依ツテ、特ニ私ヨリ申述ベル必要ハナイト存ジマス。又外交ノコトニ就キマシテモ大體ハ既ニ 勅語ニ現レテ居リマス。其詳細ノコトニ至ツテハ今國家ト重大ナル關係ヲ有スル譯デアリマスル故ニ、諸君ノ前ニ未ダ之ヲ明瞭ニ報告ヲ致スノ時期ニ到達致シマセヌノデアリマス。併ナガラ軍事外交共ニ自ラ其時期ニ達スレバ細大遺スナク諸君ニ御報道ヲ申シタイト存ジテ居リマスデ、今日此未曾有ノ時期ニ際シマシテ素ヨリ國家ノ上ニハ爲スベキコト多クアリマスルガ、已ムコトヲ得ズ今日ハ事ノ緩急ヲ計ツテ、軍事及外交上ノ急ナルモノヲ以テ先ヅ專務ト致シ

マシテ其他ノ事ハ成ルベク後日ニ讓ル積デアリマス。故ニ本日則チ本院ニ提出致シテ置マシタ所ノ豫算ニ於キマシテモ、先ヅ經常費ヲ目的ト致シマシテ、而シテ已ムコトヲ得ザルモノヲ加ヘマシタノミデアリマス。到底事終局ニ至リマスレバ、前途ノ計畫モ百般アラウト存ジマスルガ、是等ハ今日戰爭ノ半バニ於テ計畫シ能フコトデアリマセヌ。故ニ必ズ軍事ノコト終局ヲ告グルニ至レバ、諸君ト共ニ將來ノ計畫ヲ立テ、往カナケレバナラヌコトト存ジマスガ、其時期ニ際シテ自ラ提出スルコトニ至ルダラウト思ヒマス。先ヅ今日ノ大勢上ニ於キマシテハ、諸君御熟知ノ通デアリマスルガ、畢竟此國家進運ノ時期ニ際シテ、斯ノ如キ形勢ニ至ツテ居リマスルト云フモ、素ヨリ上 至尊ノ御威德ニ依リ、且ツ我陸海軍ノ忠勇ナルニ因ツテ、則チ今日ノ戦況ヲ呈シテ居ル譯デアリマスルガ、抑々諸君ガ國民ノ代表者トシテ此軍國ノ 大猷ヲ當初ヨリ翼賛セラレマシタメニ、外ニ在テハ軍人内ヲ顧ルノ必要ナク、内ニ在テハ人心一和シテ以テ此大敵ニ當ツテ居ルコトヲ得ルモノト存ジマス。博文甚ダ不肖ナガラ 至尊ノ信任ヲ蒙ツテ自ラ揣ラズ、此時期ニ際シテ大任ヲ荷フテ居リマスルガ、努メテ 至尊ノ大命ヲ全ウシ併セテ諸君ノ希望ニ背カザラムコトヲ獨リ自ラ祈ツテ居リマスルノデアリマス。且ツ又斯ノ如キノ時期ニ際シテ上下人心一致ノ結果ニ依ツテ、其希望ヲ滿タスコトノ政略ヲ實行スルノ大任ヲ蒙リマスルハ、一國ノ宰臣トシテ實ニ名譽トスル所デアリマス。願クハ今日ノ時期ニ於テハ、成ルベクドウゾ政府ニ於キマシテモ唯今述ベマスル通ニ經濟

上ノコトナリ、或ハ又法案杯モ急ヲ要シマセヌモノハ他日ニ讓ラムト欲シマスルニ就キマシテモ、諸君ニ於テモドウカ御同感デアリマスルナラバ事ヲ速ニ結了サレムコトヲ偏ニ希望致シマス。

第八回帝國議會ニ於ケル伊藤首相ノ演說 (二)

明治二十八年二月二十一日衆議院ニ於テ (第八回議會)

過刻本院ニ特別ナル豫算ヲ提出致シテ置キマシテゴザキマスガ、右ハ朝鮮國ノ目下ノ財政上ノ困難ナルニ依リマシテ、一時止ムコトヲ得ズ金額ヲ貸渡スト云フコトデアリマス。同國ノ昨年以來ノ形勢ニ就キマシテハ、諸君ノ御承知ノ通デアリマスガ、特ニ昨年初夏以來ノ東學黨ノ叛亂ニ引續イデ、昨年ノ不作、然シテ日清ノ交戦ト相成リ、元來同國ハ吾ト同盟ノ位置ニアツテ、今日尙ホ交戦ノ半ニアリマスルニ就キマシテハ、我政府ニ於テモ之ヲ傍觀ニ附スルコトガ出來マセヌノデ、止ムコトヲ得ズ一時貸渡ス必要ニ迫ツタデアリマスガ、御承知ノ通り今日モ尙ホ朝鮮ノ各地ニ於テハ東學黨ノ叛亂ノ餘孽ヲ幾許カ存シテ居ル。サリナガラ同國ノ王室及政府ハ銳意ニ我政府ノ勸告ヲ容レテ、改革ヲ實行センコトヲ希望シテ居リマスルノデ、此同國ノ改革ニ就キマシテハ、昨年六月我政府ヨリ清國政府ニ日清兩國力ヲ戮シテ此改革ヲ勸告シ、然シテ彼ノ獨立ヲ扶持シヤウト申スコト

デアリマシタガ、清國ニ於テ之ヲ拒絶致シマシタニヨリ、遂ニ今日ノ大戰爭ト相成ツタ譯合デアリマス。爾來我邦ハ獨力此獨立ヲ扶持セシムルガタメニ、且ツ其孤弱ヲ憫ムデ今日マデ力ヲ添ヘテ助ヲ與ヘテ居ルノデアリマス。右ノ狀況ナルニ依ツテ、目下ノ困難ニ遭遇致シマシタニ依テハ、一時之ヲ救援スルノ必要止ムヲ得マセヌノデアリマス。尤モ同國政府ニ於テハ早晚公債ヲ起シテ以テ自國ノ諸般ノ費用ニ充テヤウト云フ計畫ヲ致シテ居リマス。其計畫ガ成立チマシタナラ、之ヲ以テ返濟セシムルノ積デアリマス。右ノ止ムヲ得ザル事情デアリマスルニ依ツテハ、諸君ノ審議ヲ盡サシテ速ニ協贊セラレムコトヲ希望致シマス。此事ニ就キマシテ尙ホ詳細ノ質問等ガアリマスレバ、委員會ノ席ニ於テ政府ヨリ此係リノ者ヲ差出シテ辯明ニ及バセル積リデアリマス。且又本大臣ハ不日ニ當地ヲ去ツテ再ビ大本營ニ赴任致シマス。最早此回ハ諸君ニ御目ニ懸ルノ時期モナカラウト思ヒマス。既ニ過日提出致シテ置キマシタ第二ノ臨時軍事費ノ議決ハ速ニ實行サレムコトヲ併セテ希望致シテ置キマス。

同日長谷場代議士ノ質問ニ對スル演說

朝鮮ニ對スル我政府ノ方針ニ就キマシテハ、朝鮮國ト始テ交際ヲ結ビシ以來、一モ變遷ヲ致シタ

コトハナイト存ジマスル。則チ清國ハ彼ヲ屬地ト認メ、我ハ之ヲ獨立ト認メテ、此二ツノ意見ガ當初ヨリ兩々相容レザル所ノモノデアアル。而シテ固ヨリ他國ニ對シテ交際ヲスル上ニ於テハ、時ニ事情ノ多少變遷ナキニアラズト云フコトハ論ヲ俟チマセヌガ、去リナガラ我邦ガ朝鮮ニ對スルノ大方針ニ至ツテハ、今日マデ一モ變ツタコトハナイト本大臣ニ於テハ確信致シテ居リマス。其證據ヲ擧ゲマスレバ、清國ハ其獨立ヲ主張シナガラ、朝鮮ノ外交ニ於テハ常ニ其責任ヲ避ケ、其内政ニ於テハ強テ之ガ干涉ヲ爲サント試ミテ、而シテ最モ朝鮮ト接近親密ナルノ交際ヲ結ンデ居ル邦ハ我邦ヲ除クノ外ニナイノデアリマスル。故ニ彼ノ干涉ハ常ニ我邦ト朝鮮トノ交際ノ妨ト相成ツタ。併シナガラ事小ナルモノニ於テハ一々之ヲ排除シテ行クト云フ譯ニハ參リマセヌカラ、或ハ始テ明治九年ニ我邦ガ使節ヲ派シテ彼ト貿易ノ條約ヲ締結シタ以來ノ事ニ就イテハ、諸君ニ於テ或ハ御非難ノ廉モアルカモ知レマセヌケレドモ、是ハ過去ノ小歴史ト存ジマスガ、遂ニ昨年ノ如キニ至ツテハ、如何ニモ朝鮮東學黨ノ叛亂ヲ名トシ、且ツ其叛亂ノ起ル以前ニ當ツテノ朝鮮國ニ於ケル内情及支那ヨリ派出シテアル所ノ官吏ノ舉動、行爲ニ至ツテハ我邦ト朝鮮トノ交際ヲ阻隔セント務メタルコトノ證據ヲ明ニ認メタノデアアル。而シテ遂ニ朝鮮國王ガ清國ニ向ツテ出兵ヲ請フ、其上ニ寧ロ請フト云フヨリハ請ハシメテ而シテ此東學黨ノ叛亂ヲ平グルヲ名トシテ、以テ朝鮮ノ獨立ヲ滅シテ以テ、彼ガ屬國ノ實ヲ擧ゲント欲シタル證據ハ歷々トシテ明ニアルノデアリマス。是ニ至ツテ我邦ハ己ムコ

トヲ得ズ此干戈ヲ動かスト云フコトハ實ニ國家ノ重大ノ事ノミナラズ、又國トシテ輒ク動スベカラザルモノデアルト、本大臣ガ常ニ確信ヲ致シテ居リマスルガ、之ヲ忍ビ、之ヲ藐視シ、之ヲ傍觀スルニ至ツテハ遂ニ我邦ノ利害ノミナラズ、榮辱、寧ロ國威ノ消長ニ關係スルニ依ツテ、當初明治九年ノ條約ヲ結ンダ以來ノ大方針ヲ貫カザルコトヲ得ザルノ結果ニ迫ラレタノデアリマスル(ヒヤク)去ナガラ朝鮮國ハ天下衆人ノ知ルガ如ク誠ニ貧弱ナル國デアアル。而シテ其國必シモ富源ヲ缺イテ居ルトハ見ヌ。然ルニ之ヲ開發スル所ノ手段方法ガ少シモ成立ツテ居ラヌ。其國民モ亦無爲ニ安ンジ、姑息ニ安ンジ、因循ニ安ンジテ、唯一日ヲ安穩ニ暮シテ居ルニ過ギナイ。上下舉ツテ偷安ノ世ノ中デアアル。是ハ今日世ノ中ノ形勢ヲ少シモ知ラヌカラ起ルノデアラウト存ジマスルガ、斯ノ如キモノヲシテ獨立セシメントスル必要ハ獨リ朝鮮ノ爲ノミナラズ、此一輩水ヲ隔テタ所ノ我帝國ニ於テハ、大ナル關係ヲ持ツコトデアリマスルガ故ニ、此獨立ヲ扶持スト云フコトハ誠ニ帝國ノ國ヲ建テ、往ク以上ニ於テモ、誠ニ緊切ナル關係ヲ有スルコトト確信ヲシテオリマス。故ニ朝鮮ノ改革ヲ行ハシムルコトニ就イテモ則チ支那ト相提携ヲシテ其獨立ヲ扶持セシメタイト云フ意デアリマシタガ、前申ス通ニ支那政府トノ意向ハ相投合シマセヌ所ヨリ、我政府ハ獨任デ此責任ヲ取ツタノデアアル。而シテ他國ノ干涉如何ト云フニ至ツテハ、而モ孤弱ヲ憫ミ人ノ獨立ヲ扶持スルニ於テ、否ヲ容ル、國ガアル道理ガナイト確信ヲシテ居リマス(ヒヤク)此獨立ヲ扶持シ、獨立ノ實ヲ上グルニ於テハ頗

ル至難ナ事ト見マスル。去リナガラ之ヲ爲サズニ抛ツ譯ニ參ラヌ。唯今モ申ス通りニ、僅ノ三百萬圓位ノ金ヲ貸シテ、扶持シナケレバナラヌコトガ、先ヅ目前ニ迫ツテ居ルガ、而シテ其改革ハ何等ノ事デアアルカト云ツテ見レバ、嘗ニ京城ノ役人ガ入替ツタトカ、唯東學黨ガ平ライダト云ツテ、決シテ是デ一國ヲ興起セラル、モノデハナカラウト存ジマスルニ依ツテ、此朝鮮ノ叛亂ガ平定スルト共ニ、各地ノ政治ガ舉ツテコヌケレバナルマイ。又或ル運輸等ノ利便ニ依ツテ、以テ國民ノ富源ヲ開發スルノ便利モ奐ツテ來ナケレバナルマイ、又多數ノ兵力ヲ養フコトハ出來ナカラウガ、寧ロ一國ノ治安ヲ保ツニ足ルダケノモノハ備ヘヌケレバナルマイ。是等ノモノヲ着々歩ヲ進メテ行カシムルニ就イテハ、先ヅ彼ノ財源ハ如何デアルカ、是等ノモノヲ十分調べテ見ナケレバナルマイ。固ヨリ朝鮮ノ獨立ト云フ言葉ノ下ニハ、朝鮮人ヲシテ爲サシムルガ主眼デアアルガ、之ヲ爲サシムルニハ扶ヲ與ヘルト云フコトハ、必要デアラウ。自ラ茲ニハ主客ノ別アリト云フコトハ、又論ヲ俟タヌコト、存ジマス(ヒヤク)又改革ノ細目ニ至ツテハ未ダ一定セザル所ノモノモアラウシ、今ハ既ニ一定シテ居ル所ノモノモアルデアリマセウガ、是等ノコトハ特ニ條舉スルノ必要モナカラウト存ジマス。決シテ此方針ヲ我政府ニ於テハ取違ヘテハ居ラヌ。又取違フベカラズ。取違ヘ能ハザルノ理由ト信ジテ居リマスル。大要先ヅ右等ノコトト便宜シウゴザキマスガ、如何デゴザキマスカ。

長谷場代議士ニ對スル第二ノ答辯

朝鮮問題ニ就イテ起ル御質問ニ對シテ御答シマスルガ、私ハ今日ノ大事ノ責任ヲ取ツテ居ル位地デアリマスルニ就イテ、未然ノコトニ就イテハ御請合ヲ申スノデナイ。ソレハ即チ 至尊ノ聖斷ニ出ヅルコトニ據ラザルヲ得ヌ。事實上ヲ持テ御覽ニナツタナラバ分ツテ居ルデアラウ。又唯今ノ御言葉中ニモ少シ間違ガアル。是ハドウデアアル、日本國ガ朝鮮ノ獨立ヲ扶持シ、孤弱ヲ憫ム、何處マデモ獨立ヲ扶ケルト云フコトニ於テハ隊ヲ容レルモノガナカラウトハ言ハナイ。異存ヲ云フモノガナカラウトハ言ハナイ。誰モ同意スルコトデアラウト申シタノデアリマス。又今日マデ昨年事ノ起ツタ以來、何等ノコトガ生ジタノデアリマスカ、凡ソ外交上ノコト杯ハ國ト國ト相對シテ、日本ガ朝鮮ト相對シテ、與國ガ朝鮮ト相對シテ、日本ガ支那ト相對シテ、與國ガ支那ト相對スルト云フコトニ就イテハ、是亦別問題ノコトデアラウト存ジマスカラ、是ダケハ一言述ベテ置カザルヲ得ヌ。苟モ私ハ今日ハ 至尊ヲ代表シテ、此席ニ臨ンデ此日本國ノ安危存亡ニ關スル大事ヲ擔任シテ居ル以上ハ、無責任ナル口上ヲ吐カヌノミナラズ、決シテ苟モ侵スベカラザルモノハ侵サレマセヌノデアリマスカラ、是ダケハ一言此議場ニ述ベテ置カザルヲ得マセン。(拍手起ル)

第九回帝國議會ニ於ケル伊藤首相ノ演說

二十九年一月十日衆議院ニ於テ

長谷場純孝山川浩ノ質問

諸君、一昨年以來昨年ニ涉ル長期ノ日清交戦ニ關係スル事項ニシテ、兩國ノ間ニ交渉シタルモノハ一昨年廣島大本營ノ下ニ於テ臨時ニ召集セラレタル議會ニ向ツテ、當時ニ現ハル、所ノ狀況ハ一通リ御報道ニ及ビ置キ、尙ホ昨年ノ通常會ニ於テ外務次官ヲシテ當院ニ報告セシメテ置キマシタ。爾來平和ノ局ヲ結ブニ至ルマデノ御報道ヲ今日發端ニ於テ諸君ニ向ツテ致シタイト存ジテ居リマスルノデアリマスルガ、之ニ關聯スル所ノ書類等ハ頗ル多數ノモノヲ重ネテ居リマスルニ依ツテ、朗讀ノ煩ヲ省キマシテ、且ツ之ヲ口舌ノ上ニ述ベマスルノハ時間ヲ費スコトヲ恐レマスルニ依ツテ、一通リ媾和ノ始末ニ至リマスルマデノ間ノ報告ヲ書面ニ認メテ、諸君ノ參考ニ供スルタメニ當院ニ差出シテ置キマスルカラ、御熟閱ヲ望ミマス。

且ツ又日清兩國ノ間ニ起ツタル交戦ニ伴ツテ起ル所ノ種々ノ問題モ、今ハ殆ド結了ヲ告グルニ至リマシテ、諸君ノ御熟知ノ如ク今日ハ既ニ平和ノ天地ニ恢復シ、之ガタメニ復タ國家ノ上ニ現ハル、所ハ百事新面目ヲ呈シ、從ツテ將來ニ向ツテ計畫セザルベカラザル事柄ハ數多アリマスル。就中最モ必要トスル軍備ノ事ノ如キ、其他諸般將來ノタメ必要ナル事業ノ計畫ニ就キマシテハ、特ニ諸君ノ御注意ヲ請ヒ、併テ政府ニ於キマシテモ亦深ク現今我國家財政上ノ上ニ顧ミ、且ツ臣民ノ資力如何ヲ推測シテ之ヲ以テ急要ナル國務ノ規準ト致シマシテ、即チ豫算モ調製致シテ本院ニ提出シテアリマス。

今日ノ國勢上殖産興業或ハ教育運輸等ノ如キニ至ツテ、國家ノ富強ヲ増進スルガ爲メニ必要ナル事業ハ、政府國民共ニ力ヲ協セテ將來ノ發達ヲ計ラナケレバナラヌコトト信ジマス。

戦争ノ結果ニ依ツテ新ニ新領土ト相成ツタル臺灣ノ將來統治上ニ關係スルコトニ就キマシテハ、是レ亦頗ル重大ノ事件デアリマシテ、其統治ニ關係スル所ノ各種ノ問題ヲ決定シテ、而シテ適當ナル組織ヲ立テ、商工業及殖産業ノ事ニ就テハ將來ノ發達ヲ圖リ、我國民ヲ移住セシメテ、以テ將來大ニ其ノ發達ヲ期セナケレバナラヌコトデアリマス。此事未ダ昨今僅ニ平定ニナツタノミデアリマス故ニ、未ダ十分ニ準備ヲ整頓致スニ達シテ居リマセヌ。將來ニ就テハ政府議會ト共ニ謀リテ、此戦勝ノ結果タル記念物ハ何處迄モ十分ニ其統治及我目的ヲ貫クヤウニ盡力ヲ致サナケレバナラヌコトデアラウト存ジマス。

トデアラウト存ジマス。

從來ノ議會ニ於テ屢々御報道ニ及ンデ置キマシタ通り、條約改正ノ事モ既ニ其功半バニ至リ、又之ガ實施ヲ要スルノ時期モ甚ダ遠カラズト存ジマスガ、之ニ就テハ我社會上ニ於テ必要トスルノ準備ヲ勉メテ遺算ナキヲ期セネバナラヌト信ジマス。

畢竟我國家ノ上ニ現ハル、所ノ現象、戦争以前ト今日トハ實ニ同日ノ談デハナイト存ジマスルガ、是ハ上ハ 至尊ノ盛徳日ニ躋リ、威武維レ揚リ、從ツテ我國民ノ勤勉忠勇ニシテ、以テ國家ニ報ズルノ厚キ、加フルニ國民ノ代議士タル諸君ノ當時 宏猷ヲ翼賛セラレ、而シテ其功績ノ現ル、所今日ニ至ツタモノト存ジマス。今日ノ我國家ノ地位ヨリ顧ミマスルト云フト、將來ニ於キマシテハ東洋ノ全局ニ關スルコト頗ル重大ナル位地ナリト考ヘマス。

冗長ナガラ一言過去ノ歴史ニ就テ御話ヲ申シテ置キタウ存ジマスガ、我帝國海外諸國ト交際ヲ開キマシテ以來僅カニ四十有餘年、鎖國ノ論ガ一轉シテ、今上陛下ノ登極ト共ニ開國ノ 宏謨一定シ、封建ノ制ヲ廢シテ郡縣ノ治ヲ布キ、是ト同時ニ我國民ノ地位ハ教育及其職業ハ勿論、衣食住ニ至ルマデ均一ニ自由ヲ享有シ

(此時「聽エマセヌカラ大聲デ願ヒマス」ト呼ブ者アリ)

社會普通ノ秩序ヲ保有スルノ外ハ國家之ヲ待ツニ城壁ヲ以テセズ、竟ニ今日ノ盛況ヲ呈スルニ至

ツタモノト信ジマス。今日ノ事既ニ然リ、將來ノ事復タ上下一致致々トシテ勤勉國家ノ爲メニ忘ルコトナクンバ、我前途ニ於テハ國運ハ進ムコトアツテ退クナシト確信致シマス。

此過去ノ歴史ニ徴シテ見マスレバ、國家及國民ノ進歩ハ僅々數十年ノ間ニ於テ非常ナル長足ノ進歩ヲ致シタト申スヨリ外ハゴザリマセヌ。要スルニ國民ノ勤勉ニ基クト言ハザルコトヲ得ズ。是ニ就キマシテハ益々將來ノ進歩ヲ計リマシテ、又憲法政治上ニ於キマシテモ、國民ノ發達ト相伴フテ相戻ラヌヤウニ、政府モ是ガ爲メニ力ヲ盡シ、諸君ニ於テモ亦御盡力アランコトヲ希望シテ已マヌノデアリマス。故ニ政府ニ於テハ胸襟ヲ開イテ十分ニ諸君ト國家前途ノ計畫ヲ御相談致ス積デアリマス。畢竟國家ノ發達ハ國民ノ力ニ依ラザルコトヲ得ズ。而シテ目下ノ急要タル豫算及諸法律案ハ既ニ本院ニ提出シテアリマスルニ依ツテ、十分ニ審議ヲ盡サレテ而シテ協賛ノ任務ヲ盡サレンコトヲ冀ヒマスル。

總理大臣ノ演說ニ對スル質問

長谷場純孝 本員ハ總理大臣ニ就イテ説明ヲ求メタイコトガアリマスカラ、發言權ヲ與ヘラレンコトヲ。

楠本議長 説明ヲ請フト云フ先例モアリマスカラソレデハ、

長谷場純孝 唯今總理大臣ノ御演說ノ中ニ、彼ノ明治二十七年以來續イタ誠ニ帝國未曾有ノ大事件ハ其局ヲ結ンダ爲メニ、其事ニ就イテ吾々ハ詳細ナル御報道ガアルコトト思ヒマシタ所ガ、是ハ書面ニ認メテ廻スト云フ御言葉デゴザキマシタ。ソレデ書面ヲ手許ニ御廻シニナツタ以上ハ一讀ヲ致シマセウ。併シ先ヅ口頭デ詳シク御述ニナルコトト思ツタノニ、斯ノ如キ御演說デハ失望ニ堪ヘナイ譯デアリマス。唯今ノ御演說中ニ胸襟ヲ開テ十分ニ諸君ト相談スル積デアルト云フ言葉ガアツタ。誠ニ斯克アルベキ筈デアル。ソレニ就イテ私ノ説明ヲ請フモノハ、總理大臣ガ第八議會ニ於テ、此立法部衆議院ノ演壇ニ於テ述ベラレタル所ノ言葉ト、其征清ノ 詔勅ト其他ノ事ノ事實ニ依ツテ相違シテ居ル事ガアル。是ハ則チ大事ナ事デアルカラ直接ニ説明ヲ求メテ置カナケレバ、吾々ハトモ疑ヲ存シテ居ル。デ、ソレハ何デアルカト申シマス、先ヅ第八議會、即チ昨年二月二十二日ニ於テ總理大臣ハ彼ノ朝鮮ニ向ツテ三百萬圓ノ金ヲ貸スコトニ就イテノ演說ヲサレマシタ。其時ニ當ツテ本員ハ少シク疑フ所アツタニ依テ總理大臣ニ向テ説明ヲ求メタ。其説明ニ對シテ總理大臣ノ演說サレタ言葉ト、世間ニ發表シタ所ノ事實ガ確ニ撞着シテ居ルノデ、孰レガ事實デアルカト云フコトヲ明ニ承リ置カナケレバナライ。此ノ疑ノ事ハ即チ速記録ニ明記シテゴザリマスカラ、茲ニクダクシク申サナイデモ宜シイ。即チ私ハ政府ガ朝鮮ニ對

スル政策ハ朝令幕改デアルヤウニ思フト云フコトヲ申シタ所ガ、大變伊藤總理大臣ガソレニ激昂ノ色ヲ顯ハシテ、朝鮮ト修交條約ヲ結ンダ以來、政府ハ終始一貫ノ方針ヲ採ツテ誤ラナイト云フコトヲ明言サレタノデアアル。ソレカラ私ハソレニ答ヘテ、サウ云フ事ヲ承ツテ誠ニ安心シタト云フツテ居ツタ。所ガ其後ノ事實ト云フモノガ甚ダ不明瞭デアルト云フコトハ、サウシテ其二十一日ノ演說中ニ、朝鮮國ハ我帝國ガ獨力以テ之ヲ扶持スルモノデアルト云フコトヲ明言サレテアル。ソレハ總理大臣ノ言ハル、ノミナラズ、征清宣戰ノ 詔勅ニモ明ナルコトデアアル。然ルニ此桑港週報ト云フ新聞ニデス、日本ノ政府カラ亞米利加ノ公使ニ與ヘタ所ノ訓令ヲ掲ゲテアル。ソレヲ日本ノ新聞ニ記載シタ所ガ、ソレヲ政府及外務省ハ取消サナイトシテ見レバ果シテ是モ事實デアラウト吾々ハ疑フノデアアル。是ガ若シ事實デアルトシタナラバ、前ノ宣戰ノ 詔勅ト、ソレカラ總理大臣ガ朝鮮ヲ獨力之ヲ扶持スルト云フコトヲ言ハレタ言葉ト全ク相撞着シテ居ルデハナイカ。則チソレヲ茲デ明ニ讀ミマスレバ斯ウ云フ文章ヲ書イテアル。日本政府ガ米國駐在ノ日本公使ニ與ヘタ訓令ト云フモノハ、

貴官ハ我朝鮮ニ於ケル前途ニ就キ合衆國政府ニ左ノ趣意ヲ通告スベシ。日本軍隊ハ今我公使館各領事館及我臣民ヲ保護シ、且ツ尙ホ又遼東半島占領中我軍隊トノ必要ナル聯絡ヲ維持スルタメ、朝鮮ニ屯在ス後者ノタメニ屯スル兵士ノ數ハ更ニ多數ナリ。此軍隊ヲ屯在セシムルノ必要

ハ無論遼東半島撤兵ト同時ニ止ムベキヲ以テ、其時ニ至ラバ兵隊ノ多半ハ朝鮮ヨリ撤去スベシ。日本政府ハ既ニ改革ノ事業ニ着手シタル朝鮮政府ガ、縱令我軍隊ヲ撤去スル後ト雖モ能ク秩序ヲ維持シ、且ツ外人ヲ保護シ得ンコトヲ望ム。日本政府ハ此外ニ目的ナキヲ以テ、朝鮮ニ於ケル日本軍隊ノ屯在ヲ延期スルヲ欲セズ。且斯ル責任ヲ免ル、ハ我最モ感謝スル所ナリ。朝鮮ニ關スル我日本政府ノ政略ハ無干渉政略ナリ。我政府ハ喜ンデ他ノ諸強國ト共ニ等シク戮力スベシ。

前ニハ朝鮮國ハ獨力ヲ以テ扶持スルト云フコトヲ明言シナガラ、此訓令ノ書面ニ依レバ末文ニ我日本政府ノ政略ハ無干渉政略ナリ。政府ハ喜ンデ他ノ諸強國ト共ニ等シク戮力スベシト云フ。私ハ茲ニ於テ大ニ惑フ。若シ果シテ是ガ誤ナラバ我日本ノ新聞ニ外國新聞ヲ譯載シタナラバ直チニ政府及外務省ハ此新聞社ニ向ツテ取消ヲ命ジナケレバナラヌ筈デアアル。然ルヲ今日マデ此記事ニ向ツテ取消ヲ命ジナイト云フコトハ、吾々ハ是レ必ラズ事實デアルト云フコトヲ思ハナケレバナライ。果シテ是ガ事實デアルトシタナラバ、前ノ帝國ガ朝鮮ヲ獨力デ扶持スルト言ツタコトト、全ク撞着シテ居ル。諸強國ト共ニ朝鮮ノ事ヲヤラウト云フノト、獨力デヤラウト云フノハ甚ダ撞着シタコトト存ジマス。其他朝鮮ノ事ニ就キマシテハ、果シテ私ガ朝令幕改ト言ツタ言ノ不幸ニシテ誤ラナイト云フコトヲ私ハ益々信ジテ來ル所ノモノデアアル。其事實ヲ一々列舉シマシタナラバ誠ニ枚舉スルニ

違ナイ。其事實ノ凡ソト云フモノハ、最早既ニ帝國々民タルモノハ飽クマデ承知シテ居ル事デア
カラ、私ハ茲ニ一々事實ヲ枚舉スルニ違ガナイト思フ。必要ハナイト思フ。唯先ヅ申シタナラバ、
井上公使ガ始テ朝鮮ノ國王ニ謁シタ時ハドウデアツタカト云フコトハ、其時ノ言葉ニ斯ウ云フコト
ガアル。日本 皇帝陛下ガ内務大臣ノ重職ナル馨ヲシテ國王陛下ノ朝廷ニ使臣タラシメ給フタル
ハ、深キ 叡慮アルコトナレバ、 陛下ニ於テモ馨ヲ顧問ト思召シ、十分ニ改革ノ實ヲ舉ゲラ
レタシ。公使ハ餘程強硬ノ政略ヲ執ツテ往カレタノデアアル。サウシテ二十七年ノ末ニ金鶴羽ノ暗殺
カラ韓廷ノ動搖ヲ來シ、王妃ノ左遷、内務法務其他ノ協辦ガ更迭シ、同妃ニ縁因アル者ガ此時出サ
ル、コトニナツタ。其時ニ當ツテ大變井上公使ハ激昂ヲシテ協辦更迭ノ一事ハ即チ大君主ニ於テハ
既ニ馨ノ御信任ナキモノト信ズルガ故ニ、先達テ呈シ置キタル二十條ノ案ヲ撤回致シマスルト云フ
コトマデ迫ツタ。餘程此時分マデハ強硬ノ政略ヲ執行ツテ居ツタノデアアル。然ルニ其後ノ事ハ如何
デアツタカ、其概要ヲ摘ンデ申シマシタナラバ、曩ニ大院君ト密着シ、後ニハ金宏集、其次ニハ閔
妃ノ廢妃、其次ニハ金朴ノ聯金内閣、其次ニハ朴泳孝ノ逃走トナリ、ソレカラ閔王妃トノ結托ト爲
リ、ソレカラ金閔聯立ト爲リ、ソレカラ閔ト露トノ結托ト爲リ遂ニ十月八日ノ事變ヲ惹起スニ立至
ツタノデアアルト云フモノハ、朝鮮ニ對スル所ノ方針ト云フモノガ一定シナイカラ、恰モ猫ノ眼ノ球
ノ如ク、遂ニ彼ノ國ニ在ル使臣ヲシテ十月八日ノ變ヲ起スノ止ムヲ得ザルニ立至ツタ譯デアルト私

ハ信ジマス。其他事實ヲ舉ゲマスレバ幾ラデモゴザリマスケレドモ、要スルニ私ガ第八議會ニ於テ
總理大臣ニ朝令暮改ノ疑ガアルト云ツタノニ、決シテ朝令暮改デナイ。朝鮮ハ我帝國ガ獨力ヲ以テ
扶持シテ往ク。往キツツアルト云フコトヲ此壇ニ於テ明言サレタ。然ルニ斯ノ如キ事實ガアリトシ
タナラバ、孰レガ果シテ正シイカ。孰ガ間違ツテ居ルヤト云フコトヲ當場ニ於テ明ニ御説明アラン
コトヲ希望致シマス。

楠本議長 總理大臣

(伊藤總理大臣演壇ニ登ル)

伊藤總理大臣 唯今ノ御質問ハ段々事柄ガ入組ンデ居ルヤウデゴザリマスカラ、要領ヲ摘ンデ書付
デ御出シ下サツタラ、ソレニ就イテ御答へ申スノ必要ガアルト存ズレバ御答ヲ申スコトニ致シマ
ス。

長谷場純孝 段々事柄ガ入組ンデ居ルカラ書付デ出シタナラバ説明ヲシヤウト云フ御話デア
ルガ、
併ナガラ私ハ素ヨリ質問ナラバ書イテ出シマス。唯今總理大臣各大臣ガ茲ニ臨マレマシタカラ誠
ニ好機會、殊ニ總理大臣ハ前キニ演說中ニモ胸襟ヲ披イテ十分ニ諸君ト相談スル積デア
ルト云フ
コトヲ明言サレタカラ、誠ニ好機會ヲ得タト思ツタカラ説明ヲ乞フタノデ、何ニモソ
ンナニ深イ
コトデハナイノデアアル。宣戰ノ 詔勅ニモアリ、ソレカラ第八議會、二月二十二日ノ總理大臣

ノ演說中ニモ、政府ハ帝國ノ獨力ヲ以テ朝鮮ヲ扶持シテ往クト言ハレタノニ、桑港ノ週報ニ我
日本政府ガ亞米利加ニ駐在スル公使ニ與ヘタ訓令ヲ掲ゲテ、ソレヲ我日本ノ新聞ニ掲ゲタノヲ、
政府及外務省ガ取消サヌト云フノデアル。是モ私ハ事實ト言ハナケレバナラヌ。ドチラガ事實
カ。諸強國ト共ニ朝鮮ヲ扶ケテ往クノカ。獨力デヤルト云フノカ。吾々ハ當局者ニアラザル以上
ハ是ハ疑ハナケレバナラヌ答デアル。是位ノ簡單ナ答辯ノ說明ハ當席ニ於テ出來安イコトデアル
ト思ヒマス。

(伊藤總理大臣演壇ニ登ル)

伊藤總理大臣 朝鮮ニ於ケル我駐兵ハ最初ヨリスノ如キノ大兵ヲ彼ノ地ニ駐メテ、異常ナル巨金ヲ
費ス積デナイ故ニ、目下ニ於テハ彼ノ朝鮮ニ必要デアツタ所ノ兵站司令ノ方ハ既ニ撤却致シテ居
リマス。

長谷場純孝 私ハ唯今ノ御說明ハ分リマシタガ、併シ私ノ說明ヲ請ヒマシタノハソレデナイ。ソレ
ハ唯今ノ御說明ハ御尤ナ話デアル。必要ガナケレバ餘計ナ金ヲ出シテ人ノ國ニ兵ヲ駐メテ置クヨ
リモ相當ノモノダケヲ置イテ、不必要ナモノハ事濟ンダナラバ國ニ歸スト云フコトハ當リ前ノコ
トデアル。ソレデハナイ。唯此ノ末文ニアル「我日本政府ノ政略ハ無干涉政略ナリ。我政府ハ喜
ンデ他ノ諸強國ト共ニ均シク戮力スベシ」是ハ第八議會ノ演說ニ撞着シテ居ル。孰ガ本當ノモノ

デアルカ之ヲ聽クノ必要ガアル。

高橋安爾 私ハ議長ニ伺ヒタイノデアリマスルガ、唯今ノ總理大臣ノ演說ニ對スル説明ト云フコト
デゴザリマセウカ、其趣意ヲ聽ケバ則チ單純ナル説明デアツテ、質問ノ可否ハ是ハ別問題ト致シ
マシテ、議長ハ演說ニナキ所ノ事項ノ説明ヲ求ムル場合ニ之ヲ許スト云フ慣例ハドコニゴザキマ
スカ、ソレヲ一ツ伺ヒタイ。

(此時發言ヲ求ムル者多シ)

楠本議長 暫ク議長ノ話ヲ御聽キナサイ。演說ニ對スル、

(此時「公平ニヤリ給ヘ」ト呼ブ者アリ)

其演說ニ對スル説明ガ他ニ奔ルガ故ニ、總理大臣ハ書面ヲ以テ差出シテ貰フナレバ答辯ノ必要ガ
アル時ニハスル。依ツテ質問ニシテ出シテ貰ヒタイ。即チ演說ノ場合ハ猶豫ヲ請求致サレタル所
ノ意志ト認メマス。

高橋安爾 私ハ總理大臣ノ答辯ヲ聽イタノデナイ、議長ニ慣例ヲ御尋致シタノデアル。

長谷場純孝 議長、慣例トカ云フ御話モゴザキマスガ、併シ私ハ總理大臣ノ演說ニ對スル説明ヲ請
フノデアル。第八議會ニ於テ總理大臣ガ當議場ニ於テ演說サレタ其事ヨリシテ、今日ニ聯絡シテ
居ルノデアル。併シソレハ唯今ノ議長ノ言葉ニ從ツテ書面ヲ以テ、

楠本議長 説明ヲ請フハ即チ慣例ガアル。慣例ニ齟齬スル所ガアレバ即チ答ヘルト答ヘザルトハ總理大臣ノ意志ニ在ル。

長谷場純孝 總理大臣ガ答ヘルコトガ出来ナイト云フナレバソレデ宜シイ。即チ政府ノ對韓政策ハ所謂豹變ノ政策ヲ行フ所ノモノデアルト云フコトヲ私ハ斷言スル。

工藤行幹 議長

楠本議長 最早其必要ハアリマセヌ。大藏大臣渡邊國武君。

(渡邊大藏大臣演壇ニ登ル)

尾崎行雄 工藤君ガ先キニ發言ヲ求メテ居リマス、況ヤ總理大臣ノ演說ニ對シテ、

楠本議長 後トニナサイ。

尾崎行雄 後トハ恠シカラヌ、大藏大臣ヲ暫ク御差止メナサイ。

(工藤行幹「渡邊大藏大臣未ダ發言權ナシ」ト呼ビ議場騷然)

(既ニシテ大藏大臣演說中、伊藤總理大臣將サニ議場ヲ去ラントス)

尾崎行雄 議長、總理大臣ヲ御留メナサイ。

伊藤總理大臣 議長ハ出入ヲ止メルノ權利ハアリマセヌ。

(遂ニ去ル)

明治二十九年一月十一日貴族院ニ於テ (第九議會)

諸君、從來ノコトニ附キマシテハ戰爭ニ伴ツテ起ツタ所ノ外交ニ關係スル所ノ事件ヲ曾テ廣島及ビ昨年ノ議會ニ於テ報道致シテ置キマシタ。爾來ノ報告ヲ諸君ノ前ニ提出シテ御參考ニ供スル積リデアリマス。然ルニ何分多數ノ公文等ヲ重ネテ居リマスカラ、一々之ヲ口頭ヲ以テ述ブルノ煩ヲ省キ、書面ニ認メテ差出シマスルデゴザキマスカラ後ニ於テ御一讀ヲ煩ハシマス。

大體ノ所見ハ昨日衆議院ニ於キマシテ陳述ニ及ビマシテゴザキマスニ依ツテ、自カラ貴聽ニ達シタコトト信ジマスガ、重ネテ同様ナル旨意ヲ一通リ諸君ニ陳述致シマス。日清兩國ノ交戦ニ付キマシテハ實ニ幾ド一年ノ長期ニ渉ル戰爭ヲ繼續スルコトヲ得マシタノハ、全ク上下一致ノ力ニ依ルト信ジマスル。遂ニ當時敵國タル清國ヨリ和ヲ請フニ至ツテ、媾和ノ談判ヲ開キ、昨年ノ四月ニ於テ双方調停ノ上、兩國ノ友誼ヲシテ故トニ復セシムルコトヲ得マシタ。

是ニ關係スル所ノ數多ノ重要ナル事件モ、今ハ大略此結了ヲ告ゲマシタノデアリマス。今日ニ至リマシテ尙ホ將來ノコトニ深く勘考ヲ及ボシテ見マスレバ、漸ク一事ガ治マレバ從ツテ復タ一事ガ附帶シテ起ル譯デアリマスルニ依ツテ、前途ノ形勢ニ於キマシテハ重要ナル問題ハ屢々起ルコトト

信ジマスルノデアリマス。

然ルニ今日ニ方リマシテハ、目下ノ急トスル所ハ今日平和ノ恢復ト相成リマシタ以上、實ニ是ヨリ進ンデ國力ヲ培養スルト云フコト、最モ今日ノ急要ト信ジマス。一體戰爭ト云フ事柄ハ、申スマデモナク多クハ國力ヲ消費スルコトデアリマスガ、平素ニ在テ國力培養ノ力ニ依ツテ、即チ國家ノ資力ヲ増進シ、富彊ヲ計ルハ平素ノ務メデアリマス。即チ今日ノ平和恢復ノ後ニ於テ尤モ注意ヲ要シマスルノハ、實業ヲ獎勵振作スルト云フコトデアリマス。故ニ政府ハ是ニ付イテハ十分ノ力ヲ出シテ以テ、舊ニ倍スルノ國力ヲ養成シナケレバナラヌト考ヘマス。

併ナガラ此數十年、即チ僅カニ二十八九年ノ間ノ王政復古以來ノ歴史デアリマスルガ、就中明治十七八年以來ノ進歩ト云フコトニ就イテ見マスルト云フト、國力ノ増進シタルコトモ異常ナモノト察セラレマス。是必竟人民ノ勤勉ト、且ツ此教育學術ノ效果ト存ジマス。今ハ進ンデ我國民ハ政府ナル教師ヲ俟タズシテ十分ニ進歩スルコトノ有様ヲ確カニ認ムルノデアリマス。

此實業ノ進歩上ノコトニ至ツテハ、地方人民ノ盛ナルコトハ實ニ賞揚スルニ餘リアリト存ジマス。併ナガラ政府ニ在ツテモ常ニ是ガ注意ヲ怠ラズシテ、益々進歩セシムルコトニ盡力致サンケレバナラヌコトハ論ヲ待チマセヌ。其ノ事柄ト云ヘバ如何デアルカト云フト、即チ立法行政上ニ於テ尤モ注意ヲ要スルコトデアラウト存ジマス。

是等ノコトハ私ガ殊更ニ冗長ニ述ベマセヌデモ、諸君ハ固ヨリ御熟知ノコトデアリマスガ、茲ニ諸君ノ前ニ御注意ヲ仰ガント欲スルコトガアリマス。即チ臺灣ノ新領地ノコトデアリマス。此臺灣新領地統治ノコトハ頗ル重大ナ事ト信ジマス。併ナガラ又之ヲ宜シク將來ノ統治方法ニ攷ヘ、行政ノ實ヲ舉グルニアラザレバ、容易ナラヌ面倒ヲモ惹起スルデアラウト考ヘマス。此一點ニ就キマシテハ尙ホ將來ニ於テ十分御商議ニ及ブコトモアリマセウガ、第一ノ問題ト申シマスルノハ、臺灣ハ御承知ノ如ク内地トハ大ニ異ナル所デアリマス。是ニ居住スル人民ノ種類モ幾多ニモ種類ヲ分ケテ居ルノデアリマス。差掛ル所多數ノ人民ハ即チ支那ノ人民デアリマスルガ、此人民モ多クハ廣東福州近傍ノ隨分惡漢ノ徒ガ移住ヲ致シテ、其性甚ダ慍悍ナ人民デアリマシテ、一通リノコトデハ之ヲ統御スルコトガ出來ナカラウト存ジマス。殊ニ一方ニ於テハ貿易ノ開ケテ居ル所デアリマスニ依ツテ、其數甚ダ僅少デアリマスルケレドモ、外國人歐米人モ來テ居リマス。又臺灣ノ半ト云フモノハ未開ニ屬スル所デアリマスルニ依ツテ、彼ノ生蕃ノ棲息スル所ノ如キニ至ツテハ、最モ統治上ニ難キヲ見ル所デアラウト思ヒマスカラ、之ニ適當ナル制度ヲ施シ、之ニ適當ナル政ヲ行ハナケレバナラヌ譯デアリマセウ。之ニ就イテハ立法上ノ問題、行政上ノ問題、之ヲ悉ク今日ノ急務トシテ定メナクテハナルマイト存ジマス。又此臺灣ノ事務ヲ本邦ニ於テ管理スル所ノ官衙ト云フモノモ必要デハナイカト考ヘマス。而シテ又財政ノ一點ニ就イテモ餘程重大ナル事柄ト考ヘマス。臺灣ハ漸ヤ

クニシテ昨今ニ鎮定シタ位ノコトデアリマスルニ依ツテ、未ダ詳細ナル取調ヲ致スコトモ出来マセヌガ、何レ遠カラズシテ一通リノ調査ヲ了リマシタラ、將來ノタメニ計畫スル所ヲ定メナクテハナラヌト存ジマス。

第一ニ唯今モ申ス通りニ財政上ノコトナドハ頗ル重要ナコトデアリマスルガ、先ヅ目下ノ所ヲ取ツテ見マスルト云フト、臺灣ヨリ國家ニ收入スルコトヲ得ルデアラウト考ヘル、歲入ト云フモノハ到底以テ臺灣ノ統治ニ充ツルコトハ出来ヌノデ、餘程其數ハ少額ナモノデアラウト思フ。特ニ此言語不通ニシテ風俗ノ殊ナリ、人種モ違フノミナラズ、是マデ支那デ管轄シテ居ルニ就キマシテモ、十分ニ國土ノ發達ヲ圖ルコトガ出来マセヌニ依ツテ、道路通信ノ便モ亦頗ル缺イテ居ル。故ニ之ヲ統治シ、之ヲ鎮壓シテ行クニ就イテハ、十分ナル兵力モ要シ、且又平素ノ警察取締等ニ就イテモ連モ本地ノ比デハナカラウト存ジマス。併ナガラ臺灣ヲ此大戦争ノ結果ニ依ツテ我が新領地ト爲シタル以上ハ、十分ニ之ニ力ヲ盡シ、隨ツテ大ニ我が人民ヲ之ニ移殖シテ、以テ將來ノ發達ヲ謀ラナケレバナラヌコトハ論ヲ俟チマセヌ。此問題ハ餘程大切ナルコトト存ジマスルニ依ツテ、特ニ諸君ノ御注意ヲ願ヒマスルノデゴザキマス。

加之北海道等ノ如キモ内地ト同様ニハ開ケマセヌデアリマスルカラ、是等ノコトヲ特ニ御話シ申ス所以ノ主意ハ、唯今申シタ通りニ、此内地ハ餘程ハヤ人民進取ノ氣象モ富デ、實業上ノコトモ

段々進歩シテ參リマスルケレドモ、北海道及臺灣ノ新領地ノ如キニ至ツテハ、政府が大ニ與ツテ之ニ力ヲ致サナケレバナラヌト云フ區別ガアリマスルノデアリマス。其事ニ關シテハ尙ホ追々上下兩院トモ熟議ヲ盡シテ、以テ將來ノタメニ經畫セナケレバナラヌト存ジマスカラ、此事ヲ一言諸君ノ前ニ陳述致シテ置キマス。此報告書ハ議長ノ手許ニ差置キマスルニ依ツテ御熟閱ヲ願ヒマス。

山川浩ノ質問

山川浩 總理大臣ニ質問ガアリマスルガ宜シウゴザキマセウカ。
蜂須賀議長 宜シウゴザキマス。

山川浩 唯今誠ニ單簡ナ御演說デ、唯々内地臺灣若クハ北海道ノ施政ノ方針ノミ御説キニナツタヤウデアリマシタガ、日清戦争ニ溯ツテ遼東還附ノ顛末ハドウ云フコトカ、ドウゾ極詳シクハ承知セヌデモ宜シウゴザキマスガ簡單ニ御説明ヲ願ヒタイノデゴザキマス。

伊藤總理大臣 山川君ノ御質問ニ附キマシテハ遼東半島還附ノ顛末ノ大略ハ此報告書ニ載セテアリマスカラ御熟閱ニナリマシテ、尙ホ其質問ガアレバ尙ホ御答申スヤウニ致シマス。

山川浩 モウ一應、ソレナラバ宜シウゴザキマスガ、朝鮮ノ事ニ付イテノ今日マデノ經過ト、今後

政府ノ取ラル、方針ハドウ云フモノデアリマスカ。若シ又公衆ノ前デ御説明ニナルコトガムヅカシイナラバ、祕密會議ナリ何ナリデ御説明ヲ願ヒタイ。

伊藤總理大臣 朝鮮ニ就キマシテノ方針ハ是ヨリ以前屢々衆議院ナドニ於キマシテモ述ベマシタコトガアリマシタガ、此方針ト云フコトニ附イテ時々起ル問題ヲ悉ク網羅シ盡スコトハ出來ヌノデアリマス。方針ハ即チ動カヌノデアリマス。即チ其方針タル所以ノモノハ私ガ陳述セズトモ明瞭ニ御分リニナツテ居ルト存ジマスガ、朝鮮ヲシテ獨立セシムルト云フコトガ即チ我政府ノ方針デアリマス。ソレニ附帶シテ起ル事柄ハ時ニ依ツテ變遷ヲ致スノデアリマス。如何セン國モ活物、人モ活物デアリマスカラ、其動作ハ一定不動ノモノトハ參ラヌノデアリマスガ、方針ト御尋ニ相成リマスレバ今日ニ至ルモ尙ホ前日ト異ツタコトハアリマセヌノデアリマス。序ナガラ申述ベテ置キマスルガ、唯今山川君ノ御話ノ中ニ、北海道ト臺灣ノ事ノミヲ申シタト云フ御答ハ至極御尤デ、併ナガラ是ハ昨日衆議院ニ於テ述ベマシタコトヲ成丈重複致サヌヤウニシテモ、新聞ナドデ御覽ニナルコトガ出來ルカト存ジテ、其外ノ事ハ申シマセヌノデゴザキマス。

山川浩 唯今朝鮮ノ事ニ就イテ方針ト云フモノハ朝鮮國ヲ獨立サセル方針デアツテ、是ハ固ヨリ決シテ動カナイト云フ御説明デ能ク分リマシタ。分リマシタガ其獨立サセルニ當ツテドコマデモ獨立ニ對シテハ如何ナル困難如何ナル強國ノ干涉ガアツテモ、苟モ朝鮮ノ獨立ニ就イテハドコマデ

モヤリ遂ゲル御精神デアリマスカ。

伊藤總理大臣 唯今ノ御質問ニ就キマシテハ從來執ル所ノ方針ト、又將來ニ於テ如何ナル事情ガ起ルトモ、政府ハ其方針ヲ執ツテ行ク積リデアルカト云フコトデアリマスルガ、私ハ從來執ル所ノ方針ハ述ベマシタ。今日モ尙ホソレヲ繼續致シテ居リマス。併ナガラ他國ノ獨立ヲ認メ、其獨立ヲ維持スルニ助力スルトカ云フコトハ凡ソ度合ノアルモノデハナイカト考ヘマス。私ハ直ニ御答申スコトハ出來ルガ、帝國ノ爲メニハ運命ヲ犠牲ニ供スルト云フコトハ諸君ニ於テモ決シテ一言ノ御不同意モナイコトト存ジマスガ、他國ノ盛衰獨立不獨立ノコトニ就キマシテハ、將來起ルコトノ關係如何ヲ見、而シテ之ニ處セザルヲ得ヌコトハ是レ亦御不同意ノナイコトト存ジマス。左様ナコトヲ此ニ於テ斷言スルノ必要ハナイコトト存ジマス。是ハ山川君ニ於テモ御了解ノコトト存ジマス。決シテ其方針ヲ、如何ナル事情ニ遭遇スルモ此方針デドコマデモ繼續スルト云フコトハ私ハ此ニ於テ斷言スルノ必要ヲ見マセヌ。

憲法第六十七條歲出ニ關シ衆議院ト往復書類

別紙ノ通本日本院ニ於テ議決候條此段及御通牒候也

明治二十六年一月十六日

衆議院議長 星 亨

内閣總理大臣臨時代理

内務大臣伯爵 井上 馨殿

本日政府ガ豫算案修正案中憲法第六十七條ニ關スル費額ニ對シ不同意ヲ表シタリト雖、本院ハ本案ニ對シ別ニ再考ヲ要セズ。政府ニ向ヒ更ニ同意ヲ求ムベシ。

政府ハ憲法第六十七條ノ歲出ニ關スル衆議院ノ要求ニ對シ不同意ヲ表シタルニ拘ラズ、今復タ政府ノ再考ヲ求メラレタルモ、政府ハ斷ジテ不同意ヲ表セザルヲ得ズ。右及覆牒候也

明治二十五年一月十七日

内閣總理大臣臨時代理

内務大臣伯爵 井上 馨

衆議院議長 星 亨殿

別紙ノ通本日本院ニ於テ議決候條別紙決議相添豫算修正案更ニ及送付候也

明治二十五年一月十七日

衆議院議長 星 亨

内閣總理大臣臨時代理

内務大臣伯爵 井上 馨殿

衆議院書記官長 水野 遵

明治二十六年年度豫算案ニ就キ、本院ハ諸般ノ費目ニ修正ヲ加ヘタルハ現在我國ノ民度ヲ斟酌シ興論ヲ代表シタル正當ノ所爲ナリト確信ス。政府若シ之ニ同意セザルトキハ立憲政體ノ本旨ニ基キ斷然處決スル所ナカルベカラズ。因テ本院ハ豫算修正案ヲ政府ニ送致シ、本日ヨリ五日間休會シテ政府ノ處置ヲ待ツ。

渡邊大藏大臣演說

諸君 聽ク所ニ依レバ河野君ガ動議ヲ出サレマシテ、是ハ承ツタノデ、或ハ聽キ違ヒガアルカモ分リマセヌガ、聽ク所デハ修正案ヲ政府ニ送致シ、本日ヨリ五日間休會シテ政府ノ處置ヲ待ツ。斯ウ云フ動議ヲ出サレテ、只今ノ議事中ト承ハリマスル。休會セラレ、ハ固ヨリ諸君ノ自由デアリマヌルカラ、本大臣ガ何モロヲ容レルコトハナイ。併ナガラ茲ニ一言政府ノ趣意ヲ明言シテ置カネバナラヌコトガアリマス。政府ハ憲法ノ特條ニ從ツテ憲法ノ明許シタル權能ヲ實行シマシタ。然ルニ諸君ガ自ラ豫算議事ノ進行ヲ止メテ、政府ノ同意セザル修正案ヲ再ビ政府ニ送附シテ、政府ノ處置

ヲ待ツト斯フ云フコトヲ決議セラレマシテモ、前ニモ申シタ通り、政府ニ於テハ憲法ノ明條ニ從ツテ不同意ヲ表シタノデアアル。即チ其許ス所ノ權能ヲ實行シタノデアリマスカラ、政府ガ自ラ處置スルコトハナイノデアアル。此旨ヲ一言明言シテ置キマス。

憲法第六十七條ノ歲出ニ關シ、政府ハ既ニ憲法ノ明許セル權能ニ依リ不同意ヲ表シタルニ拘ラズ、政府ノ再考ヲ請求セラレタルニ因リ、政府ハ再應不同意ヲ表シタルニ、今復五日間休會シテ政府ノ處置ヲ待ツベシトノ決議通牒ニ接シタリ。政府ハ憲法保障ノ歲出ニ付不同意ノ理由竝ニ政府自ラ處置スルコトナキ理由ハ既ニ之ヲ辯明シタル以上、政府ノ意見ハ終始一貫更ニ異動ナキ事ヲ斷言ス。

右及覆牒候也

明治二十五年一月十七日

內閣總理大臣臨時代理

內務大臣伯爵 井上 馨

衆議院議長 星 亨 殿

憲法第六十七條歲出ニ關シ衆議院ト往復書類

井上臨時首相ノ演說

一月十三日衆議院ヨリ憲法第六十七條ノ費額ニ付政府ニ同意ヲ求メタリ。
同十六日井上臨時總理大臣ハ左ノ演說ヲ爲セリ。

諸君、今ヤ明治二十六年度ノ豫算ハ經常部臨時部トモニ議了ニナリマシテ、憲法第六十七條ノ
歳出ニ付キ去ル十三日政府ノ同意ヲ求メラレマシタ。

仍テ本大臣ハ憲法第六十七條ノ歳出ニ付政府ノ見ル所ヲ陳述シ置キ度ウ存マス。

扨憲法第六十七條ノ歳出、即チ大權ニ基ケル既定ノ歳出、法律ノ結果ニ因ルノ歳出、及政府ノ
義務ニ屬スル歳出ニ付キマシテ政府ノ要求シタ金額ハ「六千三百九十五萬六千六百十五圓餘」
デアリマシテ、此内政府ノ義務ニ屬スル歳出ハ別段削減ニナリマシタ形蹟ヲ認メマセンガ、既
定ノ歳出ト法律ノ結果ニ因ルノ歳出ハ査定案ニ於テ「六千五百九十九千七百八十一圓餘」ニ成ツ
テ居リマスカラ、此二費額ノ削減ハ實ニ「三百四十四萬六千八百三十三圓餘」デアリマス。
抑々既定歳出ト云ヘバ、憲法ニ於テ保障セラレタル歳出デアリマスコトハ諸君ノ御熟知ノ通り
デアリマス。シテ憲法ハ何ガ故ニ斯様ナル費額ヲ保證スルノ必要ガアルカト申スニ、即チ國家

ト云フモノハ永久ノ生存ヲ有スルモノデアリマスカラ、其生存ニ必要ナル費用ハ、年々新ニス
ル毎ニ生死存廢常ナキ様ナモノデハナリマセン。言ヒ換レバ國家ガ永久生存ノ需要ヲ充タス爲
ニ適當ナル費額ヲ要セザルヲ得ヌ譯ケデアリマス。ソウシテ永久生存ニ必要ナル費額ハ國是ニ
隨ヒ諸般ノ政治ヲ施ス爲ニ供スルモノデアリマスカラ、年々歳々異動常ナキ筈ノモノデアリマ
セヌ。

若シ口ニ進歩主義ヲ取ルト云ヒチガラ、其進歩ヲ促ス所ノ供給ヲ絶チマシタナラバ如何デアリ
マス。必ズ進歩ノ仕様ハアリマスマイ。其實際ハ適應スル費額ヲ酷ク削減シマシタナラ、當ニ
一定ノ進行ヲ期スルコトノ出來ヌノミナラズ、反對ニ於テ國運ハ退歩セネバナラヌコトハ當然
ノ理デアリマス。サレバ永久ニ生存ト國家ヲシテ常ニ一定ノ方角ニ向ツテ進歩セシメント望ミ
マスナラバ、必ズ之ニ應ズルノ資料ヲ供給セネバナリマセヌ。之ヲ要スルニ憲法第六十七條ガ
既定ノ歳出ヲ保障シ、政府ノ同意ナクシテ廢除削減ヲ許シテナイ譯ハ、此資料ヲ以テ常ニ國命
ヲ維ギ、一張一弛急變激革ノ患ナカラシムルニアルハ本大臣ノ疑ハザル所デアリマス。扨本年
提出シマシタル既定歳出ハ如何ナルモノカト云フニ、即チ二十四年度ノ豫算ニ於テ既ニ一タビ
帝國議會ノ協賛ヲ經タルモノデアリマシテ、是ハ憲法保障ノ費額トシテ議會ノ多數ガ協賛セラ
レタル費額ノ範圍内ニ於テ提出シタルモノデアリマス。然ルニ此ノ如キ非常ナル急變激革ヲ行

ヒ、直ニ之ヲ次年度ノ初メヨリ實行セシメンコトヲ望マル、ニ至テハ寧ロ國家ノ進運ヲ阻遏スルモノト認メザルコトヲ得マセン。

次ニ申シタイコトハ、法律ノ結果ニ因ルノ歳出デアリマス。此法律ノ結果ニ因ルノ歳出モ亦憲法上ニ保障セラレタルモノデアリマシテ、乃チ憲法ト法律トハ行政及財政上ニ於テ至高ノ標準ヲ示スモノデアリマスカラ、行政ト財政トハ常ニ之ニ從屬セネバナラヌモノデアリマス。隨テ豫算ハ憲法ト法律トニ準據シテ憲法上及法律上國家ノ制度ニ必要ナル資料ヲ供給スルコトハ當然ノ原則デアリマス。故ニ其制度ガ存スル限リハ政府ハ之ヲ實行スルノ責任ヲ有スルモノデアリマスカラ、或ル區域内ニ於テヨリ外ハ憲法及法律ニ對シ、決シテ同意ヲ表セラレヌ譯ノモノデアリマス。然ルニ諸君ノ日來議シテ居ラレタ處ヲ見ルニ、或ハ將來ニ其法律ヲ變更スルト云フノ見込ヲ以テ、既ニ法律ヲ變更シタルカノ如キ削減ヲ決行セントセラレタルモノデアリマス。以上ハ右ノ二種ノ歳出ニ付テ憲法ガ保障シタ所以ヲ述ベタノデアリマスガ、政府ハ行政各部ノ改良ヲ計ラヌ積リデハ決シテアリマセン。既ニ先頃モ當議場ニ於キマシテ、政府ノ方針ヲ表示シマシタ通り、將來出來ル丈ケノ整理改善ヲ期シテ居ル者デアリマス。サレバ憲法第六十七條ノ歳出ニ於テモ遠ク將來ノ利害ヲ慮リ、深ク行政機能ノ得失ヲ察シ、政府ハ務テ釐革ヲ前途ニ期シテ居リマス。殊ニ財政上ニ關涉スルモノニ付テ補益アリト認メマシタ時ハ、銳意熱心ニ實

行スル積リデアリマス。然レドモ前ニ述ベマシタ如ク、議院ガ右ノ二種ノ費目ニ付テ一時「二百四十四萬六千八百三十三圓餘」ノ巨額ヲ減殺シテ政府ノ同意ヲ求メラル、ニ於テハ、政府ハ一方ニ於テ行政機關ノ運轉ニ差支スルコトヲ確認シ、又一方ニ於テ法律施行ノ責務ヲ盡スコトノ出來ンコトヲ確認シテ居リマス。

又豫算全體ニ對スル、政府意見ノ概要ヲ茲ニ陳述センニ、先ヅ經常部ニ就テ云ヘバ政府ノ要求額ハ「七千五十九萬五千七百一十一圓餘」ナルヲ査定案ハ「六千五百六十八萬八千七百六十一圓餘」ニ減殺シマシテ其減額ガ「四百九十萬六千九百四十九圓餘」デアリマス。其各款項ニ付キマシテハ其ノ主務ノ政府委員ヨリ或ハ委員會ニ於テ、或ハ本會議ノ時ニ於テ夫々答辯ヲ致サセテ置キマシタガ、所謂査定案ハ一瀉千里ノ勢ヲ以テ通過シマシタ。尤政府ニ在テハ假令諸君ノ協賛ヲ經タル費額ト雖モ實際上ニ於テ出來得ル丈節約シテ剩餘ヲ得ル事ニ務ムベキハ政府當然ノ責務デアルガ、政府ハ出來ル丈ケ調査ヲ精密ニシテ省ケル丈ケハ省キマシタコトデアリマス。諸君記憶セラレヨ、政府ハ決シテ政費節減ニ不同意ヲ云フモノデナイ。政費節減ノコトハ諸君ノ注意ヲ待タズ、政府任意ヲ以テ充分成シ遂グルコトヲ期シテ居リマス。故ニ諸君ガ御承知ノ通り現内閣ノ組織以來、僅ニ數月デアリマスガ、其短キ月日ノ間ニ於テ出來得ル丈ケノ調査ヲ遂ゲマシタ譯デアリマシテ、漸次ニ最初ノ希望ヲ就立スル覺悟デアリマス。然ルニ經常部中ニ

於テ右ニ述ベマシタ如キ巨額ヲ一時ニ削減セラレマシテハ事實上差支エルコトニシテ、概ネ實行ノ出來ヌ注文ト申サネバナラス。

諸君ヨ、維新當時以來ノ 宏謨ハ何ンデアリマスカ。一定不動ノ國是ハ何ンデアリマスカ。謹ンデ 今上陛下ガ御登極ノ初メヨリ、帝國議會開會マデノ間ニ下サレタル 詔勅ヲ拜讀シマスレバ、内萬民保全ノ道ヲ盡シ、外列國ト對峙シテ國光ヲ中外ニ宣揚セントノ 大旨ハ終始一貫シテ居リマス。是レガ即チ一定不動ノ國是トナツテ居ル譯デアリマス。

左レバ 聖天子ノ宏謨ニ遵ヒ、先進諸氏ノ成緒ヲ繼ギテ、開國ノ主義ヲ取リテ進ムニ於テハ愈々文モ修メネバナラン、武モ張ラネバナラン、内ハ百般ノ制度ヲ整ヘネバナラン、外ハ列國トノ交誼ヲ厚フシテ國威ヲ耀カサネバナラン。隨テ倍々國力ノ發達ヲ期セネバナラント云フコトトナツテ來マシタ。サウシテ僅々二十餘年ノ間ニ於テ如何ナル進歩ヲ見マシタカト云フニ兵制教育ハ言フモ更ナリ、近年ニ至テハ運輸交通ノ便モ次第ニ開ケ、鐵道電信郵便等モ年ヲ追フテ繁盛ニ赴キマシテ、貿易上ニ於キマシテモ、初メハ利益ヲ彼レニ占メラル、有様デアリマシタガ、近頃ハ全ク我ニ利ヲ收ムルコトトナリマシタ。既ニ斯様ニ國家ノ力ガ發達シテ來ルニ隨ヒ、生産力モ著シク發達致シマシテ、以前ハ山間ノ僻陬デアツタ所ガ、今ハ即チ立派ナル生産力アル土地ト進化シテ參リマシタ。既ニ此ノ如ク世界各國ヲ驚カス程ナル珍ラシキ長足ノ進歩

ヲシタノデアルカラ、他ノ文明諸國ト愈々相共ニ進ンデ行カウト云フニハ倍々其準備ヲ急ニセネバナラン。要スルニ國力ノ發達ト伴フテ金ノ必要アルハ誠ニ明白ナル事實デアリマス。畢竟政府ハ維新中興以來上下ノ一致シテ國力ノ許ス限リ、此目的ヲ望デ進ミ來タノデアリマスカラ、苟モ此唯一ノ目的ニ反シテ國家ノ原力ヲ減縮スルノ虞アルモノニハ、二十年來駭々トシテ進歩主義ヲ取り來ツタ政府ニ於キマシテハ、反對ノ意ヲ表セネバナラヌ次第デアリマス。既往ニ於キマシテモ、此通りデアリ又將來ニ向ヒマシテモ愈々國力ヲ増進セネバナラヌトシテ見レバ、此上充分ニ文明ノ利器モ備ヘネバナラン、人物モ養成セネバナラン、其外有形上無形上ニ列國ト對比スルニ足ル丈ケノコトガナクテハナランコトハ言フ待チマセヌ所デアリマス。尤モ冗費ハ素ヨリ省クコトヲ努メネバナラヌガ、政費ハ一般ノ形勢ヨリ論ズルトキハ事物ノ發達ニ隨ヒ、又與國交渉ノ結果ニ伴フテ漸クニ増シテ行ク傾キアルコトハ、諸君ニ於テモ充分認メラレネバナラヌコトデアリマス。是ハ獨リ我國ノミデハナイ、何レノ邦國ト雖モ漏レ難キ數デアリマス。

試ニ本年提出シマシタ豫算ヲ御覽ニナレバ直チニ分リマス。從來ヨリモ歲出ノ増加シタコトハアリマスガ、是ハ總額ニ於テ幾許カ増加シタ譯デアツテ、其遣ヒ途ハ概ネ皆世運ノ進歩ト共ニ國家事業ノ發達ヲ謀ルニ於テ、必要止ムベカラザル費途ニ用キルモノデアリマス。然ルニ其發

達ノ爲ニ要スル費用マデモ削減セラル、ハ國家ノ爲メ甚ダ惜ムコトデアアル。例セバ文明ノ利器ト稱セラル、遞信費ニ付テ「八十一萬四千四百四十四圓餘」ヲ削減シテ將來其ノ進歩發達ヲ鈍ラサントスルノミナラズ、既ニ存立スルモノマデモ退縮セシメントスルガ如キハ、其他帝國議會ノ協賛ヲ經テ成立シタル繼續費マデモ削減セラレタル如キ、又勅令ニ基ク收納金ヲ削除セラレタル如キハ適當ノ議決ナリト認メルコトガ出來マセン。

臨時部ニ於テ政府ノ要求シマシタ高ハ「千三百十六萬四千二百五十五圓餘」デアリマシテ、査定案ハ「九百三十一萬三千五百八十八圓餘」トナツテ居リマスカラ、其減額ハ即チ「三百八十五萬六百六十六圓餘」デアリマス。今諸君ガ削減セラレタルモノノ内最モ著シキモノヲ云ヘバ、軍艦製造費ヲ否決セラレタコトデアアル。既ニ諸君ハ軍艦製造費ヲ否決セラレタル以上ハ海軍擴張ニハ反對カト云フニ、諸君ノ云フ處ヲ聞クニ海軍擴張ニハ決シテ反對デナイ、然ルニ諸君ハ一方ニ於テ擴張ノ必要ヲ求メナガラ、他ノ一方ニ於テ軍艦製造費ヲ否決セラレタルハ抑何等ノ理由ニ基キタル乎。政府ニ在テハ過日施政ノ方針中ニ於テ述ベタル通り、海軍ノ擴張ハ東洋ノ大局ヲ維持スル爲ニ、我帝國ガ獨立ノ運動ヲ遂ゲンガ爲ニ一日モ緩クスルコトノ出來ナイ急務中ノ急務ト信ジテ居リマス。

諸君ヨ、諸君ガ眞實ニ國家ヲ憂フルノ心ヲ以テ東洋ノ大勢ヲ見渡シ、顧ミテ我海軍ノ有様ヲ觀ラレタナラバ、本大臣等ノ喋々ヲ待タズシテ、海軍擴張ノ急務ナルコトヲ御感ジニナリマセウ。果シテ諸君ノ見ラル、所ガ此通りデアラナラバ、ナゼ軍艦製造費ヲ一モ二モナク否決セラレタカ、實ニ解シ難キコトデアアル。諸君ガ反對セラル、ニハ十分ノ理由ガナケレバナラヌ。今諸君ノ内此ノ如ク軍艦製造費ヲ否決セラレタル理由ヲ約メテ云ヘバ、或ハ急ニ十五萬噸ノ大計畫ヲ實行スベシト歎、或ハ海軍部内ノ整理ガ届イテナイカラ、今度ノ擴張案ニ同意ガ出來ヌトカ云フノ外ハアリマセン。併シ其整理ノ行キ届カヌト云フ口實ハ焦眉ノ急ナル海軍擴張ニ當テ箴メル程ノ値打ハ決シテ無イト考ヘマス。尤モ現内閣ハ前ニモ云ヒマシタ通り、當初ヨリ政務ノ改良ヲ期シテ居テ或ハ現ニ整理シツツアルモノモアリ、又或ハ將來整理セントシテ居ルモノモアリマスガ、取り別ケ海軍ノ如キニ至テハ將來大ニ釐革ヲ加ヘテ、愈々其整理ヲ圖ラネバナランコトハ、諸君ノ前ニ斷言スルコトヲ憚ラヌデアリマス。

然レドモ既ニ一方ニ於テ國防ノ急務ヲ認ムル以上ハ之ヲ整理スルト同時ニ於テ其擴張ノ忽ガセニスベカラザルコトヲ確信スルノデアアル。然ルヲ諸君ハ大方針或ハ不整理ヲ名トシテ擴張マデモセズニ置クト云フハ甚ダ其當ヲ得ナイ議論ト云ハネバナラン。併シ又整理ガ諸君ノ云フ如ク出來タトシテモ、海軍擴張ハ決シテ一夜作りニハ出來ン。ナゼナレバ日本ノ物計リテ濟ミマセシ、外國ノ物モ多分ニ買ハネバナラヌ。然ルニ國家ノ財源ニハ自ら限リアルモノデアアルカラ、ナ

ンボ海軍部内ノ整理ガ出来テモ、咄嗟ノ間ニ立派ナ艦隊ヲ見ルコトハ出来マセン。夫レデア
 カラ否ヤガ應デモ相當ノ年月ヲ積マネバナラヌ。然ルノニ今日其急務ヲ擧ゲナイデ置イタナ
 ラ、何日擴張ノ效ガ見ラレマセウ。之ヲ要スルニ諸君ノ内或ハ其ノ大方針トカ、或ハ一省務ノ
 不整理ナリトカヲ鳴シテ金モ要リ、年月モ要ル海軍擴張ニ實際反對セラレタノハ政府ガ日本帝
 國ノ爲ニ最モ遺憾トスル所デアリ升。

併シナガラ今日ハ軍艦製造費モ既ニ否決セラレタルモノナレバ。今更當院ニ於テハ此ノ際如何
 トモスルコトガ出来マセン。然レドモ諸君ノ議決ノ爲ニ悔ヲ他日ニ貽スノ責ハ、苟モ國家ノ重
 任ヲ荷フ本大臣等ニ於テ之ヲ辭スルコトガ出来マセンカラ、東洋ノ大局ヲ維持スルガ爲ニ政府
 ハ憲法ノ許ス範圍内ニ於テ、斷乎トシテ其計畫スル所ヲ徹底スルノ道ヲ求メネバナラヌコトデ
 アリマス。

又各特別會計ニ於テモ査定案ニ於テハ許多ノ減額ヲ加ヘラレマシタガ、一々之ヲ枚擧スレバ甚
 ダ長クナリマスカラ、前ニ述ベタ一般會計ニ準ジテ了知セラレンコトヲ申シテ置キマス。

諸君、政府ノ所見ニ依リマスレバ、豫算全體ニ付キマシテ査定案ハ決シテ進歩主義ト相伴フモ
 ノデナイト信ジマス。仍テ此ニ豫算全體ニ付テノ政府ノ意向ヲ陳述シ、憲法第六十七條ニ依リ
 當院ヨリ政府ニ提出シタル要求ニ對シマシテハ政府ハ不同意ヲ表明致シマス。

同日河野廣中ノ發議ニ因リ左ノ如ク決議シタリ。

本日政府ガ豫算修正案ノ中憲法第六十七條ニ關スル費額ニ對シ不同意ヲ表シタリト雖モ、本院
 ハ本案ニ對シ別ニ再考ヲ要セス、政府ニ向ヒ更ニ同意ヲ求ムベシ。

同十七日政府ハ左ノ覆牒ヲ爲セリ。

政府ハ憲法第六十七條ノ歳出ニ關スル衆議院ノ要求ニ對シ不同意ヲ表シタルニ拘ラズ、今復タ
 政府ノ再考ヲ求メラレタルモ、政府ハ斷ジテ不同意ヲ表セザルヲ得ズ。
 右及覆牒候也

明治二十五年一月十七日

内閣總理大臣

衆議院議長宛

同日河野廣中ノ發議ニ因リ左ノ如ク決議ス。

明治二十六年度豫算案ニ付本院ガ諸般ノ費目ニ修正ヲ加ヘタルハ現在我國ノ民度ニ斟酌シ輿論
 ヲ代表シタル正當ノ所爲ナリト確信ス。政府若シ之ニ同意セザルトキハ立憲政體ノ本旨ニ基キ
 斷然處決スル所ナカルベカラズ。因テ本院ハ豫算修正案ヲ政府ニ送致シ、本日ヨリ五日間休會
 シテ政府ノ處置ヲ待ツ。

右議決ニ先チ渡邊大藏大臣ハ左ノ演說ヲ爲セリ（演說前掲）
同日政府ハ更ニ左ノ覆牒ヲ爲シタリ。

憲法第六十七條ノ歲出ニ關シ政府ハ既ニ憲法ノ明許セル權能ニ依リ不同意ヲ表シタルニ拘ラズ
政府ノ再考ヲ請求セラレタルニ因リ、政府ハ再應不同意ヲ表シタルニ、今復タ五日間休會シテ
政府ノ處置ヲ待ツベシトノ決議通牒ニ接シタリ。政府ハ憲法保障ノ歲出ニ付不同意ノ理由竝政
府自ラ處置スルコトナキ理由ハ既ニ之ヲ辯明シタル以上、政府ノ意見ハ終始一貫更ニ變動スル
コトナキヲ斷言ス。
右及覆牒候也

明治二十五年一月十七日

內閣總理大臣

衆議院議長宛

憲法第六十七條ノ意義

憲法第六十七條ハ將來議會開設ノ日ニ於テ憲法上ノ疑問ノ一大爭點トナルコトヲ免レザルベシ。
此ノ疑問ハ其原因ノ由ル所遠ク歐洲各國ノ憲法學ノ原則ノ兩端ニ別レテ未ダ歸一セザルニ起ルモノ
ナリ。蓋各國ノ憲法學ハ各國憲法ノ其ノ立國ノ源流ニ從ヒテ各々規定ヲ異ニスルト共ニ、其ノ原則
モ亦兩岐ノ間ニ互角抵抗ノ勢ヲ成シ、就中水火氷炭互ニ相容レザルモノハ殊ニ豫算ニ係ル問題ナ
リ。

豫算ニ係ル問題ニツキ兩岐ノ原則ヲ異ニスル論宗ヲ叙說センニ、第一佛蘭西、白耳義、伊太利其
ノ他ノ羅馬人種各國及亞米利加合衆國ノ憲法ノ主義ニ依レバ、豫算ハ立法部ニ於テ大權ヲ把握シテ
行政部ヲ支配スル所ノ最高法律ナリト謂ヒ、從テ豫算ノ効力ハ一年ニ止リ、二年以上ニ繼續セザル
モノトセリ。此ノ說ノ因テ起ル所ヲ原ヌルニ、一ハ歷史上封建ノ餘習ヨリ沿革シ來ルモノニシテ、
二ハ學術的ノ極端ノ理論ヨリ生ジタルモノナリ。

歷史上ノ沿革ヨリ來ルモノハ人ノ遍ク知ル如ク、歐羅巴ノ中古封建ノ時代ニ於テハ諸侯各々其ノ
土地人民ヲ有シテ以テ勢力尤盛ナルノ霸主ニ事ヘタリシニ、其ノ霸主ナル王室ハ内ニシテハ婚姻又

ハ王位繼承ノ大禮アリ、外ニシテハ戰伐ノ事件アルゴトニ其ノ費用ヲ諸侯ニ分課シテ之ヲ調達セシメ、諸侯ハ賦課セラル、所ノ義務ヲ負ヒ、爲ニ困難ヲ受クルコト少カラズ。是ニ於テ諸侯群起シ其ノ霸王ニ要求スルニ會議ヲ召集シ、其ノ費額ノ目安ヲ明示シ、以テ諸侯及人民ノ承諾ヲ求ムベシトノ約束ヲ以テシタリ。是レ中古歐羅巴各國ノ封建ノ間ニ行ハレタル慣習ニシテ、即チ租稅ノ根源及會議ニ於テ租稅ヲ議決スルノ根原タルコトハ其ノ歴史ノ證明スル所ナリ。此ノ沿革ニ從ヘバ、租稅ハ元來王家ノ歲入ノ不足ヲ補助スルモノニ過ズ。故ニ今日ニモ現ニ租稅ヲ名ヅケテ補助金獻納ノ熟語ヲ用ウルハ英國及其ノ他ノ國々ノ法律ニ慣用スル所ナリ。夫レ租稅ニシテ果シテ臨時獻納ノ補助金ナラシメバ、人民ノ租稅ヲ議スルニ充分ナル議決ノ自由權ヲ用ウルハ當然ノ事ニシテ、君主ハ充分ノ議決權ヲ用キタル所ノ人民ノ承諾ニ依ルニアラザレバ一錢タリトモ租稅ヲ徵求スルコト能ハザルハ固ヨリ亦宜ナリ。

其ノ學理上ヨリ生ズルモノハ佛國ノ革命前ノ哲學者、其ノ王家ノ專制ヲ禁遏スル爲ニ、英國ノ民權ノ盛大ヲ鼓張シタルニ起リ、遂ニ革命ノ憲法ニ於テ豫算ノ効力ハ一年ニ止マルトノ主義ヲ明言シテ、以テ一ノ條項ヲ制作スルニ至リ、其後白耳義伊太利等ノ各國モ皆之ニ模倣シタリ。此ノ理論ニ從ヘバ租稅ハ總テ人民ノ政府ヨリ受クル所ノ恩惠ノ報酬ニ過ギズ。故ニ人民ハ年々政府ヨリ與フル所ノ保護恩惠ノ厚薄ヲ比較シテ始メテ之ガ報酬ヲ出スノ當否ヲ議決シ、萬一政府ニシテ其ノ職ヲ怠

ル時ハ人民ハ其ノ報酬ヲ出スコトヲ肯ゼザルベク、若シ人民ニシテ租稅ヲ出スコトヲ肯ゼズシテ豫算ヲ否決スルトキハ、政府ハ即時ニ其ノ行政ノ機關ヲ運轉スルコト能ハズ、從テ廢滅ニ至ルハ當然ナリト云フニ在リ。千八百七十七年佛國ノ議院ハ内閣ト相調和セズ、「ジュールフェリー」氏ハ豫算委員ノ名ニ於テ議院ニ於テ宣言シテ曰ク、我輩ハ眞誠ノ議院内閣ノ爲ニ非ザレバ此ノ四直稅ヲ表決スルコトヲ欲セズト。又英國「バルネット」氏謂ヘルコトアリ、國會議院ガ大臣ノ革職ヲ求ムルニ當リ、若シ聽カザルトキハ金錢徵收ノ案ヲ議決セザルベシトノ強迫ヲ用ウルニ非ザレバ、吾人ノ君主ハ肯テ大臣ヲ黜ケザルナリト（「コックス」氏）。果シテ納稅ノ主義ヲシテ人民ノ政府ニ對スル利益ノ報酬ナラシメバ、豫算ハ固ヨリ一年ノ外ニ効力ヲ有スベカラズシテ、豫算ノ存廢ニ對シ議會ハ充分自由ナル議決權ヲ有スベシトスルモ亦當然ナラザルコトヲ得ザルベシ。蓋シ前ニ謂ヘル歷史上ノ封建ノ餘習ト後ニ謂ヘル學理上ノ架空ノ主義トノ包含ヨリシテ、豫算ノ解釋ハ憲法學ノ一ノ誤謬トナリ殆ド歐洲全土ニ其勢力ヲ占メタルコト第十八世紀ノ始ヨリ第十九世紀ノ半ニ至レリ。之ヲ豫算ノ甲說トス。

乙ノ說ハ尤近代ニ發達シタル憲法學ノ進歩ニ基クモノナリ。佛蘭西國「ボウリウ」氏ノ經濟書第三版ニ於テ千八百七十七年亞米利加ノ議院ハ陸軍兵士ノ給與費ヲ議決セザリシニヨリ、亞米利加ノ政府ハ三ヶ月ノ間兵士ニ給料ヲ渡スコト能ハズ。大統領ハ之ガ爲ニ愁歎ノ語ヲ包含シタル教書ヲ發スルニ至リ、同年濠斯太利亞ノメルボルンノ議院ニ於テ豫算ヲ全廢シタル非常ノ事情ヲ顯シタルコ

トヲ掲ゲ、「ボウリウ」氏ハ又佛國ヲシテ斯ノ如キノ異常ノコトアラシメバ、四隣ニ敵ヲ受ケ亡國ノ變ヲ見ルニ至ルベシト迄ニ疑問ヲ設ケ、而シテ自ら其ノ疑問ニ對シテ適當ナル解釋ヲ爲スコト能ハザリシ。獨逸ニ於テハ其ノ學者ノ獨逸主義ナリトシテ主張スル所ハ、獨逸聯邦各國ノ憲法ニ間々散見スルモノアリシニ拘ラズ、中古佛蘭西白耳義ノ憲法主義ノ普魯西ニ行レテヨリ、豫算ノ定義ニ就テモ空理ノ原素ヲ混淆シタリシニ、近來其ノ學士中ニ非常ノ精力ヲ以テ英國ノ歴史及事實ヲ研究シ就中豫算ノ事ニ於テ卓越ナル發明ヲナシテヨリ、始メテ數十年間ノ誤謬ヲ糾正シテ、立憲君主國ノ主義ニ隨伴スベキ議論ヲ一定スルノ端ヲ開クニ至レリ。其ノ説ク所ノ主義ニ從ヘバ凡ソ國家ハ永久ノ生存ヲ有スルモノニシテ、毎年ニ一死一生一存一廢スベキモノニアラズ。故ニ國家ハ其永久生存ノ需要ヲ充タス爲ニ適當ノ入額ヲ有セザルベカラズ。國家ノ生存ニ必要ナル入額ハ人民ノ政府ニ對スル當然ノ義務トシテ供給スベキモノニシテ、人民ノ報酬ニ起因スルモノニハアラザルナリ。豫算ハ憲法又ハ他ノ法律ニヨリ支配セラル、所ノ行政作用ニシテ、憲法又ハ法律ハ豫算ノ上ニ位シ、豫算ノ方向ヲ導キ、國ノ生存ヲ繼續セシムル力アルベク、而シテ豫算ノ議決ハ憲法又ハ法律ニ違ヒ、國ノ生存ヲ破壞スルノ力アルモノニアラザルナリ。故ニ國會ニ於テ豫算ヲ議スルニ當リ、若シ豫算中ノ國家ノ生存ニ必要ナル部分ヲ排除スルコトアラバ、是其ノ議決ハ憲法ニ違背スル者ナリト。

獨逸學士ノ議論ハ英國ノ固定資本ノ方法ニ依リ議論ノ標準ヲ見出シタルモノニシテ、英國ニテハ議院ノ勢力尤強大ナルニ拘ラズ、歳入中七分ノ六ハ永久法律ニ依リ固定資本ニ拂込ミ、年々議院ノ議決ヲ假ラズシテ收入スルモノトシ、又歳出中三分ノ一ハ固定資本ヨリ支出シ、議院ノ議決ニ關係セザルモノトシ、而シテ議院ノ議決ハ他ノ歳出歳入ノ部分ニシテ、自由ニ伸縮増減ヲ許スモノニ限レリ。此ノ英國ノ固定資本ノ方法ハ、佛國ノ論者モ單ニ國債償却ノ一部分ニ就テノミ之ヲ採用センコトヲ企テタリ。「ミラボー」氏ハ國民議會ニ於テ固定資本ノ有益ナルコトヲ主張シテ曰、公債ノ償還ニ充ツル租税ノ賦課期ヲ一年ニ制限スルハ、立法院ニ毎年國民ヲ倒産セシムルノ權利ヲ附與シタルニ均シト云ヘリ（千七百八十九年十月七日ノ會議）。蓋シ何レノ國ニ於テモ國債帝室費或ハ議院入費又ハ補助契約ニ就テ多少同様ノ制ヲ用キザルハナシ。獨逸ノ學士輩ハ政府ノ義務ハ獨リ此ノ數件ニ止マラズシテ、立國ノ生存ヲ保ツ爲ニ必要ナル需用ハ總テ皆國債ノ償却ト均シク國會ノ自由ナル存廢ノ決議ニ任スベカラザルコトヲ論決シタルモノナリ。之ヲ豫算問題ニ係ル乙説トス。

今我國ハ立國ノ體遠ク歐洲各國ト其源流ヲ同クセザルノミナラズ、又英國ノ如ク固定資本ノ舊制アルニアラズ。又米國ノ如ク歳入ノ歳出ニ超過スルコト一年一億萬弗ニ上ルガ如キ富源アルニアラズ。而シテ新ニ憲法ヲ設ケ國會ヲ開キ慣例未ダ熟セザルノ日ニ於テ國費豫算ヲ人民ノ公議ニ附セントスルニ當リテ、又官民ノ間ニ平和ナル調熟ノ方法ヲ以テ將來ノ政治上ノ進歩ヲ圖ラント企ツルニ當リテ、若シ彼ノ痛快ナル一篇ノ理論ニ依リ、歳出歳入ノ全部ヲ舉ゲテ毎年度ノ存廢ヲ多數ノ議決

ニ任ゼントセバ、或ハ目前ニメルボルン及北米合衆國ノ議會ノ覆轍ヲ現出スルコトナキヤ、誰人モ其然ラザルヲ保證スルコト能ハザルベシ。事若シ此ニ至ラバ立憲ノ結果ハ不祥ナル汚點ヲ史乘ニ遺サバルコトヲ得ズ。是レ蓋シ我が憲法第六十七條ノ彼レニ擇テ此レニ取ル所以ノ精義ナリ。

夫レ憲法ノ正條ハ炳然トシテ日星ノ如キニ拘ラズ、之ヲ豫算ノ構成ニ適用シ、實際ニ施行スルノ方法節目ニ至テハ、更ニ一層精密ナル注意ヲ以テ上下ノ疑ヲ未萌ニ割斷シ、議會及人民ノ方嚮ヲ指示シテ紛議ノ餘地ヲ遺サバル爲ニ、一ノ法律ヲ發シ明文ヲ宣布スルノ必要ヲ感ゼザルコトヲ得ズ。

前ニ述ベタル近來ニ發達セル豫算ノ說ヲ實施スル方法ニ就テ更ニ歐洲ノ學說ヲ參照スルニ、蓋シ國家ノ成立ト現行法律トヲ維持スル爲ノ必要ナル經費ハ議會之ヲ拒ムノ權ヲシトハ獨逸ノ多數ノ學士輩ノ一般ニ是認スル所タリト雖、唯彼レニ在テハ專ラ大學講場ノ講義ニ止マリ、一モ之ヲ事實上ニ施行シタルコトナク、又一ノ大國モ之ヲ憲法上ニ規定シタルノ例アラズ（獨逸ノ小侯國ヲ除キ）而シテ憲法ノ明文ヲ以テ之ヲ實際ニ施行スルハ我が帝國ヲ以テ始トス。從テ第六十七條ノ施行方法ハ經驗ノ前例ヲ得ルニ乏シキノ困難ナシトセズ。今數種ノ說ヲ左ニ歷舉センニ

第一 「グナイス」氏ハ英國憲法ヲ引據シテ普魯西ノ爲ニ千八百六十七年ノ歲出ヲ分類シテ不動費動費ノ二種トナスベキコトヲ論ジタリ。

第二 「スタイン」氏ハ豫算ヲ分チテ國家豫算政府豫算ノ二種トシ、國家豫算ニ屬スルモノハ法律上

ノ收入帝室費官吏俸給トシ、毎年ノ議定ヲ要セズ、其他ハ總テ政府豫算ニ屬スベキモノニシテ國會ニ於テ自由ニ可否スルコトヲ得ベシト云ヘリ（「スタイン」氏財政學第一卷三〇七葉）。

第三 「ラバント」氏ハ「グナイス」氏ノ說ヲ駁シテ且ツ曰、政府ト議會トノ同意ヲ經テ經常ノ性質ヲ有セシメタル歲出ハ後年ノ議會ニ於テ政府ノ同意ヲ經ズシテ之ヲ取消スコトヲ得ズトノ原則ヲ用ユルノ優レルニ若カズト。

第四 豫算承諾權ノ濫用ヲ防ギ、議會ト政府トノ間ノ爭議ヲ裁決スル爲ニハ一ノ高等裁判所ヲ設ケテ正理ヲ維持セシムベシト（是レヲルデンブルク國ノ千八百五十二年ノ憲法第二百九條ニ掲ゲタル者ナリ）。

第五 各種學說ノ外ニ於テ更ニ一種ノ說アリ曰、政府ト議會ト豫算ノ議合ハザルトキハ、憲法ハ之ヲ判決スルノ方法ヲ明揭セズ。故ニ唯政略ニ訴フルノ終局手段アルノミト。是レ「ビスマルク」氏ガ千八百六十一年ニ普魯西ノ議院ニ於テ演說セシ所ナリ。

上ニ陳ベタル五ツノ方法ノ一ヲ擇ビテ之ヲ取ラントスルニ當リテ果シテ如何ナル論結ヲ得ベキ乎。左ニ一々之ヲ辯說セン。

第五ノ方法ハ此ノ問題ヲ政府及議會ノ勢力ニ一任スル者ニシテ、憲法ヲ舉ゲテ之ヲ狂瀾怒濤ノ中ニ投ジ以テ冒險手段ヲ試ムルニ過ギザルナリ。

第四ハ最高行政ノ府ト立法府トノ上ニ更ニ一ノ裁決ノ重權アル裁判府ヲ置カントスル者ニシテ、我が憲法ノ主義ニ乖クノミナラズ、實際ノ危險ハ前ニ述ベタル第五ノ方法ト其ノ結果ヲ同クセントス（ラバント氏ノ説ヲ採ル）。

第三ノ方法ハ簡明ナルニ似タリト雖、唯之ヲ議會未ダ開カザルノ前ニ行ハレタル豫算ヲ以テ、議會初メテ開クノ會議ニ適用セントスルニ至リテハ、論理牽強ニ涉ルノ嫌アリ、以テ衆心ヲ服スルニ足ラザルベシ。

第一、第二ノ方法ハ皆豫算ヲ兩篇ニ分タントスル者ニシテ、極メテ新奇ノ方法ナリ。此ノ方法ニ依ルトキハ全ク豫算ノ組織ヲ一變シテ其ノ一部ハ議會ノ協賛ヲ經ズシテ之ヲ施行スル者トセザルコトヲ得ズ（憲法第六十六條皇室費ノ如シ）。而シテ此ノ如キハ憲法第六十四條ノ認メザル所ナルノミナラズ、亦事情ノ許サザル所ナリ。

故ニ今政府ハ平穩正當ノ針路ヲ取り、第六十四條ト第六十七條トヲシテ兩々調和シテ相悖戻セズ、以テ各々其ノ適當ノ目的ヲ達セシメントセバ、施行法律ヲ制シテ以テ標準ヲ定ムルノ外他ニ一ノ良便ナル方法アルヲ見ズ。

此ノ法律ヲ制定スルヲ要スルノ理由ニアリ。

第一 此ノ法律ヲ缺クトキハ憲法第六十七條ノ高尚ナル原則ヲ實施スルニ困難ナル事。

第二 此ノ法律ヲ缺クトキハ憲法施行前ノ歳出ト施行後ノ歳出トノ連續ヲ絶チ穩當ノ更遷ヲ爲スコト能ハザル事。

蓋憲法第六十四條ハ國家ノ歳出歳入ハ毎年豫算ヲ以テ國會ノ協賛ヲ經ベキコトヲ規定シタリ。而シテ又第六十七條ハ、

大權ニ基ツケル既定ノ歳出及法律ノ結果ニ由リ、又ハ法律上政府ノ義務ニ屬スル歳出ハ政府ノ同意ナクシテ議會之ヲ廢除シ又ハ削減スルコトヲ得ズ。

ト謂フ。夫レ一ノ豫算表ヲ繙閱スルニ各款各項森然トシテ前ニ列ナルヲ見ル。而シテ其ノ中何レカ廢除スルコトヲ得、又削減スルコトヲ得ルモノトシ、何レカ廢除又ハ削減スルコトヲ得ザル者トスル乎。何レカ完全ナル議決上ノ協賛ヲ要シ、何レカ形式上ノ協賛ヲ經ルニ止マル者トスル乎。議會タル者蓋シ茫然トシテ其ノ方嚮ヲ得ルニ難カルベシ。況ンヤ憲法ノ各條中意義深遠ナルハ蓋シ第六十七條ニ如クモノアラザルベク、而シテ議會ノ權利消長ニ重要ノ關係アル亦此ノ條ヲ以テ第一トス。此ノ條則ニシテ若シ不幸ニシテ政府ト議會トノ間ニ其ノ解釋ヲ異ニスルニ當ラバ、其ノ困難果シテ如何ゾ乎。今其ノ一例ヲ舉ゲテ之ヲ示サンニ、

憲法義解ニ憲法上ノ大權ニ基ツケル歳出トハ行政各部ノ官制、陸海軍ノ編制ニ要スル費用、文武官ノ俸給並ニ外國條約ニ依レル費用ナリト謂ヘリ。

以テ之ヲ解スルトキハ立法行政司法ノ諸權ニシテ、凡ソ政府ノ歳出トナルモノハ殆ド皆憲法上ノ大權ニ基カザルモノナシト謂フコトヲ得ベシ。此ノ釋義ニ依ルトキハ議會ハ第六十四條ニ依リテ毎年國家ノ歳入歳出ヲ議スルノ權アリト雖、其ノ全部中ノ一項ヲモ廢除又ハ削減スルコトヲ得ズ。此ノ如キハ決シテ憲法制定ノ本意ニ非ザルコトヲ斷言スベキナリ。故ニ第六十七條ニ謂フ所ノ憲法上ノ大權ニ基ツケル歳出トハ即第一章第五條以下ニ掲ゲタル歴記ノ條項ニ依リ狹義ヲ以テ之ヲ解スベク（其目ヲ舉グレバ憲法義解ニ掲グル數種ニ過ギザルベシ）而シテ精細區分以テ其ノ當ヲ得ルコトヲ期セザルベカラザルナリ。

我ガ政府ハ 聖勅ヲ謹守シテ憲法施行ノ責ニ任ゼントス。憲法ノ條項ニ倚藉シテ以テ苟モ行政ノ利便ヲ圖ルコトヲ欲セズ。故ニ六十七條ノ範圍ヲ明確ニシテ以テ第六十四條ノ根源主義ヲ妨碍セザラントスルハ亦政府ノ一大義務ナリト信ズ。

憲法第六十七條及第七十六條ニ 對スル大藏大臣ノ解釋

憲法第六十七條及第七十六條二項ノ費途ノ範圍ハ、嘗テ明治二十三年法律第五十七號會計法補則ヲ以テ定メラレ、尋テ同年十月及十二月中閣議ニ於テ該法律ノ各條項ニ該當スル費目ヲ確定セラレタリ。然ルニ該範圍タル頗ル廣汎ニ失スルノ感ナキニアラズ。抑モ同條ハ單ニ法律命令契約等ニ依リ金額確定シ、其法律命令契約等ヲ變更スルニアラザレバ金額ヲ動シ得ベカラザルモノノ爲メニ設ケ、以テ毎年豫算ト共ニ法律命令契約等ノ上ニ甚シキ變更ヲ及ボサルノ保障ヲ爲シタルモノナリ。而シテ大權ニ基ケル歳出ニ關シテハ特ニ既定ノ二字ヲ加へ、憲法ノ保障ヲ豫算決定濟ノモノノミニ止メ、新置増加ノ歳出ニ付テハ議會ノ協賛權ニ十分ノ力ヲ付與シタルモノトス。是レ至當ノ見解ト被存候。依テ來ル明治二十七年年度豫算ニ於テハ左ノ三項趣旨ニ照シ、右第六十七條及第七十六條二項ノ費目ヲ算定候事ニ決定相成度、

第一項 憲法上ノ大權ニ基ケル既定ノ歳出トハ命令ヲ以テ年額ヲ定メタル歳出又ハ年額ヲ定メ得ベキ標準アル命令ニ基キタル歳出ニシテ、前年度豫算ニ於テ金額ノ決定セルモノヲ云フ。

第二項 法律ノ結果ニ由ル歳出トハ法律ヲ以テ年額ヲ定メタル歳出又ハ年額ヲ定メ得ベキ標準アル法律ニ基ケル歳出ヲ云フ。

第三項 法律上又ハ歳出上政府ノ義務ニ屬スル歳出トハ既定ノ契約等ニ依リ年額ヲ算定シ得ベキ歳出ヲ云フ。

右閣議ヲ要ス

明治二十六年五月二十一日

大藏大臣 渡邊 國武

内閣總理大臣伯爵 伊藤博文 殿

追テ別冊ハ右三項ノ趣旨ニ基キ現在ノ計算ニ依リ當省ニ於テ調査候モノニ有之、參考ノ爲メ添付致候又憲法第六十八條ノ費目ハ別ニ評議ヲ要スル儀ハ無之候得共、便宜別冊中ニ掲載致置候。

憲法第六十七條ニ現定シタル大權ニ基ケル既定ノ歳出

勅任奏任及判任官俸給

陸軍軍事費

一〇、〇三二、二七〇・〇五八
八、二一三、二一五・三二六

(陸軍省)

俸給及諸給

糧食費

被服費

馬匹費

雜給

憲兵費

俸給及諸給

被服費

馬匹費

屯田兵費

俸給及諸給

糧食費

被服費

馬匹費

海軍々事費

(海軍省)

四、四〇五、九八一・九六四
一、八六五、五二四・六一六
一、四七六、二六〇・五四〇
四六四、九四四・二〇六
五〇四・〇〇〇
三二二、四〇〇・四〇五
一九〇、七八九・四四〇
二三、四二二・五七一
八、一八八・三九四
二四八、五五六・六二六
一〇六、一六二・二六二
一一一、三一〇・〇六〇
二六、〇七九・九〇四
五、〇〇四・四〇〇
二、六九八、二〇六・六〇〇

憲法第六十七條及第七十六條ニ對スル大藏大臣ノ解釋

俸給及諸給
糧食費
被服費

一、八九八、九四二・九三五
五七二、九二六・九四七
二二六、三三六・七一八
二一、四一四、六四九・〇一五

計

憲法第六十七條ニ規定シタル法律ノ結果ニ由ルノ歳出

帝國議會議長副議長議員歳費

四〇〇、八〇〇・〇〇〇

文官恩給

二二〇、六二四・八一六

陸軍恩給

三七五、三八四・八四八

海軍恩給

一〇六、九五八・八〇八

罷役恤金

七〇・〇〇〇

市町村立學校職員恩給補助

?

巡查看守給助費

二、五七五・七五五

市町村交付金

一四八、四一七・六六一

警察費連帶支辨金

九二九、八七二・〇〇〇

養育費

二〇、二五六・〇〇〇

計

憲法第六十七條ニ規定シタル法律上政府ノ義務ニ屬スル歳出及第七十六條第二項ニ規定シタル政

府歳出上ノ義務ニ屬スル費用

二、二〇四、九五九・八八八

賞勳年金

一四〇、三二二・〇〇〇

公債償還

一、三五〇、九七四・二三五

公債利子

一二、九〇八、五三八・一三〇

公債元利拂手數料

六九、八四六・〇〇六

萬國關稅表刊行同盟費

四〇〇・〇〇〇

萬國度量衡會費

一、四九〇・五六〇

萬國郵便電信聯約費

一、五一〇・九五〇

熊本縣熊本、福岡縣間道路修築費補助 (内務省)

六、〇六八・八三六

東京府監獄改築費補助

二〇、〇〇〇・〇〇〇

東京市水道費補助

一五〇、〇〇〇・〇〇〇

大阪市水道費補助

五〇、〇〇〇・〇〇〇

大分縣道路修築費補助

三一、四八六・二一七

憲法第六十七條及第七十六條ニ對スル大藏大臣ノ解釋

沖繩縣金祿	(大藏省)	一四六、四六九・五〇〇
沖繩縣先島航海費沖繩開運會社補助	(內務省)	五、〇〇〇・〇〇〇
沖繩縣各離島航海費補助	(同上)	七〇〇・〇〇〇
日本鐵道會社利益補助	(大藏省)	八四〇、四五九・二九八
九州鐵道會社補助	(同上)	?
北海道製麻會社補助	(內務省)	四〇、〇〇〇・〇〇〇
北海道紋籠製糖會社補助	(同上)	二、七五〇・〇〇〇
北海道札幌製糖會社補助	(同上)	二五、〇〇〇・〇〇〇
北海道興產社補助	(同上)	二、五〇〇・〇〇〇
北海道炭鑛鐵道會社補助	(同上)	一八八、三三三・三三三
山陽鐵道會社補助	(大藏省)	一〇二、〇〇〇・〇〇〇
日本郵船會社補助	(遞信省)	八八〇、〇〇〇・〇〇〇
大阪商船會社航海補助	(同上)	五〇、〇〇〇・〇〇〇
神戶那霸航海費日本郵船會社補助	(同上)	一三、〇〇〇・〇〇〇
傳染病研究所費補助	(內務省)	一五、〇〇〇・〇〇〇

備外國人俸給手當	(各廳)	一三七、一二五・七六七
日本銀行交付金	(大藏省)	四五〇、〇〇〇・〇〇〇
預金利子	(同上)	九四三、七五〇・〇〇〇
地所家屋借料	(各廳)	三五、六二一・八五八
鑛店銀行紙幣交換費	(大藏省)	〇〇〇・〇〇〇・〇〇〇

計

一八、六〇八、三四六・六九〇

憲法第六十八條ニヨレル繼續費

利根川修築費	(內務省)	八七、一四二・二九七
富士川修築費	(同上)	五八、五九六・一八五
天龍川修築費	(同上)	六八、五四三・五三四
北上川修築費	(同上)	四〇、〇〇〇・〇〇〇
最上川修築費	(同上)	二〇、〇〇〇・〇〇〇
信濃川修築費	(同上)	一二五、〇〇〇・〇〇〇
木曾川修築費	(同上)	七四一、二六三・六五四
筑後川修築費	(同上)	一〇〇、〇〇〇・〇〇〇

諸官衙及議院建築費	(同上)	一九八、一五三・一九三
東京灣砲臺建築費	(陸軍省)	三〇三、〇〇〇・〇〇〇
下ノ關砲臺建築費	(同上)	一〇〇、〇〇〇・〇〇〇
紀淡海峽砲臺建築費	(同上)	一〇〇、〇〇〇・〇〇〇
兵器彈藥費	(同上)	五八六、七六七・八四四
師團騎兵營新築	(同上)	二二、〇六二・〇九四
二十四年度起業軍艦製造費	(海軍省)	一、八一九、〇〇二・〇〇〇
吳鎮守府建築費	(同上)	二〇〇、〇〇〇・〇〇〇
佐世保鎮守府建築費	(同上)	二八七、七五一・五五〇
兵器製造所建築費	(同上)	一〇〇、〇〇〇・〇〇〇
高等商業學校支出金	(文部省)	二〇、〇〇〇・〇〇〇
山林原野調査費	(農商務省)	三九、一五一・五〇〇
全國鐵道線路調査費	(遞信省)	二二、七六二・〇〇〇
連發銃製造費	(陸軍省)	三二六、〇八八・〇〇〇
棉火藥製造場新設費	(同上)	八二、一九〇・六〇九

コロンブス世界博覽會費	(農商務省)	二三四、四八六・八八一
十勝分監新營費	(內務省)	二五、四六一・三八〇
紀淡海峽要塞砲兵營新營費	(陸軍省)	八六、四〇四・〇〇〇
下ノ關海峽要塞砲兵營新營費	(同上)	六五、〇二二・〇〇〇
二十六年起業甲鐵戰艦製造費	(海軍省)	二、一四八、六一四・八二〇
二十六年起業巡洋艦及報知艦製造費	(同上)	九五三、八二〇・二〇〇
帝國大學新營支出金	(文部省)	七四、五八五・〇〇〇
第四回內國勸業博覽會費	(農商務省)	五、六七四・九二〇
日ノ岬航路標識新設費	(遞信省)	八、三二一・九五二
計		九、〇四九、八六五・六一三
合 計		五、二七七、八二一・二〇六
憲法第六十七條及第七十六條第二項ノ費途		四二、二二七、九五五・五九三
憲法第六十八條ニ係ル繼續費		九、〇四九、八六五・六一三

憲法第六十七條同第六十八條同 第七十六條第二項費途ノ區分

憲法第六十七條ニ規定シタル大權ニ基ケル既定
ノ歲出

陸軍々々事費
勅任奏任及判官俸給 各廳官制及俸給ニ關スル各種ノ勅令ニ依リ要スルモノ。

俸給及諸給 (將校下士卒俸給) 明治二十三年三月勅令第六十七號陸軍給與令第二章

ニ依リ支給スルモノ但休職停職俸給ハ現員アルモノニ限ル。

(文官奏判官俸給現員ニ屬スル非職俸給モ包含ス) 一般ノ官等俸給令及明治二十四年三月

勅令第二十三號但書ニ依リ支給スルモノ。

(諸手当) 明治二十三年三月勅令第六十七號陸軍給與令第三章第二十條

ニ依リ支給スル「宅料」二十一年三月勅令第十四號陸軍乘馬飼養令第一條

乃至第三條並ニ二十三年三月勅令六十七號陸軍給與令第六章第四十三條

ニ依リ支給スル「馬飼料」但軍隊ニ屬スルモノニ限ル。

糧食費 (糧米) (賄料) 明治二十三年三月勅令第六十七號陸軍給與令第四章ニ

依リ要スルモノ但軍隊ニ屬スルモノニ限ル。

被服費 (被服購買補修) (軍隊被服料) (下士以下被服料) (被服修理料) (被

服手入具永續料) 明治二十三年三月勅令第六十七號陸軍給與令第五章ニ

依リ要スルモノ但軍隊ニ屬スルモノニ限ル。

馬匹費 (將校馬匹費馬匹保續料ニ限ル) (飼養品) (馬療器械永續料) (裝蹄剔毛料) (馬

藥料) 明治二十三年三月勅令第六十七號陸軍給與令第六章ニ依リ支給ス

ルモノ但軍隊ニ屬スルモノニ限ル。

雜給 (給與) 明治二十三年三月勅令第六十七號陸軍給與令第十一章第八十九

條ニ依リ支給スル沖繩分遣隊手当。

憲兵費

俸給及諸給 (上長官以下俸給) 明治二十三年三月勅令第六十七號陸軍給與令第二章

ニ依リ支給スルモノ。

憲法第六十七條同第六十八條同第七十六條第二項費途ノ區分

(文官判任俸給現員ニ屬スル非職俸給モ包含ス) 一般ノ俸給令及明治二十四年三月勅令第二十三號但書ニ依リ支給スルモノ。

(諸手當) 明治二十三年三月勅令第六十七號陸軍給與令第三章第二十條ニ依リ支給スル「宅料」二十一年三月勅令第十四號陸軍乘馬飼養令第一條乃至第三條並ニ二十三年三月勅令第六十七號陸軍給與令第六章第四十三條ニ依リ支給スル「馬飼料」但軍隊ニ屬スルモノニ限ル。

被服費 (被服購買補修) (下士以下被服料) 明治二十三年三月勅令第六十七號陸軍給與令第五章ニ依リ要スルモノ但軍隊ニ屬スルモノニ限ル。

馬匹費 (將校馬匹費馬匹保續料ニ限ル) (飼養品) (裝蹄剔毛料) (馬藥料) 同令第六章ニ依リ要スルモノ但同上。

屯田兵費

俸給及諸給 (將校下士卒俸給) 明治二十三年勅令第二百一號屯田兵給與令第二章ニ依リ支給スルモノ但休職停職俸給ハ現員アルモノニ限ル。

(文官奏任俸給現員ニ屬スル非職俸給モ包含ス) 一般ノ官等俸給令及明治二十四年三月勅令第二十三號但書ニ依リ支給スルモノ。

(諸手當) 明治二十三年九月勅令第二百一號屯田兵給與令第十六條ニ依リ支給スル「宅料」二十一年三月勅令第十四號陸軍乘馬飼養令第一條乃至第三條並ニ二十三年九月勅令第二百一號屯田兵給與令第六章第三十一條ニ依リ支給スル「馬飼料」同令第九章第三十九條ニ依リ支給スル「下士卒勤務手當」但軍隊ニ屬スルモノニ限ル。

糧食費 (扶助米) (鹽菜料) 明治二十三年五月勅令第七十六號屯田兵移住給與規則第三條及第八條ニ依リ支給スルモノ但既ニ移住セシモノニ屬スル分ニ限ル。

被服費 (被服購買補修) (下士以下被服料) (軍隊被服料) (被服修理料) (被服手入具永續料) (被服永續料) 明治二十三年九月勅令第二百一號屯田兵給與令第五章ニ依リ要スルモノ但軍隊ニ屬スルモノニ限ル。
馬匹費 (將校馬匹費馬匹保續料ニ限ル) (飼養料) (馬療器械永續料) (裝蹄料) (馬藥料) 同令第六章ニ依リ要スルモノ但同上。

海軍軍事費

俸給及諸給 (文武勅奏判任官俸給) 文官ハ一般ノ官等俸給令並ニ明治二十四年三月

勅令第二十三號但書ニ武官ハ明治二十四年七月勅令第三百三十一號海軍々人俸給令ニ依リ支給スルモノ但休職停職非職俸給ハ現員アルモノニ限ル。
糧食費 明治二十三年二月勅令第十四號糧食條例ニ依リ要スルモノ但乘艦在營ノ將校以下ニ支給スルモノニ限ル。

被服費 明治二十三年二月勅令第六十五號海軍被服條例ニ依リ要スルモノ但乘艦在營ノ下士卒ニ支給スルモノニ限ル。

憲法第六十七條ニ規定シタル法律ノ結果ニ由ルノ歳出

帝國議會議長副議長議員歳費 明治二十二年二月法律第二號議院法ニ據リ要スルモノ。

文官恩給 明治十七年一月太政官達第一號官吏恩給令及明治二十三年六月法律第四十三號官吏恩給法同年同月法律第四十四號官吏遺族扶助法同年十月法律第九十一號學校職員俸給法ニ據リ要スルモノ但權利確定シタルモノニ限ル。

陸軍恩給 明治九年太政官達陸軍武官恩給令明治十六年九月太政官達第三十七號陸

軍恩給令及明治二十三年六月法律第四十五號軍人恩給法ニ據リ要スルモノ
ノ明治二十四年十二月法律第四號明治七年以後ノ戰役ニ死歿シタル軍人軍屬ノ遺父母及祖父母扶助ニ關スル法律ニ據リ要スルモノ但權利確定シタルモノニ限ル。

海軍恩給 明治八年太政官達海軍退隱令明治十六年九月太政官達第三十八號海軍恩給令及明治二十三年法律第四十五號軍人恩給法明治二十四年十二月法律第四號明治七年以後ノ戰役ニ死歿シタル軍人軍屬ノ遺父母及祖父母扶助ニ關スル法律ニ據リ要スルモノ但權利確定シタルモノニ限ル。

罷役恤金 明治九年十月太政官達第九十九號ノ陸軍恩給令第一條第六項ニ據リ給スルモノ但權利確定シタルモノニ限ル。

市町村立學校職員恩給補助 明治二十三年十月法律第九十九號ニヨリ給スルモノ。
巡查看守給助費 明治十五年太政官達第四十一號巡查看守給助令ニ依リ要スルモノ但權利確定シタルモノニ限ル。

市町村交付金 (大藏省) 明治二十二年法律第九號國稅徵收法ニ據リ要スルモノ。
警察費連帶支辨金 (府縣) 明治十四年二月第十六號布告ニ基キ明治二十一年八月勅令第六

養育費 十一號ニ依リ東京府ハ十分ノ四他府縣ハ六分ノ一支出ヲ要スルモノ。
明治六年布告第百三十八號ニ據リ給スル棄兒養育料但權利確定シタルモノニ限ル。

憲法第六十七條ニ規定シタル法律上政府ノ義務
ニ屬スル歳出及第七十六條第二項ニ規定シタル
政府歳出上ノ義務ニ屬スル費用

賞勳年金 (大藏省) 明治十七年七月賞勳局ニ於テ奏議ノ上決定セラレタル勳等年金額ニ依リ給スルモノ但權利確定ノモノニ限ル(外國人年金共)。

公債償還 (大藏省) 但償還期ノ來リタルモノニ限ル。

公債利子 (同上)

公債元利拂手數料 (同上) 但義務ノ確定シタルモノニ限ル。

萬國關稅表刊行同盟費 (同上) 明治二十三年七月ベルギー國萬國關稅表刊行局へ加入セシニ依リ要スルモノ。

萬國度量衡會費 (農商務省) 明治十八年七月農商務省ノ請議ニ依リ佛國ニ設置セル萬國

度量衡會ニ加盟セシニ依リ要スルモノ。

萬國郵便電信聯約費 (遞信省) 明治十二年三月布告第十一號萬國郵便聯合條約第十六條及明治十九年六月遞信省告示第五十七號萬國電信條約書附屬細目規則第八十條ニ依リ要スルモノ。

熊本縣熊本福岡縣間道路修築費補助 (内務省) 總額三萬三百四十四圓十八錢二厘ヲ明治二十四年度ヨリ二十八年度マデニ下付ヲ要スルモノ。

東京府監獄改築費補助 (同上) 總費額ハ十萬圓ニシテ明治二十二年四月内藏兩大臣協議ニテ二十二年度ヨリ二十六年度マデ支出ヲ要スルモノ。

東京市水道費補助 (同上) 明治二十四年度ヨリ同二十八年度迄十五ケ年間毎年度十五萬圓宛補助ヲ要ス。

大阪市水道費補助 (同上) 明治二十三年九月内務省指令ニヨリ同二十四年度ヨリ十五ケ年間毎年度五萬圓ツツ補助ヲ要ス。

大分縣道路修築費補助 (同上) 明治二十六年度ニ於テ三萬千四百八十六圓二十一錢七厘明治二十七年ニ於テ三萬千二百六十五圓支出ヲ要スルモノ第四回議會議決ノ分。

沖繩縣金祿

(大藏省) 明治十七年一月内務大藏兩省伺ニ基キ支出ヲ要スルモノ。

沖繩縣先島航海費沖繩開運會社補助

(内務省) 明治二十二年八月内務遞信兩大臣ノ指令ニヨリ二十三年度ヨ

リ二十七年マデ毎年五千圓宛支出ヲ要スルモノ。

沖繩縣各離島航海費補助

(同上) 明治二十四年度ヨリ二十八年度マデ毎年七百圓ヅツ支出ヲ

要スルモノ(但風帆船輿論島丸船主鹿兒島縣平民林尙五郎へ支拂フモノ)。

日本鐵道會社利益補助

(大藏省) 明治十四年十一月工部省ノ命令ニヨリ株金拂込ノ翌月ヨリ

一ケ年八分ノ利子ヲ每工區落成迄給シ開業後年八分ノ利益ニ上ラザルト

キハ東京仙臺間へ十ケ年仙臺ヨリ青森迄ハ十五ケ年間其不足ヲ補給スル

ガ爲メ要スルモノ。

九州鐵道會社補助

(同上) 明治二十二年四月内閣總理大臣及大藏大臣ノ命令ニヨリ工區哩

數通計二百七十一哩四分ノ一ニ對シ一哩ニ付金二千圓宛給スル爲メ支出

ヲ要スルモノ。

北海道製麻會社補助

(内務省) 明治二十年七月北海道廳長官上申ニヨリ六ケ年間株金募集ノ

翌月ヨリ開業迄年五朱ニ相當スル利子及開業後五朱ノ利益ニ上ラザルト

キハ其不足ヲ補給スル爲メ支出ヲ要スルモノ。

北海道紋鼈製糖會社補助

(同上) 明治二十二年三月大藏省請議ニヨリ利益五朱ニ上ラザルト

キハ十ケ年間利益補助トシテ支出ヲ要スルモノ。

北海道札幌製糖會社補助

(同上) 明治二十一年五月北海道廳長官上申ニヨリ六ケ年間株金募

集ノ翌月ヨリ開始マデ一ケ年五朱ノ割合ヲ以テ利子及始業後年五朱迄ノ

利益不足額ヲ補給スルニ付支出ヲ要スルモノ。

北海道興産社補助

(同上) 明治二十一年十月北海道廳長官上申ニヨリ五ケ年間一ケ年五朱

ニ滿ザル利益補助トシテ支出ヲ要スルモノ

北海道炭礦鐵道會社補助

(同上) 明治二十二年十一月北海道廳長官内閣へ上申創業中株金拂

込ノ翌月ヨリ五朱ノ利子及開業後八ケ年間五朱ニ達セザルトキハ資本額

ノ五朱迄ヲ極度トシ利益補助トシテ支出ヲ要スルモノ。

山陽鐵道會社補助

(大藏省) 明治二十三年三月閣裁ニヨリ凡二百七十二哩ニ對シ每工區落

成ノ上一哩ニ付二千圓工事費補助トシテ支出ヲ要スルモノ。

日本郵船會社補助

(遞信省) 明治二十年十一月遞信大臣ノ請議ニヨリ十五ケ年間毎年金八

十八萬圓宛支出ヲ要スルモノ。

大阪商船會社航海補助

(同上) 明治二十年五月農商務遞信兩大臣ノ請議ニヨリ二十一年度ヨ

神戸那覇間航海費日本郵船會社補助

リ八ケ年間毎年五萬圓宛支出ヲ要スルモノ。
(同上) 明治二十二年十月内務遞信兩大臣ノ請議ニヨリ二十三年一月ヨリ二十八年十二月迄六ケ年金一萬三千圓宛支給ヲ要スルモノ。

傳染病研究所費補助

(内務省) 明治二十六年度ヨリ向三ケ年間毎年一萬五千圓支出ヲ要スルモノ第四回議會議決ノ分。

備外國人俸給手當

(各廳) 備入ノ際締結セル約定書ニヨリ給スル俸給及手當旅費。

日本銀行交付金

(大藏省) 明治二十三年五月閣裁日本銀行へ命令書ニヨリ支出スルモノ。

預金利子

(同上) 明治二十三年三月法律第二十一號ニヨリ支出スルモノ但權利確定シタルモノニ限ル。

地所家屋借料

(各廳) 但既約アルモノニ限ル。

鎖店銀行紙幣交換金

(大藏省) 明治九年第六號國立銀行條例ニ據リ要スルモノ。

憲法第六十八條ニヨレル繼續費

利根川修築費 (内務省) 明治二十年年度以降三十八年度迄ニ要スル工費計畫額ハ四百七萬

七千二百十五圓六十五錢七厘ニシテ二十年年度ヨリ二十二年年度迄ニ於テ既ニ二十七萬三千七十八圓七十四錢二厘ヲ支出シ二十三年年度以降ニ於テ要スル費額ハ三百八十萬四千三百三十六圓九十一錢五厘ナリトス。

富士川修築費

(同上) 明治二十年年度以降二十六年年度迄ニ要スル工費計畫額ハ四十二萬

七千三百五十七圓十九錢一厘ニシテ二十年年度ヨリ二十二年年度迄ニ於テ既ニ千七萬九千三百九十五圓二十九錢二厘ヲ支出シ二十三年年度以降要スル費額ハ二十四萬七千九百六十一圓八十九錢九厘ナリトス。

天龍川修築費

(同上) 明治二十年年度以降二十六年年度迄ニ要スル工費計畫額ハ三十八萬

九千六百七十三圓三十六錢五厘ニシテ二十年年度ヨリ二十二年年度迄ニ於テ既ニ十二萬六千九百二十七圓五十六錢一厘ヲ支出シ二十三年年度以降要スル費額ハ二十六萬二千七百四十五圓八十錢四厘ナリトス。

北上川修築費

(同上) 明治二十二年年度以降三十三年年度迄ニ要スル工費計畫額ハ八十二

萬七千五百八十一圓四十二錢四厘ニシテ二十年年度ヨリ二十二年年度迄ニ於テ既ニ二十一萬三千二百五十二圓五十八錢六厘ヲ支出シ二十三年年度以降要スル費額ハ六十一萬四千三百二十八圓八十三錢八厘ナリトス。

最上川修築費 (同上) 明治二十年度以降三十五年度迄ニ要スル工費計畫額ハ六十八萬八千三百三圓四錢三厘ニシテ二十年度ヨリ二十三年度迄ニ於テ既二十四萬七千八百三十九圓二十四錢九厘ヲ支出シ二十三年度以降要スル費額ハ五十四萬四百六十三圓七十九錢四厘ナリトス。

信濃川修築費 (同上) 明治二十年度以降三十七年度迄ニ要スル工費計畫額ハ百六十五萬六千三十七圓二十六錢八厘ニシテ二十年度ヨリ二十二年度迄ニ於テ既ニ三十八萬四千七百五十六圓七錢一厘ヲ支出シ二十三年度以降ニ要スル費額ハ百二十七萬二千八百八十一圓十九錢七厘ナリトス。

木曾川修築費 (同上) 明治二十年度以降三十九年度迄ニ要スル工費計畫額ハ三百十二萬八千八百十八圓五十五錢一厘ニシテ二十年度ヨリ二十二年度迄ニ於テ既ニ六十二萬五千三百二十五圓九十八錢七厘ヲ支出シ二十三年度以降要スル費額ハ二百五十萬二千七百九十二圓五十六錢四厘ナリトス。

筑後川修築費 (同上) 明治二十年度以降二十七年迄ニ要スル工費計畫額ハ六十四萬八千五百九十圓九十三錢五厘ニシテ二十年度ヨリ二十二年度迄ニ於テ既ニ九萬三千五百三十圓七十六錢二厘ヲ支出シ二十三年度以降要スル費額ハ

四十四萬七千三百二十圓十七錢三厘ナリトス。

諸官衙及議院建築費 (同上) 本費ノ總額ハ二百八十二萬三千三百九十三圓八十九錢四厘ヲ明治十九年度ヨリ二十六年迄ニ支出ヲ要ス。

東京灣砲臺建築費 (陸軍省) 本費ノ總額ハ概計八百二十六萬五千圓ニシテ四十四萬八千三百圓ハ二十三年度迄ニ支出シ殘額七百八十一萬六千七百圓ハ明治二十四年度ヨリ同四十四年度迄ニ支出ヲ要ス。

下關砲臺建築費 (同上) 本費ノ總額ハ概計百六十萬三千六百十圓ニシテ五十二萬七千圓ハ二十三年度迄ニ支出シ殘額百七萬六千六百十圓ハ明治二十四年度ヨリ同三十四年度迄ニ支出ヲ要ス。

紀淡海峽砲臺建築費 (同上) 本費ノ總額ハ百五十一萬三百圓ニシテ内二十三萬千圓ハ二十三年度迄ニ支出シ殘額百二十七萬九千三百圓ハ二十四年度ヨリ三十六年度迄ニ支出ヲ要ス。

兵器彈藥費 (同上) 本費ノ總額ハ八百四十九萬五千一圓十八錢六厘ニシテ二十二年度ヨリ二十三年度迄ニ四十六萬二千九百二十二圓六十一錢五厘ヲ支出シ殘額八百三萬二千七十八圓五十七錢一厘ハ三十八年度迄ニ支出ヲ

要ス。

師團騎兵營新築 (同上) 本費ノ總額ハ四十八萬七千五百圓ニシテ内二十七萬千五百五十二圓四十九錢二厘ハ二十一年度ヨリ二十三年度迄ニ支出シ殘額二十一萬五千九百四十七圓五十錢八厘ハ明治二十四年度ヨリ同二十六年迄ニ支出ヲ要ス。

軍艦製造費 (海軍省) 二十四年度以降起業ノ分總額五百二十一萬八千二百十六圓ニシテ同年度ニ於テ二十五萬七千二百一十一圓二十五年迄ニ於テ百九十七萬八千三百一十一圓二十六年迄ニ於テ百八十一萬九千二百二十七年度ニ於テ九十九萬九千四百七十四圓二十八年度ニ於テ十六萬四千三百八圓ノ支出ヲ要ス。

吳鎮守府建築費 (同上) 本費ノ總額ハ二百十六萬四千五百五十五圓十三錢六厘ニシテ明治二十二年迄ニ於テ三十萬五千圓ヲ支出シテ二十三年迄ニ於テ四十萬八百八十三圓六十四錢三厘二十四年度ニ於テ四十一萬七千九百九十九圓六十錢二十五年迄ニ於テ二十八年度迄ニ於テ每年度二十萬圓二十九年度ニ於テ二十四萬八千七十一圓八十九錢三厘ノ支出ヲ要ス。

佐世保鎮守府建築費 (同上) 本費ノ總額ハ百六十二萬二千四百二十四錢ニシテ明治二十三年迄ニ於テ十五萬圓ヲ支出シ二十四年度ニ於テ十六萬千四百三十三圓七十錢二十五年迄ニ於テ十九萬五千二百四十三圓八十五錢二十六年度ニ於テ二十八萬七千七百五十一圓五十五錢二十七年迄ニ於テ二十四萬五千四百六十九圓二十八年度ニ於テ二十九萬五千七百六十九圓五十錢二十九年度ニ於テ拾七萬圓三十年迄ニ於テ十一萬六千七百三十四圓五十四錢ノ支出ヲ要ス。

兵器製造所建築費 (同上) 本費ノ總額ハ二百五十三萬千五百圓ニシテ明治二十二年度ニ於テ七萬圓ヲ支出シ二十三年迄ニ於テ五萬圓二十四年度ニ於テ七萬圓二十五年迄ヨリ二十九年迄ニ於テ每年度十萬圓三十年迄ニ於テ二十萬圓三十一年迄ヨリ三十三年迄マデニ於テ每年度四十萬圓三十四年度ニ於テ四十四萬千五百圓ノ支出ヲ要ス。

高等商業學校支出金 (文部省) 本費ノ總額ハ二十萬千七百八十六圓ニシテ内八萬五千七百八十六圓ハ特別會計ニ屬スル諸收入ヲ以テ支辨シ十一萬六千圓ヲ二十二年迄ヨリ二十七年迄ニ支出ヲ要ス。

山林原野調査費 (農商務省) 總額概計八十五萬五千八百餘圓ニシテ内十五萬六千八十七圓二十八錢六厘ハ二十三年度ニ於テ支出シ殘額六十九萬九千六百十二圓餘ハ二十四年度以降同三十七年度迄ニ支出ヲ要ス。

全國鐵道線路調査費 (遞信省) 總額四萬九千二百六十二圓ヲ明治二十五年年度ニ於テ二萬二千五百圓二十六年度ニ於テ二萬二千七百六十二圓二十七年年度ニ於テ四千圓ノ支出ヲ要ス。

連發銃製造費 (陸軍省) 總額百六十三萬四百三十九圓三十一錢六厘ヲ明治二十五六七八ノ四ヶ年度ニ於テ各三十二萬六千八百八十八圓、二十九年年度ニ於テ三十二萬六千八百七圓三十一錢六厘ノ支出ヲ要ス。

棉火藥製造場新設費 (同上) 總額十一萬九千六百二十四圓ニシテ明治二十五年年度ニ於テ三萬七千四百三十三圓三十九錢一厘二十六年度ニ於テ八萬三千九百九十圓六十錢九厘ノ支出ヲ要ス。

コロンブス世界博覽會費 (農商務省) 總額六十二萬三千七百十六圓三十五錢三厘ニシテ明治二十四年度ニ於テ五萬四千四百九十五圓五十七錢二十五年度ニ於テ三十一萬三千九十八圓八十九錢二厘二十六年度ニ於テ二十三萬四千四百八十六圓八十八錢一厘二十七年年度ニ於テ二萬四千六百三十五圓一錢ノ支出ヲ要ス。

十勝分監新營費 (內務省) 總額四萬九千六百八十五圓六十八錢八厘ヲ明治二十六年年度ニ於テ二萬五千四百六十一圓三十八錢明治二十七年年度ニ於テ二萬四千二百二十四圓三十錢八厘支出ヲ要スルモノ第四議會議決ノ分。

紀淡海峽要塞砲兵營新營費 (陸軍省) 總額二十萬五千五百六十四圓四十六錢ヲ明治二十六年年度ニ於テ八萬六千四百四圓明治二十七年年度ニ於テ三萬二千七百七十三圓明治二十八年年度ニ於テ一萬九千百圓明治二十九年年度ニ於テ一萬五百五十六圓明治三十年度ニ於テ五萬七千四百三十一圓四十六錢支出ヲ要スルモノ第四議會議決ノ分。

下ノ關海峽要塞砲兵營新營費 (同上) 總額十二萬四千四百六十九圓ヲ明治二十六年年度ニ於テ六萬五千二十二圓明治二十七年年度ニ於テ五萬九千四百四十七圓支出ヲ要スルモノ第四議會議決ノ分。

二十六年年度起業甲鐵戰艦製造費 (海軍省) 總額千五百四十二萬七千七百四十五圓五十五錢八厘ヲ明治二十六年年度ニ於テ二百十四萬八千六百十四圓八十二錢明治二十七年年度ニ於

テ二百十三萬六千七百八十七圓七十二錢明治二十八年度ニ於テ二百三十三萬四千五百七十圓八厘、明治二十九年度ニ於テ二百十萬三千三百九十五圓十三錢二厘明治三十年度ニ於テ二百三十四萬五千四百六十七圓十三錢二厘明治三十一年度ニ於テ二百三十萬五千七百六十圓八十九錢八厘明治三十二年度ニ於テ二百五千四百九十九圓八十四錢八厘支出ヲ要スルモノ第四回會議決ノ分。

二十六年度起業巡洋艦及報知艦製造費

(同上) 總額二百六十五萬四千七百八十圓ヲ明治二十六年度ニ於テ九十五萬三千八百二十圓二十錢明治二十七年年度ニ於テ九十三萬二千六百七十五圓十四錢五厘明治二十八年年度ニ於テ三十七萬三千五百圓七十二錢五厘明治二十九年年度ニ於テ三十萬三千九百九十一圓三十八錢二厘明治三十年度ニ於テ八萬八千八百十二圓五十一錢一厘明治三十一年度ニ於テ二千四百三十圓三錢七厘支出ヲ要スルモノ第四回會議決ノ分。

帝國大學新營支出金

(文部省) 總額十五萬五千七百七十圓ヲ明治二十六年度ニ於テ七萬四千五百八十五圓明治二十七年年度ニ於テ八萬五百八十五圓支出ヲ要スルモノ第四回會議決ノ分。

第四回內國勸業博覽會費

(農商務省)

總額四十萬四千九百八十二圓四十八錢二厘ヲ明治二十

六年度ニ於テ五千六百七十四圓九十二錢明治二十七年年度ニ於テ三十萬千八百三十圓三十九錢明治二十八年年度ニ於テ九萬七千四百七十七圓十七錢二厘支出ヲ要スルモノ第四回會議決ノ分。

日ノ岬航路標識新設費

(遞信省)

總額二萬七千四百三十三圓九十錢四厘ヲ明治二十六年度ニ於テ

八千三百二十一圓九十五錢二厘明治二十七年年度ニ於テ一萬九千八十一圓九十五錢二厘支出ヲ要スルモノ第四回會議決ノ分。

憲法第六十七條ノ歲出種別ノ問題

本問題ハ政府及衆議院トモ之ヲ論決スル所ナクシテ第四回議會ヲ了レリ。故ニ第五回議會衆議院ノ豫算會議ノ劈頭第一ニ起ルベキハ本問題ニシテ、其ノ論據トスル所ハ左ノ二點ニ岐ルベシ。

- 甲 會計法補則ニ依テ一旦定マリタルモノハ既定ノ歲出ナリ、故ニ既定ハ何時マデモ既定ナリ。
乙 會計法補則ニ就テ議院ハ未ダ曾テ討論シタルコトナシ。故ニ甲ノ所謂既定ノ歲出ハ未決定ノモノナリ。

甲ノ理由ノ要領

政府ガ明治二十三年八月會計法補則ヲ發布セシハ憲法第六十七條ノ歲出ニ關スル紛議豫防ノ爲ナリ。而シテ第一回議會ニ於テ衆議院ハ一モ會計法補則ニ論及スル所ナクシテ政府ニ對シ同意ヲ求めタルヲ以テ、補則ニ列記ノ費目ハ自ラ憲法第六十七條ノ歲出トシテ政府議院トモ之ヲ確認シタルモノナリ。而シテ夫ノ費目ハ憲法正文ノ保障スル所ニ屬スルヲ以テ、將來議院ハ該費目ニ關シ紛議ヲ試ムルヲ得ザルノミナラズ、政府ト雖容易ニ之ガ廢除ヲ爲スコトヲ得ズ。

乙ノ理由ノ要領

會計法補則ニハ固ヨリ不同意ナルヲ以テ第一回議會ニ於テ之ガ當否ヲ論ゼントセシモ、如何セン豫算會議ノ形狀ハ辛ジテ二十四年度ノ豫算ヲ成立セシメ得タルニ止マリシヲ以テ、遂ニ形體上ヨリ之ヲ見レバ衆議院ハ一モ二モナク會計法補則ニ同意ヲ表シタルガ如クナレドモ、決シテ然ラズ。或ル事情ノ爲メニ憲法第六十七條ニ屬スル費目ハ未決定ニシテ第一回議會ヲ了レリ。又第二回議會ハ豫算會議ノ中途ニシテ議會解散ノ不幸ニ遭遇シ、第三回議會ハ臨時議會ニシテ通常經費ヲ議セザルヲ以テ、會計法補則ニ論及スルノ機ナク、第四回議會モ亦豫算不成立ノ不幸ニ際セシモ 大詔煥發ノ爲メ危機一轉始メテ豫算ノ細節目ニ付討論スルヲ得ルニ至レリ。是ニ於テ果セル哉會計法補則論始メテ起レリ。然レドモ政府ト議院ト討議數番ノ後、會期切迫ノ爲メ補則論ハ之ヲ次回ノ議會ニ於テ決定スルコトヲ約シテ該議會ヲ了レリ。

議院ガ會計法補則ニ論及スルノ機會ヲ得ザリシハ右ニ言フガ如シ。故ニ補則ニ列記ノ費目ハ形體上ハ姑ラク措キ、實際ハ議院ニ於テ未ダ之ヲ確認シタルモノニアラザルヲ以テ、政府及議院ハ次回ノ議會ニ於テ憲法第六十七條ノ歲出ノ範圍ヲ確定シ、將來ニ向テ紛議ノ因ヲ絶ツコトヲ務ムベシ。
甲乙兩者ノ理由トスル所ハ各其ノ據ヲ異ニス。而シテ茲ニ既往ニ鑑ミテ第五回議會ニ於ケル本件

ノ結果ヲ推測スレバ左ノ如クナルベシ。

甲ノ結果

政府甲説ニ據リテ二十七年豫算ヲ衆議院ニ提出セバ、議院ノ多數ハ(乙説ナルヲ以テ)會計法補則ハ二十四年度豫算ニ對シテノミ效力アリト云ヒ、政府ハ既定ノ費目ハ政府ガ議會ノ要求ニ應ジ廢除スルマデハ何時マデモ既定ナリト云ヒ、兩々相峙シテ下ラザルトキハ、竟ニ議院ハ憲法解釋上政府ト其ノ意見ヲ異ニスルノ故ヲ以テ上奏裁斷ヲ仰グニ至ルベシ。是ニ於テ第五回議會ハ豫算會議ノ初頭ニ於テ或ハ解散ノ不幸ニ陥ルコトナキヲ保セズ。若シ事茲ニ至ラバ政府ハ年々會計法補則ヲ鐵壁トシテ議會ト戰ハザルヲ得ザルニ至リ、和衷協同ノ途ハ絶滅スルノ覺悟ナカルベカラズ。

乙ノ結果

政府乙説ニ據リテ二十七年豫算ヲ衆議院ニ提出センカ、其ノ方法ニアリ、曰ク會計法補則ニ拘ハラズ斷然政府ノ意見ヲ定メテ議院ニ臨ミ、議院ノ意見ニシテ政府ノ意見ニ合一スル點ニ對シテハ同意ヲ表シ、其ノ同意スベカラザル點ニ對シテハ十分ニ其ノ理由ヲ示シ、之ヲ排斥シテ以テ次回ノ議會ニ於テ本問題ヲ決了スベシ。曰ク會計法補則ニ列記ノ費目ハ憲法上既定(形體上タリト雖)

ノ費目タルヲ以テ、今俄ニ之ヲ廢除スルヲ得ザルベキヲ以テ、豫算編成上ニ於テ眞ニ國家ノ存立上缺クベカラザル費目(文武官俸給兵器彈藥費ノ類)ト其否ラザルモノ(修營費及軍事費中ノ雜給旅費ノ類)トヲ區別スベシ。此ノ事ハ政府ト議會トノ是迄ノ行掛リ上ヨリ之ヲ見レバ、或ハ政府ガ議會ニ對シテ讓與ニ過グルカノ觀ナキニアラス。然レドモ一步ヲ退キテ之ヲ考フレバ大ニ然ラザル所アルベシ。畢竟 大詔煥發ノ結果トシテ和協ノ途ヲ謀ルニハ、事實ト條理トニ基キテ百年紛議ノ因ヲ絶ツノ手段ヲ取ラザルベカラズ。此時ニ當リ政府ハ幾分ノ非難ヲ蒙ルハ免ルベカラザル所ナリ。

左ニ附載スルハ第一回議會以來本問題ニ係ル議院ニ於ケル議論ノ要領ナリ。以テ參考ニ資ス。

第一回議會

三崎龜之助曰(前略)實ニ此ノ會計法補則ニ付テハ我々モアノ法律ヲ極メラレタル立法者トハ斷然精神ヲ異ニシテ居リマス。我々ハ場合ニ依リマシテハアレヲ廢止スルカ、或ハ改正スルカノ止ヲ得ザル議論ヲ吐クカモ分リマセヌ(中略)又或ル論者ハ會計法補則ハ違憲ナリト云フ、果シテ其レガ多數ナラバ違憲ト云フ決議ヲシ且其ノ處分ヲ爲シテ可ナリ……(衆議院速記録明

治二十四年二月五日、五六三頁)

第四回議會豫算委員會

尾崎行雄曰（前略）一言ニシテ言ヘバ前年來ノ會計法補則ニ掲ゲタモノヲシテ六十七條ノモノト御認メデスカ

渡邊大藏大臣曰（前略）其ノ通りデス。

尾崎行雄曰（前略）此ノ政府ノ出シタモノ（四十九萬何圓減額ノ費目表ヲ云フ）ヲ見マスト種種込入テ居テ、咄嗟ノ間ニ之ガ當ヲ得テ居ルカト云フコトハ無論言ヘナイ。然ルニ夫ヨリ以前ニ當テ政府ノ同意ヲ求ムベキハ何々デアルカト云フコトヲ一定シ置クガ必要デナイカト思ヒマス。従前ノ手續ニ依テ二十四年度限リニ消滅スベキ會計法補則ヲ第一期ニ於テ採用シ、又第二期ニ於テ採用シ、又第三期ニ於テ採用セラル、ト云フト……元來此ノ會計法補則ハ二十四年度ニ實施スルニ付テ發布シタルモノデ、既ニ消滅シタモノデス。夫カラ以後ハ議院ト政府ガ能ク協議シテドレノハ六十七條ノ費目ト云フ、其ノ費目ヲ定ムベキデ確定メテ置クベキダガ、今日マデ詰リ定メテ無カツタ。此度ハ 詔勅モ下サツタ以後、一旦大衝突ヲ起シタ政府ト能ク協議シテト云フコトデ、斯ノ如キ相談ヲスル場合ニナツタ以上ハ、此際ニ同意ヲ求ムベキ範圍ト云フコトヲ一定シ、又豫算ノ委員會ノ意見ヲ一定シ衆議院ノ意見ヲ一定シテ置カスト、徒

ラニ混雜ヲ招クノミナラズ、將來紛擾ヲ招クト思ヒマス（中略）先ヅ此會計法補則ヲ原案トシテ政府ノ意見ヲ問フト思ヒマス。

中野武營曰（前略）會計法補則ノ示ス所ニ依レバ、遞信事業費ト云フモノハ法律ノ結果トシテアル（中略）其費目ハ法律ノ結果ニ相違ゴザリマスマイケレドモ、其費目ノ金額ニ於テハ直ニ其レヲ以テ法律ノ結果ト云フコトハ出來マスマイ。云々

陸奥外務大臣曰（前略）今日會計法補則ニ出テ居ルトカ、政府ノ見ル所ハ議會ノ見ル所ト違フトカ云フテ、枝葉ニ涉リテ論ズルコトハ（中略）兎モ角モ、此政府ノ出シタ所ノモノニ對シテ順序ヲ逐フテ議シテ行ク、而シテ或ル省ニ至ツテ中野君ナリ尾崎君ノ如キ論ガ出マシタナラバ、當局ノ大臣モ夫ニ就テ御協議ヲシテ、一番ノ難問ハ仕舞ニ殘シテ御相談ヲスルト云フコトハ出來ヌコトデナイト思ヒマス。今日枝葉ニ涉テ論ジタナラバ一種ノ法律論ヲスル様ニナツテ云々（以上豫算委員速記録明治二十六年二月十六日七頁）

尾崎ノ動議多數ニシテ成立シ、直ニ會計法補則ニ付テ議決シタル結果左ノ如シ。
各科主査理事及各科員一名ヨリ成リタル豫算再調査ニ係ル特別委員會ノ報告。

會計法補則

第一條

- 一、原案ノ通（文武官ノ俸給及文官退官賜金）
- 二、但廳費、旅費、修繕費、雜給ヲ除ク（陸海軍軍事費憲兵費屯田兵費）
- 三、原案ノ通（賞勳年金及褒賞費）
- 四、原案ノ通（外國條約及約束ニ依ル支出）
- 五、削除（各廳ノ廳費及經常費修繕費）

第二條

- 一、帝國議會ノ議長副議長及議員ノ歳費ト改ム（帝國議會經費）
- 二、削除（裁判所及會計検査院經費）
- 三、原案ノ通（恩給扶助料罷役恤金及死傷手当）
- 四、豫算編制ノ改正ヲ注文ス（徴兵費）
- 五、原案ノ通（徴稅費）
證券印紙切手類製造買戻印費鑑札製造費所得稅調査委員
手當市町村ニ交付スル徴稅費滯納處分費差押物件買上代
- 六、原案ノ通（囚徒費）
- 七、削除（遞信事業及航路標識費）
- 八、原案ノ通（内外國難破船費）

- 九、削除（沖繩縣及小笠原島地方費）
- 十、原案ノ通（備荒貯蓄）
- 十一、原案ノ通（北海道拂下土地買上代）
- 十二、原案ノ通（恩賞及救助費）

第三條 悉ク原案ノ通

- 一、（神社費）
- 二、（公債償還利子及拂手數料）
- 三、（既ニ定マレル効力アル命令ニ依テ毎年各地方ニ付與スベキ公共工事費補助及警察費聯帶支辨金）
- 四、（沖繩縣諸祿）
- 五、（既ニ定マレル効力アル命令ニ依リ航運鐵道製造殖産ノ會社及病院學校ニ付與スベキ補助又ハ利子保證）
- 六、（雇外國人俸給恩給及手当）
- 七、（法律上ノ賠償及訴訟費）
- 八、（諸拂戻金）

九、(國庫金取扱費)

十、(預金利息)

十一、(既約アル地所家屋借料)

豫算本會議

齋藤珪次曰 委員長ニ代リ豫算委員會ノ經過ヲ報道イタシマス(中略) 兎ニ角六十七條ノ費目ヲ確定致シタイト云フコトニナリマシテ、夫デ此ノ費目ヲ確定スルニ就テハ何カ據ル故ガナケレバナラヌ、故ニ會計法補則ナルモノヲ茲ニ假リニ原案トシテ一々意見ヲ定メマシタ。而シテ之ニ政府ハ同意致サレルデアラウカト政府ニ問ヒマシタ。處ガ政府モ六十七條ノ見解ハ政府モ見ル所ガアツテ容易ク同意ヲスルコト出來ヌ(中略) 故ニ見解ハ他日ニ讓ルコトニシテ、此際ハ政府ノ示シタ所ノ四十九萬何圓ヲ減ズルコトニ致シテ協議スルコトニナリマシタ云々(衆議院速記録明治二十六年二月二十二日九三一頁)。

同意ヲ求ムルノ理由

- (1) 謬說
- (2) 第六十七條ノ明文ハ軍制官制ヲ理由トスルヲ禁ゼズ
- (3) 謬說ニ於テ理由トスル所二件
- (4) 第一理由ノ非議
- (5) 事實ニ於テ第一理由ヲ貫徹セシメ難キ所以
- (6) 豫算ハ將來ヲ期シタルモノナリ
- (7) 行政事項ニ關スル原則ノ應用法
- (8) 第二理由ノ非議
- (9) 第六十七條ノ立法精神
- (10) 職權外ノ同意ハ無効ナリ
- (11) 同意不同意ノ眞性(第一)豫算ニ對シテ表スル所ナリ

同意ヲ求ムルノ理由

- (12) (第二) 金額ニ對シテ表スル所ナリ
- (13) (第二) 軍制官制ノ改正ヲ理由トスル場合
- (14) 法律改正ヲ理由トシタル場合
- (15) 反對諸論辯駁
- (16) 結論

(1) 謬說 或ル論者ハ議會ガ官制軍制等ノ改革ヲ理由トシテ豫算ヲ修正シ、以テ政府ノ同意ヲ求ムルヲ違憲ノ處爲ナリトシ、依テ議會ハ此ノ如キ理由ヲ以テ同意ヲ求ムベカラズ。政府モ亦此ノ如キ請求ニ應ジテ回答ヲナスベカラズト論ズ。此ノ說固ヨリ第六十七條ノ精神ヲ誤解スルニ出デタルモノナリ。

(2) 第六十七條ノ明文ハ軍制官制ヲ理由トスルヲ禁ゼズ 先ヅ第一ニ第六十七條ノ明文ニ於テハ議會ハ同意ヲ求メ政府ハ之ニ同意不同意ヲ表スルノ權アルヲ見ルベキノミニシテ如何ナル理由ヲ以テスルトキハ同意ヲ求メ、及表スベク、如何ナル理由ヲ以テスルトキハ同意ヲ求ムベカラザルカ、表スベカラザルカ、明文上其ノ理由ニ區別アルヲ見ズ。然ラバ則チ議會ハ官制軍制等ヲ理由トシテ同意ヲ求ムベカラズ、政府ハ之ニ應答スベカラズトノ論ハ第六十七

條ノ規程ヨリ直ニ推論スルヲ得ズ。

(3) 謬說ニ於テ理由トスル所二件 蓋シ此ノ論ニ於テ理由タルヲ得ベキモノハ多クモ左ノ二者ニ出デズ。曰豫算ハ未來ノ官制軍制ヲ基礎トシテ調製スベカラズ。故ニ之ニ基クノ豫算ハ同意ヲ求ムベカラズト、曰ク同意ヲ求メ及同意ヲ表スルニハ其ノ豫算ノ基礎タル官制軍制ヲ確定セザルベカラズ。然ルニ議會モ政府モ之ヲ確定スルノ職權ナシ。故ニ之ニ基クノ豫算ハ同意ヲ求ムベカラズ竝ニ表スベカラズ。

(4) 第一理由ノ非議 右ノ理由ニ於テ先ヅ第一ニ豫算ハ未來ノ官制軍制ヲ基礎トシテ調製スベカラズトノコトヲ疑ハザルヲ得ズ。固ヨリ未來ノ官制軍制ニシテ其ノ果シテ何レノ時ニ實行スベキヤ、又ハ遂ニ實行セザルベキヤ、確實ナラザルモノニ付テ豫算ヲ調製スルコト、事實ニ於テ決シテ之ナカルベキハ論ヲ待タズ。此ノ如キハ此ニ論ズルノ限ニアラズ。此ニ未來ノ官制軍制ト稱スルハ議會若クハ政府ニ於テ次ノ會計年度ニハ實行ニ至ルベシト信ズルモ、豫算調製ノ時期ニ於テ未ダ現行セラレ居ラザル者ヲ指サヤ明カナリ。

(5) 事實ニ於テ第一理由ヲ貫徹セシメ難キ所以 此ノ如キ未來ノ官制軍制改正ヲ基礎トシテ豫算ヲ調製スベカラズト云フコトハ、先ヅ第一ニ事實ニ於テ決シテ行ハルベカラズ。今論者ハ特ニ議會ヨリ改正案ヲ提出シタル場合ノミヲ取テ論ズルガ故ニ、彼ガ如キ議論ヲ主張シ

同意ヲ求ムルノ理由

其ノ不都合ヲ事實上ニ感ゼズト雖、試ニ政府ノ一面ヨリ立論セヨ、政府官制ヲ改正セントスルノ意向アリ、而モ其ノ改正ヲ實行スルトキハ支出ヲ要スルモノアリトセン。此ノ場合ニ於テモ政府ハ此ノ改正ヲ基礎トシテ豫算ヲ調製シ、議會ノ協賛ヲ求ムルヲ得ズシテ、却テ數月ノ後ハ必ず廢止セントスル現行官制ニ依テ豫算ノ協賛ヲ經、而ル後數月ノ後其ノ己ヲ得ザルノ改正ヲ實行シ、此ニ依テ生ジタル豫算外ノ支出ニ付、次ノ會期ニ於テ事後承認ヲ求メザルベカラザルニ至ラン。且此ノ支出ハ既定歳出タラザルガ故ニ、或ハ次ノ會期ニ於テ廢除セラル、モ亦知ルベカラズ。果シテ此ノ如クナルニ於テハ行政ノ活動ハ滯滞ヲ免レズシテ、一たび發シタル官制軍制ノ一年ヲ出ズシテ屢々變更スルモノ極メテ多キニ至ラン。是レ極メテ不都合ノ制トス。但シ第六十七條ノ規定スル所果シテ此ノ如クナルトキハ、不都合ト雖亦遵ハザルヲ得ズ。然レドモ第六十七條ハ前ニモ示ス如ク曾テ其ノ同意ノ理由ヲ規定セズ、然ラバ則チ又何ノ爲ニ憲法ヲ此ノ如キ不條理ノ制度ニ解スルノ必要カアル。

憲法ノ明條ノ曾テ示命セザル所ノ不都合ヲ實際ニ生ズルコト此ノ如クナルニモ拘ハラズ、彼ノ論者ガ之ヲ主張シテ忌憚ナキモノハ蓋シ豫算ハ行政事項ナリ、而シテ行政ハ一般法規ニ順從セザルベカラズト云ヘル原則アルニ依ルナランカ、抑モ此ノ原則正確ナルハ論ヲ待タズ。然レドモ之ヲ此ノ場合ニ應用スルニ至リテハ寧ロ其ノ應用スベキノ場合ヲ誤レリト云ハザルベカラズ。

(6) 豫算ハ將來ヲ期シタルモノナリ

豫算ハ未來ノ計畫ナリ。將來一年ノ間ニ起ルベキ事件ニシテ其ノ逆メ推測シ得ベキモノハ之ヲ推測シ、以テ豫メ之ニ應ズベキ出入ヲ算定スルモノナリ。故ニ豫算ニ掲ゲタル事件ハ凡テ皆豫算議定ノ時ニ現在スベキモノノミニアラズ、豫算成立ノ後生起スベキ事件亦皆豫算ノ中ニアリ。故ニ又豫算ニ掲ゲタル出入ハ豫算成立ノ時ニ直チニ實行セラル、モノニアラズシテ、其ノ事ノ生起スル前後ニ應ジテ順次實行ニ至ルモノトス。而シテ其ノ實行ニ至ル迄ハ一片ノ計算書ニ止マレリ。一般ノ法規ニ矛盾スルノ機會ヲ生ゼズ、其ノ計算書ニ依テ收支ヲ實行スルニ及ンデ始メテ一般ノ法規ニ矛盾シ、又ハ矛盾セザルノ實ヲ生ズ。例へバ官制軍制ノ改正ヲ理由トシタル豫算ニシテ、其ノ豫期シタル時期ニ於テ改正ノ實行セラルル時ハ、豫算ハ曾テ官制軍制ニ抵觸シタルコトナシ。之ニ反シテ官制軍制ノ改正ニシテ時期ニ至リ猶改正ヲ經ザランカ、茲ニ始メテ矛盾ヲ生ズ。

(7) 行政事項ニ關スル原則ノ應用法

以上ノ實例ニ依テ之ヲ見レバ、行政ハ一般法規ニ順從セザルベカラズト云ヘル原則ハ之ヲ豫算ニ應用シテ豫算ハ凡テ之ヲ調製スルノ時ニ現行スル一般法規ヲ基礎トシテ調製セザルベカラズト云フノ論結ヲナスヲ得ズ。此ノ如キハ豫算ノ性質ト相容レズ、唯ダ前ノ原則ヲ豫算ノ上ニ應用スルトキハ、適法ニ成立シタル豫算ト雖、一般法規ト矛盾アルトキハ行政事項タルノ性質トシテ豫算ニ定ムル所ヲ枉ゲテ法規ノ規程ニ順從セザルヲ

得ズト云フヲ得ベキノミ。但シ此ノ論結モ我が憲法ニ依レバ絶對的ニ斷定シ難キモノアリ。其詳細ハ後段ニ至ツテ之ヲ再述スベシ。

豫算ハ一般ノ法規ニ依ラズ將來ノ改正ヲ基礎トシ之ヲ調製スルヲ得ベシトハ云フト雖、豫算ハ法規ニ依ラズシテ調製スルヲ得ベシト云フニアラズ。成立ニ關スル法規ハ載セテ憲法ニアリ、豫算ノ成立ニシテ憲法ニ違ハンカ、其ノ結果ハ第三章ニ於テ既ニ之ヲ詳論シタリ。而シテ軍制官制等ノ支出ニ關スル廢除削減ノ豫算ノ成立ハ、憲法第六十七條之ヲ規定ス。如何ニ之ヲ規定セル、曰ク、政府ノ同意ヲ得ズシテ帝國議會ハ之ヲ廢除削減スルヲ得ズト。

以上ノ所論ニ依リ所謂第一ノ理由ハ憲法ノ明文ニ於テモ、豫算ノ性質ニ於テモ、共ニ其ノ根據ヲ得ザルヲ知ルニ足ルベシ。即チ憲法第六十七條ハ同意ヲ求ムルノ理由ヲ制限セズ。而シテ豫算ノ性質ヨリ之ヲ云ヘバ將來ノ官制軍制改正ヲ基礎トシテ、却テ現行法規ニ基カズシテ之ヲ調製スルコトアルヲ得ベシ。但ダ此ノ場合ニ於テハ政府自ら發意シ又ハ議會ニ同意シタルコトヲ必要トス。

(8)、第二理由ノ非議 夫レ政府ノ同意ヲ得ズシテ廢除削減スベカラズ。然ラバ則チ議會ガ政府ニ同意ヲ求ムルニハ政府ノ法律上同意シ得ベキ職權ヲ有スル者ニ基ケル豫算ナラザルベカラズ。議會ガ之ヲ求ムルニハ議會ガ議シ得ベキ職權ヲ有スル事件ニ基ケル豫算ナラザルベカラズ。

今議會ハ官制軍制ヲ定ムルノ職權ナク、政府モ亦豫算ヲ以テ官制軍制ヲ變更スルノ權力ヲ有セザルトキハ、此ノ如キ理由ニ依テ之ヲ求メ、之ヲ表スルハ之ヲ違法ト云ハザルベカラズトハ即チ同意不可求説ノ第二ノ理由ナリ。

議會ハ軍制官制ヲ定ムルノ權ヲ有セズトハ固ヨリ爭フベカラズ。然レドモ是ヲ以テ議會ハ軍制官制ヲ一切口ニスベカラズトハ決シテ云フヲ得ズ。議會ハ憲法ニ於テ質問建議上奏ノ權アリ。而シテ質問建議上奏ノ事柄ニ付テハ何等ノ制限アルコトナシ。即チ議會ハ固ヨリ官制軍制ヲ論ズルノ權アリト云ハザルベカラズ。今官制軍制ノ改正ヲ理由トシテ廢除削減ノ同意ヲ求ムルト云フハ、議會ハ之ニ依テ直接ニ官制軍制ヲ定ムルニアラズ、議會ノ定メントスル所、否、定メ得ル所ハ豫算ニアリ。尙之ヲ詳説スレバ議會ハ自ら官制軍制ヲ定メズ、唯ダ之ニ就テ意見ヲ有シ、其ノ意見ノ職權アル者ニ採用セラルベキヲ豫期シ、之ニ依テ豫算ヲ調製シタルノミ。故ニ政府ニシテ其ノ豫算ニ同意ヲ表センカ、政府ハ之ヲ執行スル爲ニ軍制官制等ヲ改正シテ議會ノ意見自ら實行セラル、ニ至ラント雖、政府若シ其ノ豫算ニ同意ヲ表セザランカ、議會ノ改正意見ハ自然ニ削減セン。亦タ以テ議會ノ理由トシタル官制軍制ノ改正ハ議會之ヲ定メタルモノニアラズシテ、唯ダ之ヲ論議シタルモノナルヲ知ルニ足ル。尙此ノ論議ニ止マルノ性質ハ政府ガ議會ノ豫算ニ同意ヲ表シタル場合ニ於テモ明カニ之ヲ知ルヲ得ベシ。即チ此ノ場合ニ於テモ理由ハ政府ヲ拘束セズ、唯ダ豫

算ノミ政府ヲ拘束ス。故ニ豫算ヲ執行スル上ニ於テ妨ゲナキトキハ政府ハ決シテ議會ノ理由トシタル改正ヲ實行スルノ義務ヲ有セズ。

議會ガ豫算ノ理由トシタル官制軍制ノ改正ニシテ論議ノ範圍ニ止マルノ間ハ決シテ之ヲ違法ノ處置ト稱スルヲ得ズ。

或ハ曰ク、法令ノ依テ以テ施行セラレ、行政ノ依テ以テ活動スルヲ得ル所以ノモノハ其ノ支出ノ阻礙ナキニ在リ。今議會ハ豫算ヲ議定スルノ權アリ、而シテ又官制軍制ヲ論議スルノ權アラバ其ノ論議スルノ權ニ依テ論議シタル官制軍制ヲ理由トシ、其ノ議定シ得ベキ豫算ヲ議定シタルトキハ、議會ハ豫算議權ヲ擴張シテ遂ニ大權ヲ左右スルノ權ヲ得ルニ至ラン。是レ決シテ憲法全體組織ノ許ササル所トス。然ラバ則チ憲法ハ豫算ヲ議スルニ方テ官制軍制ニ容喙スルノ職權ヲ議會ニ與ヘザルヤ明カナリト。

(9)、第六十七條ノ立法精神

曰ク此レ憲法第六十七條ヲ讀ムノ精ナラザルニ依テ此ノ如キ見解ヲ生ズルニ至ル。蓋シ議會ガ豫算議權ヲ擴張シテ遂ニ 天皇ノ大權ヲ左右スルガ如キ濫弊ヲ生ズルコトナカラシメントスルハ、實ニ憲法ノ精神ナリ。然レドモ其ノ精神ハ實ニ第六十七條ニ於テ顯ハレタルモノナルコトヲ等閑ニ看過スベカラズ。是レ既ニ第四章ニ於テ憲法第六十七條ノ精神ヲ講述シタル所ニ依リ明瞭ナリト雖、尙之ヲ此ニ問題トナレル場合ニ照シテ詳説センニ

若シ議會ガ軍制官制ノ改正ヲ理由トシタル豫算ヲ直ニ確定シ得ルモノナランニハ、論者ノ説ノ如ク豫算議權ノ影響大權ノ上ニ波及シ、豫算ハ法律勅令ニ對シテ前定ノ效力ヲ有シ、而シテ議會ハ職權内ノ活動ヲ爲シナガラ職權外ノ事ヲモ隨意ニ左右シ得ルニ至ラン。然レドモ第六十七條ノ規程ニ依レバ議會ハ政府ノ同意ヲ得ルニアラザレバ軍制官制ニ基ケル既定歳出ヲ廢除削減スルヲ得ズ。即チ同意ヲ得ル迄ハ豫算ハ未ダ成立セズ。豫算ニシテ成立セザル以上ハ爲ニ官制軍制ヲ左右セントスルモ得ベカラズ。

依是觀之、憲法第六十七條ハ議會ノ論議ノ權ヲ認メ、而モ其ノ論議ノ權ヲシテ適當ノ範圍ヲ超越シテ實行ノ權タルノ患ナカラシムル爲ニ設ケラレタルモノニシテ、議會ヲシテ始メヨリ法令ニ背反スルノ餘地ヲ得ザラシメタルモノナリ。即チ第六十七條ノ存在セン限りハ、議會何等ノ理由ヲ以テ豫算ヲ修正スルモ決シテ職權外ニ逸出スルコトアリ得ベカラズ。

以上ノ所論ニ依リ、議會ハ官制軍制ノ改革ヲ理由トシテ豫算ヲ修正シ、之ニ依テ政府ノ同意ヲ求ムルモ決シテ職權ヲ踰越シタルモノニアラザルハ明カナラン。官制軍制等ハ一トシテ議會ノ之ヲ論ズベカラザルモノナシ。唯ダ議會ハ之ヲ言フノ權アリ、之ヲ行フノ權ナキノミ。

或ハ曰ク議會ハ之ヲ言フノ權アリ、之ヲ行フノ權ナシトセバ、其ノ論議シテ豫算ノ理由トシタル官制軍制ハ、議會ニ於テ其ノ實行ノ何時ニアルヲ期スルヲ得ザルモノナリ、議會ハ此ノ如キ不確

定ノ基礎ニ依テ豫算ヲ議スルヲ得ザルベシト。

答テ曰ク、其ノ論議シタル官制軍制ハ議會ニ於テ其ノ實行ノ何ノ時ニ在ルヲ知ラザルモノナリ。故ニ第六十七條ハ此ノ如キ基礎ニ依テ議會ガ豫算ヲ議定シテ間接ニ官制軍制實行ノ期ヲ定ムルニ至ルヲ許ルサズ。必ズ先ヅ政府ノ同意ヲ求メシム。政府同意ヲ表センカ、其ノ官制軍制ノ改正ノ豫期ハ確實ナルカ、或ハ政府ハ議會ノ議既定ノ官制軍制ニ影響セント斷定シタルナリ。乃チ此ノ時ニ至テ第六十七條ハ議會ガ此ノ如キ基礎ニ基ケル豫算ヲ議定スルヲ許セリ。是レ憲法第六十七條ノ規定スル所トス。故ニ憲法第六十七條ハ曾テ議會ノ他ノ條ニ依テ得タル論議ノ權ヲ減縮セズ唯ダ豫算議權ノ爲ニ論議ノ權ヲシテ適當ノ範圍ヲ踰越スルニ至ルノ防範ヲ設ケタルノミ。

豫算ハ其ノ性質ニ於テ官制軍制ノ改正ヲ基礎トシテ調製スルヲ妨ゲズ。議會ハ又之ヲ論ズルノ權アリトスルトキハ、官制軍制ノ改正ノ理由トシタル豫算ニ就テ、政府ノ同意ヲ求ムルヲ得ベキヤ否ヤハ、唯ダ政府ガ之ニ同意ヲ表スルノ權アリヤ否ヤト云フノ一點ニ歸着セザルベカラズ。

(10)、**職權外ノ同意ハ無効ナリ** 果シテ政府ニシテ同意ヲ表スルノ權ナカラシカ、議會ハ固ヨリ之ニ向テ同意ヲ求ムルモ無用タルベク、或ハ政府ニシテ誤テ同意ヲ表センカ、是レ職權外ノ同意ニシテ恰モ議會外ノ或ル一政黨又ハ一人ノ集合體ガ同意ヲ表シタルニ異ナラズ。議會ニシテ若シ此ノ如キ同意ニ依テ廢除削減ヲ議定センカ、是レ議會モ亦職權外ノ作用ヲ爲シタルモノ

ニシテ、此ノ如キ作用ニ依テ調製セラレタル豫算ハ豫算ニアラズ。政府固ヨリ職權外ノ同意ヲ表スレバ自ラ其責ナカラズト雖、議會モ亦豫算ヲ議定セズシテ憲法上ノ職守ヲ盡サルノ責ヲ免ルベカラズ。故ニ議會ハ此ノ如キ事ヲ以テ政府ノ同意ヲ求ムベカラズト云フハ當レリ。

然シナガラ是レ唯ダ其ノ同意ヲ求ムル所、政府ノ職權外ニ在ル時ニ就テ云フベシ。故ニ官制軍制ノ改正ヲ理由トシタル豫算ニ於テハ、未ダ前段ノ論理ヨリ直ニ之ヲ以テ議會ノ同意ヲ求ムベキ所ニアラズト結論スルヲ得ズ。先ヅ官制軍制ノ改正ヲ理由トシタル豫算ニ同意ヲ表スルト云フハ如何ナル意義ヲ有スルカ、果シテ其ノ事ハ政府ノ職權外ニアルカヲ詳ニセザルベカラズ。

(11)、**同意不同意ノ眞性(第一)豫算ニ對シテ表スル所ナリ** 第一ニ政府ガ議會ニ向テ同意ヲ表スルハ其ノ理由ニ同意ヲ表スルニアラズ、其ノ豫算ニ同意ヲ表スルナリ。議會ノ理由ノ如何ニ拘ラズ政府ハ議會ノ廢除削減ノ額ニ依テ政府ノ責任ヲ全フスルヲ得ベシト信ジテ、此ノ金額ニ同意ヲ表スルモノナリ。而シテ果シテ其ノ金額ニ依テ政府ノ責任ヲ全フスルヲ得ベキヤ否ヤハ政府自ラ之ヲ判定スルノ職權ナカルベカラズ。

(12)、**(第二)金額ニ對シテ表スル所ナリ** 第二政府ハ議會ノ理由ニ同意ヲ表スルニアラズ、其ノ豫算金額ニ同意ヲ表スルナリト雖、若シ之ニ同意ヲ表スルトキハ隨テ其ノ理由モ實行セザルベカラザルノ必要經費上ヨリ間接ニ生ズル場合ニ於テモ、尙政府ハ之ニ同意ヲ表スルノ職權

アルモノト見ザルベカラズ。何ントナレバ行政ハ獨リ現在ニ生起スル事件ヲ處置スルノミ。其ノ職務ニアラズ。亦將來ニ生起スベキ事件ニシテ尙未必ナルモノト雖、手段ヲ盡シテ之ヲ推定シ、以テ豫メ之ニ應ズル策ヲ定ムルコト其ノ責任ナリ。故ニ天變地異ヨリ生ズル支出スラ尙其ノ豫メ推定シ得ベキ限リハ之ヲ豫算ニ載スコトヲ得、今官制軍制ノ改正ハ天變地異ノ期シ難キノ比ニアラズ。即チ將來ノ改正ヲ推測シ政府ノ信ズル所ニ依テ同意不同意ヲ表ス、固ヨリ政府ノ職權ナリ。

(13)、**第三官制軍制ノ改正ヲ理由トシタル豫算ニ於テハ、政府ハ前段述ブル所ノ職權ヲ一層確實ニ行フヲ得ベシ。何トナレバ官制軍制ハ法律ノ如ク議會ノ協賛ヲ待ツモノニアラズ。而シテ政府ハ大權施行ノ責ニ任ズルノ府ナリ。即チ官制軍制ノ改正ヲ經ベキヤ否ヤハ政府ノ當然前知シ得ベキ所ナレバナリ。**

(14)、**法律改正ヲ理由トシタル場合** 第四政府ハ獨リ官制軍制ノ改正ヲ理由トシタル豫算ニ職權上同意ヲ表シ得ルノミナラズ、法律改正ヲ理由トシタル豫算ニ就テモ或ル場合ニ於テハ職權上同意ヲ表スルヲ得ベシ。例ヲ擧ゲテ之ヲ詳ニセン。政府ハ豫算中商法實施上ヨリ生ズル支出ヲ掲載シテ議會ノ協賛ヲ求メタリト假定セン。其ノ議決ハ未ダ裁可ヲ經ズト假定セン。而シテ議會ハ此ノ議決ニ依リ、商法ノ結果ニ由ル歳出ヲ削除セントシ、同意ヲ政府ニ求メタリト假定セン。議會ノ延期ニ會スル議決ノ裁可ヲ得ベキヤ否ヤハ政府ノ當然知ルコトヲ得ベキ所トス。而シ

テ政府ハ其ノ必ズ裁可セラルベキヲ知ル。唯ダ商法ヲ延期スルトキハ他ノ法律勅令ニ改正ヲ要スルモノアリ、其ノ調査未ダ完結セザルニヨリ裁可モ亦未ダ終ラザルヲ知ルト假定セン。此ノ場合ニ於テモ政府ハ尙同意ヲ表スルノ權力ナク、若シ誤テ之ヲ表セバ其ノ豫算ハ不成立ノ結果ヲ見ルトハ何人モ之ヲ信ゼザルベシ。義務ニ屬スル歳出モ亦概略之ニ同ジ。唯ダ政府ニ於テ裁可アルベキヤ否、未ダ確實ナラズト信ジ又ハ義務ニ屬スル歳出ヲ實際ニ於テ減少スルコト豫期シ難シトセバ同意ヲ表セザルノミ。

以上論ズル所ニ依ツテ之ヲ觀レバ、六十七條歳出ノ理由トナルベキ事柄ニシテ政府ノ職權外ニ在ルモノ一モ之レアルコトナシ。其ノ同意シ得ベキモノトナリ又ハ同意シ得ベカラザルモノトナルハ其ノ時ノ事情ニ在リ。之ヲ鑑別スルハ固ヨリ政府ノ職權トス。素ヨリ議會ノ任ニ非ザルナリ。

(15)、**反對諸論ノ辯駁** 或ハ曰、豫算ハ法律命令ヲ變更スルノ力ヲ有セズ。政府ト雖豫算ヲ以テ法律命令ヲ變更スルノ權力ヲ有セズ。故ニ政府ハ官制軍制ヲ理由トシタル豫算ニ同意ヲ表スルヲ得ズト。

然シナガラ豫算ハ法律命令ヲ變更スルノ力ヲ有セズ云々ノ原則ハ今ノ問題ニ少シモ關係ナキモノトス。何ントナレバ官制軍制ノ改正ヲ豫算修正ノ理由トシ、其ノ豫算ニシテ成立スルモ豫算ハ豫算ニシテ官制軍制ニ非ラズ。官制軍制ノ改正別ニ其ノ手續ヲ經ルマデハ仍舊ニ依テ存續スレバ

ナリ。

之ヲ要スルニ議會ハ六十七條ノ廢除削減ノ同意ヲ求ムルニ何等ノ理由ヲ以テスルモ妨ゲアルコトナク、政府モ亦始メヨリ一切同意不同意ヲ云フベカラザルモノアルコトナキハ前論ニ依テ既ニ明晰ナラン。

或ハ曰、同意ヲ求ムルノ理由ニ制限ナク、同意ヲ表スルノ標準モ亦法律上ニ之レナキトキハ、實際ニ於テ豫算ノ一段法規ト吻合セザルモノヲ生ゼズトセズ。而シテ法規ハ歲出ヲ待テ實施セラレ得ベキガ故ニ、豫算ハ其ノ性質行政事項タルニ拘ハラズ、一般法規ニ對シテ前定ノ效力ヲ得ルニ至ルノ恐ナキニ非ズヤ、是レ必ズ帝國憲法ノ精神ニアラザラント。

(16)、結論 答テ曰、是レ更ニ詳論センコトヲ本章ノ始メニ於テ約シタル所ナリ。即チ茲ニ之ヲ論述シテ本章ヲ終結セン。

豫算ヲシテ法規ニ對シ前定ノ效力ヲ有セザラシメントスルハ帝國憲法ノ精神ナルコト固ヨリ論者ノ言ノ如シ。而シテ此ノ精神ハ實ニ第六十七條ニ於テ表示セラレタリ。故ニ又此ノ精神ハ第六十七條ニ定メタル方法ニ因テ實行セラル、モノトス。第六十七條ハ如何ナル方法ニ依テ此ノ精神ヲ實行セントシタルカト云フニ、政府ノ同意ト云フヲ以テ之ニ當テタリ。即チ政府ノ同意ヲ得ルニ非ザレバ現行法規ニ吻合セザル豫算ヲシテ成立セシメズ、而シテ政府同意ヲ表スルトキハ現行法

規ニ吻合セザルノ豫算モ亦成立スルヲ得セシメ、一ニ政府ノ同意ト云フヲ以テ此ノ原則ヲ執行スルノ方法トセリ。是レ即チ本章ノ始ニ於テ此ノ原則ノ帝國憲法ニ於テ絶對的ニ行ハレズト明言シタル所以ナリ。

然ラバ即チ何故ニ帝國憲法ハ此ノ原則ノ執行ヲ政府ノ同意不同意ニ一任シ、絶對的ニ規定セザリシヤト云フニ、是レ蓋シ帝國憲法ノ規定ノ高妙幽微ナル所以ナリ。何トナレバ一方ニ於テ之ヲ絶對的ニ規定スルトキハ行政實際ノ活動ヲ阻礙スルノ虞アルコト、本章ニ掲ゲタル諸般ノ實例ニ依ルモ明カナリ。而シテ他ノ一方ニ於テハ政府ハ法規ヲ執行スルノ責ニ任ズルモノナルガ故ニ、實際法規ヲ執行スルノ責ヲ盡シ難キノ豫算ニ同意ヲ表スルゴトキノ擔保ハ既ニ備ハレバナリ。

故ニ帝國憲法ニ於テハ豫算ヲシテ法規ニ對シテ前定ノ效力ヲ有セシメザルノ主義ヲ執ルト雖、尙左ノ二ノ場合ニ於テハ之ヲシテ前定ノ效力ヲ有セシム。

一、法律ノ結果ニ依ル歲出ニシテ政府ノ同意ヲ表シタルモノ。但シ此ノ場合ニ於テ前定ノ效力ヲ有スルト云フハ豫算成立ノ際ノ形式ニ止マルモノニシテ、其ノ實ハ法律ノ實體先ヅ定テ而シテ後チ豫算定マルモノトス。

二、勅令ニシテ其ノ歲出未ダ既定ノ歲出トナラザルモノ。但シ此ノ場合ニ於テハ豫算ハ純然前定ノ效力ヲ有スルモノトス。

同意ヲ求ムルノ理由

尙此ノ點ニ就テハ第六十七條立法精神ヲ論ズルノ章ヲ參觀セバ思半ニ過ギン。

既定歳出之法理

文學士 都 筑 馨 六

既定ノ歳出ニ關シテ余輩ガ信ズル所ヲ述ブルニハ先ヅ豫算全體ト帝國憲法第六十七條ニ掲載セラレタル費目トノ間ニ存スル法律上ノ關係ヲ説明セザルコトヲ得ズ。

帝國憲法ハ其第六十四條ニ於テ規定シテ曰ク、國家ノ歳出歳入ハ毎年豫算ヲ以テ帝國議會ノ協賛ヲ經ベシト。夫レ協賛トハ何ゾヤ、余輩以爲ク政府豫算ヲ定ムルニ當リテ議會ノ之ニ參シテ與ニ俱ニ之ヲ決スルノ所爲ヲ指示スルナリト。

猶ホ詳ニ此斷案ヲ證明セムニ、先ヅ協賛トハ如何ナル所爲ヲ指示スル者ニ非ルカヲ示シテ而シテ後チニ其何物ヲ指示スルカヲ推究セン。余輩ハ曰ク、協賛ハ承諾ニ非ルナリト。是レ彼第六十七條中其前文ニ於テハ協賛ト云フ字ヲ使用シナガラ、其末文ニ於テハ承諾ト云フ語ヲ使用シタルヲ見テモ判然タルベシ。若シ協賛ニシテ承諾ト同義ナラシメバ、豈ニ憲法ノ如キ國家ノ大基本法ノ同條法文中ニ、二様ノ語ヲ使用シテ以テ讀者ノ惑ヲ惹クガ如キノ迂ヲ爲サムヤ。又第八條及ビ第七十條第

二項ニ於ケル承諾ト云フモノモ、第三十七條ニ規定シタル所ノ協賛トハ同一物ナラザルコト、余ガ論ヲ俟タザルベシ。然ラバ則チ承諾トハ何ゾヤ。曰ク是第五十三條ニ所謂許諾ト同一物ニシテ、承諾ノ權ヲ有スルモノハ當該事件ニ對シテ或ハ之ヲ許シ、或ハ之ヲ許ササルノ專決權ヲ有スルモノナリ。協賛ハ承諾ニ非ズ、故ニ協賛權ハ此ノ專決權ヲ指示スルモノニ非ルナリ。然ラバ則チ協賛ハ如何ナル權ヲ指示スルカ。曰ク他人ト共ニ一事件ノ決定ニ參與スルノ權ヲ指示スルモノナリ。試ミニ憲法第三十七條ヲ一讀セヨ。議會ハ立法ノ事ヲ協賛スルノ權ヲ有スルナリ。蓋シ憲法ガ其第三十七條ヲ以テ議會ニ附與シタル權利ハ法律ヲ專決スルノ權利ニハ非ザルベシ。法律案ハ議會ノ單意ニ依テ其案タルノ性質ヲ變ジテ確定法律トナルモノニハ非ルベシ。必ラズヤ議會ノ意思ト政府ノ意思ト相投合シテ初メテ確定法律トナルモノナルベシ。

余輩ハ既ニ協賛權ノ何物ナルカヲ論ジタリ。是ヨリハ將ニ進ンデ憲法第六十四條ノ協賛權ヲ論ゼントス。議會ガ憲法第六十四條ニ依リテ有スル豫算ニ對スルノ權利ハ、同法第三十七條ニ依リテ有スル法律ニ對スル權利ト同一ナルコトハ、右二個ノ條項ニ均シク協賛ト云フ語ヲ用ヒタルニ依リ判然タリ。果シテ然ラバ議會ハ豫算ニ關シテモ其決定ニ參與スルノ權ノミヲ有シ、決シテ豫算ヲ專決スルノ權ヲ有セザルナリ。果シテ其決定ニ參與スルノ權ノミヲ有スルモノトセバ、議會ノ外ニ尙ホ議會ト共ニ之ニ參與スル者ナカルベカラズ。如何トイフニ參與ノ議タルヤ必ズ他ト俱ニスベキモノ

ナレバナリ。而シテ其所謂他ノ者ハ即チ是レ政府ナルベシ。如何ト云フニ余輩ハ政府ノ他ニ其人アルヲ見ザレバナリ。是ニ由テ之ヲ觀レバ豫算ハ政府ト議會ノ合意ヲ待テ成立ツモノナルコトハ論ヲ待タザルベシ。

余輩ハ次ニ豫算ノ性質ニ依テ之ヲ論ズベシ。豫算ハ一ノ行政事件ナルコトニ關シテハ余輩ガ往日既ニ委シク論ジタル所ナルガ故ニ、茲ニ再陳スルノ必要ナシト信ズレ共、茲ニ一二ノ例ヲ擧ゲテ右ノ斷案ノ理由ヲ示サム。夫レ豫算トハ何ゾヤ、曰ク來年度ニ於ケル國家ノ收入及ビ支出ノ大畧ヲ見積ルコトノ謂ナルベシ。例ヘバ陸軍省ニ於テ來年度ハ軍馬何頭ヲ要シ、且ツ其ノ一頭ハ大凡若干圓位ナルベシトノ豫定ノ如シ。是レ之ヲ行政事件ト謂ハズシテ何トカ謂ハン。若シコレヲ目スルニ立法事務ヲ以テセバ、余輩ハ其レ何處ニ向ヒテカ其理由ヲ求メン。蓋シ豫算ハ特リ其性質行政事件ノミナラズ、亦タ其ノ編算ノ如キニ至テハ、余輩ハ行政官ヲ除キテハ到底之ヲ爲シ得ベキ者ナキヲ見ルナリ。中央行政官廳ニ非レバ來年度ニ於ケル一國ノ需要ノ大體ヲ見渡シ得ベキ者ナキヲ見ルナリ。中央官廳ノ指揮監督ヲ受ケテ活動スル所ノ地方機關等ノ存在スルガ故ニ、行政官ハ國ノ邊隅ナル村落ニマデ立チ入テ其稅源ヲ見積ル事ヲ得ベク、且ツ又國ノ邊隅ナル村落マデモ見渡シタル後、來年度ノ國家ノ生活ノ爲メニ必要ナル費用ノ總體ヲ見積ルコトヲ得ベキナリ。豫算ハ以上論ジタル所ノ如ク其本性ヨリモ又其編算ヨリモ斯クマデ行政官ト密着シタル關係ヲ有スル事件ナレバ、

豈コレヲ議會ノ專決權ニ一任スルノ理アラムヤ。是ニ由テ之ヲ觀テモ豫算ハ政府ト議會ノ合意ヲ待テ成立スルモノナラムトノ解釋最モ穩當ナルベキヲ信ズルナリ。

又帝國憲法ノ沿革ヨリ之ヲ論ジテモ、又右ノ解釋ハ最モ正當ナルモノト認メラルベシ。元來帝國憲法中ニハ普國ノ制度ニ則リタルノ條項多クシテ、中ニハ普國ノ憲法ノ正條ヲ直譯シタルニハ非ルカトノ疑ヲ起サシムル程相似タルモノアリ。余輩ガ見ル所ニ依レバ豫算ノ制度ノ如キモ亦其大體ニ於テハ、普國ニ於ケル成法ニ則リタルモノニシテ、唯ダ其性質ノ行政事件タルノ點ニ於テノミ、普國ニ於ケル近來ノ學說ヲ參酌シタル者ノ如シ。其議會ト政府トノ合意要否ノ點ニ就テハ、恐ラクハ普國及ビ其他ノ王國的ノ制度ニ則リタルモノナラム。然ラバ則チ此點ニ於ケル普國ノ制度ハ如何。西歷千八百六十二年ノ頃、鐵血宰相ト議會ト氷炭相容レズシテ、比翁ハ終ニ議會ノ同意ヲ經ザルノ豫算ヲ施行スルニ至リタリ。茲ニ於テカ翌年一月十四日下院議員ルウドルフ、ヴキルヒヨウハ普國ノ下院ニ提出スルニ一ノ上奏案ヲ以テセリ。其案中ニ曰ク、無豫算ノ政府ハ違憲ノ政府ナリ云々ト。比士麻克之ニ對ヘテ曰ク、憲法第九十九條ニ依レバ國家ノ歲入歲出ハ毎年コレヲ豫算ニ掲載スルヲ要スルナリ。然リ而シテ憲法中若シ此條項ニ次グニ「豫算ハ衆議院之ヲ專決ス」トノ條項ヲ以テシタリトセバ、諸君ノ云フ所亦理ノ當然ナルモノナラン。然ルニ憲法ハ特リ決シテ如此ノ規定ヲ設ケザルノミナラズ、豫算法ノ調製ニハ上下兩院ト政府トノ合意ヲ要スル事ヲ規定シタリ。此三者ノ間

ニ於テ合意ノ存在セザルトキハ三者中ノ一其意ヲ枉ゲテ他ニ服従スルニ非レバ其合意ヲ成立セシムルコト能ハザルベシ。然リ而シテ其ノ意ヲ枉ゲテ服従スベキモノハ三者中ノ孰レナルカトノ問題ニ關シテハ、憲法中一モ現定スルトコロナシ。故ニ三者ハ各々他ノ二者ニ服従スルノ義務ナシト云ハザルベカラズ。之ニ依テ是ヲ觀ルモ、憲法ノ精神ヲ貫カムト欲セバ、三者各相折合ヒテ以テ合意ヲ來タスコトヲ勉メザルベカラザルナリ。顧フニ諸君ハ王位ノ諸君ノ持說ニ服従セムコトヲ望ミタリ。而シテ余ハ諸君ガ我說ニ服従セラレムコトヲ望ム。諸君若シ我ニ讓ルニ非ズンバ今日ノ如ク互ニ反目嫉視スルノ地位ハ遂ニ脱スベカラザルモノトナルベシ。夫レ憲法中如此場合ニ關スル規定ナキハ憲法ノ缺典ナルコトハ疑フベカラザルノ事實ニシテ、是レ決シテ今ニ始マリタルノ說ニ非ルナリ。然シナガラ憲法ニ缺典アルノ事實ハ、我々ガ憲法ニ背戾スルノ事實トハ相違セリ。故ニ諸君若シ我々ガ意ヲ枉ゲテ諸君ニ服従セザルノ故ヲ以テ我々ヲ違憲ノ政府ナリト云ハ、我々モ亦同一ノ理由即チ諸君ガ枉ゲテ我々ニ服従セラレザルノ故ヲ以テ諸君ヲ違憲ノ議會ナリト云フコトヲ得ベシト信ズ。憲法ニ對シテ立ツル所ノ誓ヲ赤心ヨリ出ダス者ハ豈ニ獨リ諸君ニ限ラムヤ。我々モ亦タ憲法ヲ遵守スルニ汲々タルモノナリ（中略）普國ノ王位ハ未ダ其職務ヲ盡シ終リタルモノト謂フベカラザルナラザルナリ。其王位ハ未ダ諸君ガ望マル、如ク憲法組織ノ項ニ置クベキノ一裝飾トハ成リ去ルベカラザルナリ。未ダ議會政治ノ死物的機關トナルノ期ニハ達セザルナリト。如此正々堂々タル答

辯アリタルニ關ラズ、彼ノ上奏案ハ六十八人ノ反對ニ對スル二百五十五人ノ賛成ヲ以テ議會ヲ通過シタレ共、今日ニ於テ其當時ノ民心ノ激昂ヲ離レ、虚心平氣ニ右演說ノ趣旨ヲ考フレバ、實ニ學理ニ照シテ一點ノ打チ所ナキモノナルコトハ今日ノ學者ノ皆許ス所ナルベシ。普國ノ制度ニ於テスラ尙ホ豫算ハ議會ト政府トノ合意ヲ待テ初メテ成立スル者ナリトスルコト夫レ如此シ。我が帝國憲法ニシテ議會ニ附與スルニ普國ノ議會ガ豫算ニ關シテ有スル權ヨリハ一層廣且大ナルノ權利ヲ以テシタリトハ余輩ガ決シテ信ズルコト能ハザル所ナリ。故ニ曰ク、我が帝國憲法ノ沿革ヨリ之ヲ見ルモ、豫算ハ政府ト議會トノ合意ヲ待テ初メテ成立スルモノナリト。

加旃、憲法發布セラレテヨリ以還、月ヲ累ヌルコト多カラズト雖モ、既ニ已ニ第一期ノ立憲政治ノ習慣ノ在ルアリ、昨年ノ内閣ガ作りタル先例ノ在ルアリ、若シ今年ノ内閣ニシテ之ヲ改メムトセバ、必ズヤ之ヲ改メザルベカラザルノ理由ナクムバアルベカラザルナリ。何ヲカ先例ト謂フ、曰ク豫算ノ裁可是レナリ。抑モ豫算ノ裁可トハ何ゾヤ、曰ク政府ヨリ提出シテ兩院ノ協賛ヲ經タル豫算ヲ認可シ、即チ之ニ同意シテ以テ豫算ノ草案ヲシテ確立豫算タラシムル所ノ我。天皇陛下ノ所爲ナリ。此所爲ハ。天皇陛下ノ他ノ大權ノ施行ト同ジク大臣ガ。陛下ニ代テ其責ニ任ズベキ政務ノ一ナリ。故ニ。陛下ノ一案ヲ裁可セラル、ニ當テハ必ズヤ其當時ノ内閣ハ之ニ同意セザルベカラザルナリ。然リ而シテ。陛下ハ之ヲ裁可スルノ權ヲ有セラル、ガ故ニ、亦之ヲ裁可スルコト

ヲ拒ムノ權ヲモ竝セテ有セラル、コトハ論ヲ待タザルナリ。蓋シ裁可ハ主權ノ施行ニシテ、一モ之ヲ制限スルモノナケレバナリ。何故ニ豫算案ハ右ニ説明シタル所ノ裁可ヲ待テ、始メテ確實豫算トナルカ。若シ豫算ヲシテ議會ノ專決權ニ一任セラレタルモノナラシメバ、何故ニ豫算ハ貴衆兩院ノ間ニ於テ合意ノ成立シタルトキニ確定セザルカ。何故ニ政府ノ合意ヲ待テ初メテ成立シタルカ。豫算ノ我。天皇陛下ノ裁可ヲ待テ始メテ成立スルノ理、豈ニ豫算ハ政府ト議會トノ合意ヲ待テ始メテ成立スルモノナリトノ原則ノ外ニ之ヲ求ムベケンヤ。若シ豫算ニシテ右ノ合意ヲ要セズトセバ、何故ニ昨年ノ内閣ハ此不要ノ手續ヲ爲シタルカ、余輩ノ見ル所ニ依レバ昨年ノ内閣ハ裁可ヲ以テ豫算ノ確定ニ必要ナリト認メタルナリ。今年ノ内閣豈ニ之ヲ改ムルノ理アラムヤ。

以上陳述スル所ニ依レバ帝國憲法ノ文字ヨリ之ヲ論ズルモ、豫算ノ性質ヨリ之ヲ見ルモ、帝國憲法ノ沿革ヨリ之ヲ云フモ、又タ我が立憲政治ノ習慣ニ照シテ之ヲ考フルモ、豫算ハ政府ト議會トノ合意ヲ待テ始メテ成立スルモノナリトノ原則ハ疑フベカラザルモノナルガ如シ。故ニ政府ハ自己ノ單意ヲ以テ豫算ヲ規定スルヲ得ザルト同時ニ、議會モ亦其單意ヲ以テ之ヲ規定スルコト彼ノ議事規則ニ於ケルガ如クナルコト能ハズ。必ズヤ政府ト議會トノ合意アルヲ要スルコト、新ニ法律ヲ作り、新ニ國債ヲ起スノ場合ト何ゾ其レ異ナランヤ。而シテ設シ憲法中ニ第六十四條ノ外豫算ニ關スル條項ナシト假定セバ、豫算案ニ關スル政府ト議會トノ合意ハ、其豫算案ノ總テノ部分ニ於テ生存セザ

ルベカラズ。右ノ合意ハ隨テ歳出ノ部ニ於テモ、其最初ノ費目ヨリ最終ノ費目ニ至ルマデ徹頭徹尾生存セザルベカラザルナリ。故ニ彼自由討議ノ費目ナルモノハ議會ノ專決權ニ一任シタルモノニシテ、政府ノ同意不同意ニ關ラズシテ存立シ得ルモノナリトノ説ノ如キハ、余輩ガ斷ジテ同意スルコト能ハザル所ナリ。且ツ又豫算ニ關スル議會ノ決議ハ單一ニシテ分ツベカラザルモノナレバ、政府ハ其一部分ニ同意シ、他ノ一部分ヲ廢棄スルコト能ハズ。必ズヤ或ハ全案ニ同意シ或ハ全案ヲ廢棄スベシ。政府ハ此二者ノ中其一ニ居ラザルベカラザルナリ。是レ恰モ政府ガ議會ノ協賛ヲ經タル法律案ノ一部分ヲ廢棄シテ他ノ一部分ヲ裁可スルコト能ハザルガ如シ。

右ニ陳述スル所ハ寔ニ憲法第六十四條ヨリ流出スル所ノ法理上ノ結果ナリ。然ルニ我憲法ニ此六十四條ノ結果、即チ效力ヲ制限スルノ條項ニアルヲ見ル。曰ク第六十六條、曰ク第六十七條是ナリ。此二條ハ實ニ其案中ニ記載スル費目ヲ他ノ費目ト區別シテ、之ニ附スルニ一種特別ノ生存力ヲ以テシタルモノナリ。第六十六條ニ曰ク、皇室經費ハ現在ノ定額ニ依リテ毎年國庫ヨリ之ヲ支出シ、將來増額ヲ要スル場合ヲ除クノ外、帝國議會ノ協賛ヲ要セズト。又第六十七條ニ曰ク、憲法上ノ大權ニ基ケル既定ノ歳出及ビ法律ノ結果ニ由リ、又ハ法律上政府ノ義務ニ屬スル歳出ハ、政府ノ同意ナクシテ帝國議會之ヲ廢除シ又ハ削減スルコトヲ得ズト。此六十六條ノ規定ニ付テハ論ズベキコト無シト雖モ、第六十七條ニ至リテハ余輩大ニ持説ノ在ルアリ。請フラクハ左ニ之ヲ開陳セム。

抑モ憲法第六十七條ハ規定シテ曰ク、彼三種ノ費目ニ關シテハ假令議會ハ之ヲ廢除削減セムコトヲ欲スト雖モ、政府ノ其望ニ同意セザル間ハ其費目案ヲ廢除スルコトモ爲ス能ハズ、又之ヲ減少スルコトモ爲ス能ハズト。此規定ノ意思ヲ充分ニ講究セムガ爲メニ左ノ如キ場合ヲ假設シテ立論セム。即チ假リニ第六十七條ノ法文中ニ「政府ノ同意ナクシテ」ノ九字ナカリシモノト思へ、然ルトキハ第六十七條ハ「憲法上ノ大權ニ基ケル既定ノ歳出及法律ノ結果ニ由リ、又ハ法律上政府ノ義務ニ屬スル歳出ハ帝國議會之ヲ廢除シ又ハ削減スルコトヲ得ズ」ト讀ミ下スベキモノトナラム。此場合ニ於テハ議會ハ該費目案ヲ廢除スルコトモ、又削減スルコトモ之ヲ爲シ能ハザルガ故ニ、議會ガ爲シ得ルコトハ單一原案ニ同意スルノ一事アルノミ。否此場合ニ於テハ議會ハ單一原案ニ同意シ得ト謂フベキノミナラズ、必ズ之ニ同意スルノ義務ヲ有スト謂フベキ者ナルベシ。然リ而シテ若シ議會ニシテ此義務ヲ有スルニ係ラズ、該費目案ニ同意セザルトキハ如何スベキカ。該費目案ハ議會ノ同意ヲ得ザルモノナルガ故ニ、一ノ草案タルニ止リテ、未ダ成立セザルモノナリトシ、從テ政府ハ前年度ノ豫算ニ於テ同費目ヲ施行スルノ外途ナシトセムカ、如此ク解釋スルトキハ余輩ハ遂ニ第六十七條ヲ立ツルコトノ必要ヲ見ザルニ至ルナリ。如何トイフニ第六十七條以外ノ費用ニ於テモ亦政府ノ意ト議會ノ意ト相投合セザルトキハ、其豫算ハ成立スルコト能ハザルモノニシテ、此場合ニ於テモ亦政府ハ前年度ノ豫算ニ依ラザルヲ得ザルベケレバナリ。之ヲ換言スレバ右ニ陳述スルガ如キ結

果、則チ不成立ノ事實ハ第六十七條ナシト雖モ、第六十四條ヨリ自然ニ流出スルノ結果ナリ。故如何トイフニ、既ニ前ニモ陳述シタルガ如ク、豫算ハ政府ト議會トノ合意ヲ待テ始メテ成立スルモノナレバナリ。若シ六十七條ニ關シテ政府ト議會トノ間ニ於テ合意ノ成立セザルトキノ結果ニシテ、果シテ右ノ如クムバ、則チ何ヲ苦ムデカ帝國憲法ハ特ニ第六十七條ヲ置テ、第六十四條ト同一ノ規定ヲ設クルコトヲ要センヤ。我憲法ノ特ニ第六十七條ヲ立テタル所以ノモノハ蓋シ其故ナクンバアラス。我憲法ノ第六十七條ハ其第六十四條ノ規定ト異ナルモノヲ含マズムバアルベカラズ。故ニ此條項ヲ解釋スルニ當テヤ、之ヲシテ死物タラシメズシテ其活用ヲ慮ランコトヲ要ス。然ラバ如何ナル解釋ヲ爲サバ此條項ノ死物、即チ第六十四條ト同一物トナル事ヲ防止セラルベキカ。曰ク此條項ニ掲載シタル費目案ニ對シテ議會ガ之ニ同意スルノ義務ヲ有スルニ係ラズ、之ニ同意セザルトキハ該費目案ノ儘施行力ヲ有スルモノナリト解釋スルコト是ナリ。之ヲ換言スレバ右三種ノ費目ニ關シテ政府ト議會トノ間ニ於テ合意成立セザルトキハ政府ノ意ガ單獨ニ之ヲ決定スルノ要素トナルベキモノナリト解釋スルコト是ナリ。此解釋ノ如キハ法理上之ヲ避ルニ途ナキノ解釋ナルノミナラズ。之ヲ俗理ニ照シテモ亦タ穩當ナルモノト謂ハザルベカラズ。甲一物ヲ取り、乙ニ向テ之ヲ廢除スベカラズ。又之ヲ減少スベカラズト云ハ、則チ之ヲ其儘ニ存シ置ケト云フト如何ナル差カアラン。實ニ余輩ハ其間差異アルヲ見ザルナリ。故ニ余輩ハ曰ク、若シ第六十七條中ニ「政府ノ同意ナクシテ」

ノ九字ノ存スルコトナカリセバ、第六十七條ノ費目案ニ關スル政府ノ意思ハ單獨規定權ヲ有スルモノナラント。余輩ハ是ヨリ一步ヲ進メテ右ノ如キ假定ノ場合ノ區域ヲ脱シ、現行ノ正條ニ就テ解釋ヲ下サム。憲法第六十七條ノ費目ニ關シテ議會之ヲ廢除シ、若クハ之ヲ刪減セムト欲スルニ當リ、政府之ニ同意セバ議會ハ能ク之ヲ爲スモノナリ。若シ之ニ反シテ政府之ニ同意セザルトキハ、則チ是レ議會ガ之ヲ廢除スルコトモ爲ス能ハズ、又之ヲ刪減スルコトモ爲ス能ハザルノ場合ナリ。此第二ノ場合コソ則チ前ニ假定シタル場合（即チ第六十七條中ニ政府ノ同意ナクシテ九字ノナキ場合）ト同一ノ性質ヲ帶ブルモノニシテ其結果モ亦タ同一ナルベキモノナレ。余輩ハコレニ依リテ直ニ結論セムトス。曰ク憲法第六十七條ノ費目ハ其第六十四條ニ云フ所ノ合意ヲ待タズシテ成立シ得ルモノニシテ、第六十四條ニ云フ所ノ協賛ヲ經ルノ限ニアラズ。畢竟スルニ憲法第六十七條ハ其第六十四條ノ除外例ナリト。

論ジテ茲ニ到レバ左ノ如キ疑問ノ生ズルハ勢免ルベカラザル所ナリ。曰ク第六十七條ノ費目案ハ政府ト議會トノ合意ナクシテ成立シ得ルモノナリトセバ、該費目案ハ如何ナル時期ニ於テ豫算中ノ一費目ノ草案タルノ性質ヲ脱シテ、該費目ノ確定豫算トナルモノカトノ疑問是ナリ。余輩ハ之ヲ答テ曰ハム。該費目ハ決シテ政府ト議會トノ合意ノ成立セザルトキニ草案ヨリ變ジテ確定豫算トナルモノニ非ラズシテ、寧初ヨリ條件附ニ豫算トシテ確定シ居ルモノナリト。之ヲ詳言スレバ政府ノ提

出シタル第六十七條ノ費目案ハ之ヲ動カス所ノ一ノ條件ガ充サル、マデハ、豫算トシテ確定シ居ルモノナリト云ハザルベカラズ。一ノ條件トハ何ゾヤ。議會ガ之ヲ廢除刪減セムト欲シ、政府モ亦其意思ニ同意スルコト是ナリ。此條件ガ充サルマデハ當初ノ費目案ガ施行力ヲ有スルモノナルガ故ニ、之ヲ目シテ條件附ノ確實豫算ト認ムルモ敢テ不可ナカルベシ。然リ而シテ此條件ガ充タサレ、即チ政府ガ廢除刪減ニ同意シタルトキハ則チ同意ノ形ヲ以テ顯ル、所ノ政府ノ意思ガ當初ノ費目案ヲ動ス所ノ意思ナリト謂フベクシテ、決シテ議會ノ協賛ガ之ヲ動シタルモノナリト謂フベカラザルナリ。

然ラバ則チ議會ハ第六十七條ノ費目ニ關シテハ唯ダ政府ノ議案ニ同意ヲ表明スルノ權利ノミヲ有スルモノナルカ、曰ク決シテ然ラズ。第六十七條ノ費目ニ關スル議會ノ參與權ハ第六十四條若クハ第三十七條ニ規定スル所ノ協賛權ニハ非レ共、其費目ニ關シテ廢除刪減ノ望ヲ示シ、政府ニ向テ之ニ同意セムコトヲ要求シ、依テ政府ノ政略ニ對スル德義上ノ壓力ヲ施行スルノ權是ナリ。

第六十七條ノ三種ノ費目ハ第六十四條ニ規定シタル所ノ協賛ヲ經ルコトヲ要スルノ限ニ非ルコトハ前段論ズル所ニ依テ明瞭ナラムト信ズルナリ。果シテ明瞭ナリトセバ是ヨリ進デ後段ニ極論セムトスル所モ亦タ明瞭ナラザルコトヲ得ザルナリ。

曰ク政府ハ議會ノ協賛(合意)ナクシテ第六十七條ノ費目ヲ規定スルコトヲ得ベク、隨テ政府ノ

提出ニ係ル第六十七條ノ費目案ハ議會ガ之ヲ廢除刪減セントスルノ意思ニ政府ノ合意スルコトアルマデハ、政府ノミノ意思ニ因リテ確立スルモノナルガ故ニ、總豫算不成立ノ場合即チ政府ト議會トノ合意ヲ要スル費目ニ關シテ其合意ヲ得ルコト能ハザルノ場合ニ於テモ、尙ホ第六十七條ノ費目ハ政府ノ本年度ノ案ニ依テ依然確立シ居ルモノト見做サルベカラズ。故ニ第六十七條ノ費目ニ關シテハ第七十一條ノ場合、即チ豫算不成立ナルモノノ決シテ生ズルコトナシト謂ハザルベカラズ。即チ第六十七條ハ第六十四條ノ除外例タルノ理由ニ依リテ、同時ニ第七十一條ノ除外例ナリト云ハザルベカラズト。余輩ノ見ル所ニ依レバ第六十七條モ第七十一條モ其ニ比翁ノ演說ニ指示スル所ノ憲法ノ缺典ヲ補フガ爲メニ設ケタルモノナリ。即チ豫算ニ關シテ兩院ト政府トノ間ニ於テ合意ノ成立セザルトキハ、我憲法ハ其第六十七條ノ費目ニ關シテハ政府ノ原案ヲ施行セシメ、其他ノ費目ニ關シテハ前年度ノ豫算項目ノ施行ヲ命ジ、二者相補フテ以テ普國ニ於ケルガ如キ違憲ノ政治ヲ爲スノ必要ヲ避ケシメタリト云ハザルベカラザルナリ。

余輩ハ尙ホ一步ヲ進メテ云ハントス。政府ハ年々歳々單意ヲ以テ第六十七條ノ費額ヲ増減スルコトヲ得ベシト、如何トナレバ既ニ一たび本年度ノ案ニシテ本年度ノ合意(協賛)ナクシテ成立シ得ルモノタラシメバ、來年度ノ案モ亦來年度ノ合意ナクシテ成立シ得ルモノナルコトハ理ノ觀易キ所ナレバナリ。余輩ハ何故ニ合意ヲ要スルト否トノ點ニ付テ、第六十七條ニ關スル來年度ノ費目案ガ

本年度ノ同目ノ費額ト合一スル場合ト其否ラザル場合トヲ區別スルカヲ解スルニ苦シム。既ニ一タビ政府ノ單意ヲ以テ規定シ得ト云ハバ、其規定權ノ内ニ無論増減スルノ權ヲモ含ミタル筈ナリ。若シ然ラザルトキハ是レ單意ノ規定權ニ非ザルナリ。余輩尙ホ此點ニ就テ委シク陳述セム。第六十四條ニ依レバ豫算案ハ年々歳々新ナルモノナリ。然リ而シテ其案ニ對スル協賛モ亦年々歳々新ナルモノナリ。數年度ニ跨テ豫メ協賛ヲ經置クコトヲ得ルモノハ單ニ繼續費ノ一項アルノミニシテ、其他ノ費目案ハ總テ年々歳々新ニ議會ノ協賛ヲ經ザルベカラズ。故ニ若シ第六十七條ノ費目ニシテ議會ノ協賛ヲ經ベキモノタラシメバ、昨年此費目ニ關シテ得タルノ協賛ハ今年ノ豫算案ニ之ヲ適用スルコト能ハザルベシ。假令今年ノ該費目案ニシテ昨年ノ同費目ヨリ少額ナルニモセヨ、將又昨年ノモノト同一ナルニモセヨ、兎ニ角今年ノ案ハ今年ノ議會ノ協賛ヲ經ルマデハ今年度ノ原案ニ過ギザルベシ。若シ年度ノ費目案ニシテ昨年度ノ同費目ニ超過シタルトキハ、其超過シタル分ニ對シテノ新ニ議會ノ協賛ヲ經ベキモノナリトスノ說ヲ其極點マデ論ズルトキハ、第六十七條ノ費目モ又々年々歳々新ニ協賛ヲ經ルヲ要シ、議會ノ同意ヲ經ザル間ハ同條ノ費目豫算成立セズ、從テ政府ハ前年度ノ豫算ヲ施行セザルヲ得ザルニ至ルベシ。如此キハ第六十七條ヲ解釋スルニ法理ニ照シテモ俗理ニ照シテモ穩ナラザルノ解釋ヲ以テセザルベカラザルコトハ既ニ證明シタル所ニシテ、讀者モ之ニ同意シタルモノナラムト信ズルナリ。實ニ今年度ノ該費目案ニシテ昨年ノ該費目ヨリ僅少ナルカ、

又ハ之ト同一ナルトキハ原案ヲ執行シ、之ニ反シテ昨年ヨリ増加シタル場合ニ於テハ其増加セル部分ニ對シテノ議會ノ協賛ヲ經ルヲ要シ、又其部分ニ對シテノ議會ノ協賛ヲ經レバ足レリトナスノ說ノ如キハ、第六十七條ニ關スル余輩ノ解釋ニ抵觸スルノミナラズ、前後矛盾スルモノナリト謂ハザルベカラザルナリ。如何トイフニ、一費目案中昨年ノ豫算額ニ均シキ部分モ、又之ニ比シテ増加シタル分モ、同ジク本年度豫算ノ原案ニ過ギズシテ本年度ノ原案ニシテ原案ノ儘、即チ議會ノ同意ヲ待タズシテ執行シ得ベキモノナラシメズ、其原案ノ全部即チ新ニ増加シタル部ヲモ竝セテ執行シ得ベク、若シ之ニ反シテ之ヲシテ執行シ得ベカラザルモノタラシメバ、其全部即チ昨年度ニ等シキ部ヲモ併セテ執行シ得ベカラザレバナリ。右ニ陳述シタル理由ニ依リテ余輩ハ曰ク、既ニ昨年度ノ原案ニシテ昨年度ノ協賛ナクシテ成立シタルモノナリトスルトキハ、本年度ノ新案モ亦新協賛ヲ經ズシテ成立シ得ベキモノナリト。豫算案ハ年々變更スルモノナルコトハ自然ノ理ニシテ、是レ第六十四條ノ規定ヲ設ケタルノ所以ナルガ故ニ、余輩ハ爲以ラク、第六十七條ノ費目ハ政府ニ於テ年々歳々新ニ單意ヲ以テ其原案ヲ増減スルコトヲ得、其増減シタル毎年ノ案ハ其年ノ協賛ヲ經ズシテ條件附ニ成立シ居ルモノナリト。

第六十七條全體ニ就イテノ余輩ノ持說ハ概略右ニ陳スルガ如シ。

今總括シテ之ヲ言ヘバ則チ左ノ如シ。

- 一 豫算ハ第六十四條ニ依リ合意ヲ待テ始テ成立スルモノナリ。
- 二 第六十七條ハ第六十四條ノ除外例ナリ。
- 三 第六十七條ノ三種ノ費目ニ關スル議會ノ參與權ハ第六十四條ニ規定シタルモノニアラズシテ却テ第六十七條ニ其明文ナキナガラモ暗々裏ニ示ス所ノモノナリ。則チ政府ニ向テ其廢除刪減ニ對シテ合意ヲ求ムルノ權是ナリ。

四 其費目ハ三種共ニ第六十四條ノ合意ヲ待タズシテ成立シ得ルモノナリ。

五 故ニ政府ハ右三種ノ費目ヲ年々増減スルニハ單意ノ規定權ヲ以テ之ヲ爲シ得ルモノナリ。

論者或ハ云ハム。第五ノ斷案ノ如キハ彼三種ノ費目中法律ノ結果ニ係ル費用ト政府ノ義務費トニ關シテハ或ハ此說ニ同意スルモ敢テ不可ナカルベケレ共、獨リ既定ノ歲出ニ關シテハ、決シテ此ノ說ノ如クナルコト能ハズ。此種ノ費目ニ關シテ政府ガ單意ヲ以テ規定シ得ルモノハ單ニ其既定ノ分ニ止マリ、其未定ノ分ニ關シテハ尙ホ自由討議ノ費目ニ於ケルガ如ク政府ト議會トノ合意ヲ待ツニアラデハ確定豫算トシテ成立シ得ベキモノニ非ルナリト、茲ニ於テカ余輩ハ既定歲出ノ性質如何ヲ研究スルノ必要ヲ見ル。依テ之ヨリ進ムデ本論ノ燒點ニ取掛ラムトスルナリ。抑モ既定歲出トハ何ゾヤ。其解釋ノ如何ニ依リテハ憲法上ニ定マリタル 天皇ノ大權ノ廣狹ニ及ボスニ如何ナル影響ヲ以テスルカモ未ダ知ルベカラザルナリ。普通ノ解釋ニ由レバ、既定ト云フ文字ハ議會ニ於テ一

タビ協賛ヲ爲シタルニ依リテ既ニ定マリタルモノヲ指示スルガ如シ。此解釋ニ依リテ之ヲ觀レバ右ノ費目ハ此協賛ヲ經ルマデハ議會ニ於テ之ヲ廢除削減スルコト自由ナルベク、一タビ協賛ヲ爲シタル上ハ其次年度ヨリ政府ノ同意ナクシテ之ヲ廢除削減スルコト能ハザルモノノ如シ。此解釋ニシテ眞理ニ適セリトセバ、實ニ 天皇ノ大權ノ如キハ第一章ニ規定シタルモノノ中ノ一大部分ヲ失フニ至ラム。例ヘバ戰ハムト欲スレバ必ズ費用ヲ要スルハ論ヲ待タザルナリ。此時ニ當リテ果シテ議會ニシテ戰ニ必要ナル支出ヲ許否スルノ權アリトセバ、戰和ヲ決スルモノハ實ニ議會ニシテ 天皇ノ大權ハ單ニ議會ノ決議ヲ施行スルニ止マルニ至ルベシ。右ニ陳述シタル所ノ普通ノ解釋ハ余輩ガ斷ジテ同意スルコト能ハザル所ナリ。請フラクハ其所以ヲ左ニ陳辯セン。

第一 余輩ハ先ヅ讀者ニ請フニ憲法第六十七條ノ初項ヲ虚心平氣ニ讀下スルコトヲ以テセントス。曰ク 天皇ノ大權ニ基ケル既定ノ歲出ト云フ文章ノ意味ハ讀ミテ字ノ如シト云ハザルコトヲ得ズ。故ニ敢テ讀者ニ問フ、右ノ文字中執レノ處ニカ「議會ノ協賛ナル文字」ヲ見ルコトヲ得ルカト。然ルニ普通ノ解釋ハ曰ク、右ハ 天皇ノ大權ニ基ケル歲出ニシテ 既ニ協賛ヲ經テ定マレルモノヲ指示スルナリト。又問フ右ノ文字ハ明カニ之ヲ定ムルノ基因ハ 天皇ノ

大權ナル事ヲ示スニ非ズヤト。然ルニ普通ノ解釋ハ曰ク、議會ノ協賛ガ之ヲ定メタルナリト。抑モ普通ノ解釋ハ孰レノ文字ヨリ「議會ノ協賛」ナル五字ヲ引キ出スカ。蓋シ解釋者ハ強テ第六十七條ノ費目ハ議會ノ協賛ヲ待テ初メテ成立スルモノナリトノ說ヲ貫カムト欲スルガ故ニ、茲ニ於テモ亦タ空ニ憑リテ妄ニ解スルニ至ルナリ。之ヲ換言スレバ解釋者ハ持說ノ爲メニ牽強スルモノニ過ギザルナリ。反對論者或ハ云ハン。若シ字ノ如ク之ヲ解釋セバ、既定ノ二字ハ如何シテ之ヲ解釋スルコトヲ得ルカ、議會ノ協賛ヲ經ザルノ費目ニシテ如何シテ既定トナルコトヲ得ムカト。此問ヤ前ニ陳述シタル誤謬ノ結果ニ過ギザルナリ。即チ三種ノ費目ハ協賛ヲ待テ始メテ成立スルモノナリトノ前提ヨリ流出スルノ斷案ナリ。故ニ其前提ニシテ誤謬ナルトキハ其斷案モ亦誤謬ナリ。然リ而シテ其前提ノ誤謬ナルコトハ余輩ガ精細ニ論述シタル所ナリ。第六十七條ノ費目ハ第六十四條ノ協賛ヲ經ズシテ定マルコトヲ得ルモノナリ。故ニ既定ノ歲出ト云ヘルモ亦議會ノ協賛ヲ經ザル前即チ豫算提出ノ際ニ於テ 天皇ノ大權ニ基因シテ既定マレルモノヲ指示スルナリ。

第二 若シ反對論者ノ解釋ヲシテ眞理ニ適ヘルモノナラシメバ、憲法中ニ前後相矛盾スルノ條項アリト云ハザルコトヲ得ズ。如何トイフニ、憲法第十條ニ曰ク 天皇ハ行政各部ノ官制及文武官ノ俸給ヲ定ム云々ト。然ルニ若シ議會ニ於テ俸給ノ増額及ビ官制ノ一部タル定員ノ増加ヲ

拒ムノ權アリトセバ、 天皇ノ大權ハ俸給及ビ官制ヲ定ムルノ權ニアラズシテ、前年度ノ協賛ニ依リテ定メラレタルモノヲ謄寫スルノ權ニ過ギザルナリ。彼憲法第十二條ノ常備兵數ニ付テモ亦然リ。 天皇ハ該條及ビ第十條ニ依リテ自由ニ兵數ヲ増減スルノ權及ビ武官ノ俸給額ヲ規定スルノ權ヲ有セラルルニモ拘ラズ、反對論ニ依ルトキハ議會ハ豫算協賛權ヲ名トシテ其増員ヲ拒ムノ權ヲ有スベシ。然ルトキハ 天皇ノ大權ハ單ニ前年度ノ俸給額若クハ兵員ヲ謄寫スルニ止マリ、其俸給額若クハ兵員ヲ年々ノ必要ニ應ジテ規定スルノ權ヲ有スルモノハ天皇ニアラズシテ却テ議會ナリト云ハザルベカラズ。然ルニ第十條及第十二條ニハ定ノ字ヲ用ヒタリ。定ムトハ則チ單獨ニ決定スルノ謂ニアラズシテ何ゾヤ。反對論者ノ如ク第六十七條ヲ解釋スルトキハ憲法ノ前後相矛盾スト云ハズシテ將タ何トカ云ハン。

第三 試ニ一步ヲ讓リテ第六十四條及第六十七條ト第十條及第十二條トハ實際相矛盾シ居ルモノト假定スルモ、尙ホ斯ル場合ニ於テハ相抵觸スル二者ノ中其一ヲ消滅セシメテ、他ノ一方ヲ生存セシメザル可カラザルハ、法律ヲ解釋スルノ法ナリ。然リ而シテ反對論者ノ說ニ依レバ第六十七條中ニ既定ト云フ文字ノ存在スルニ依テ、議會ガ有セリト云フ處ノ協賛權ヲ消滅セシムルトキハ、是レ則チ議會ノ權ヲ殺グニ均シカルベシ。之ニ反シテ第十條第十二條ニ所謂定ムトハ單ニ謄寫スルノ權ヲ指示スル者ナリト云ハ、 天皇ノ大權ハ茲ニ其大部分ヲ失フニ至ル

ベシ。乞フラクハ讀者其一ヲ選ベ。

第四 若シ文武官ノ俸給及ビ常備兵額ノ如キモ亦タ議會ノ協賛ヲ以テ始テ成立スルモノタラシメバ、余輩ハ實ニ第十條及第十二條等ノ存在スル理由ヲ見ルニ苦シムナリ。如何トイフニ行政權ハ一タビ議會ノ協賛ヲ經レバ鐵道モ之ヲ布設シ得ベク、土地モ之ヲ開拓スルコトヲ得ベク、何事モ之ヲ爲シ得ベシ。何ノ必要アツテカ特ニ第十條及第十二條ノ如キ條項ヲ設ケテ以テ 天皇ノ大權ノ範圍ヲ精密ニ規定スベキ。

第五 若シ反對論者ノ解釋ノ如クンバ、何故ニ法律ノ結果若クハ政府民法上ノ義務ニ係ル費用ニ付テモ、亦タ既定ノ文字ヲ適用シテ以テ政府ガ單意ニ規定シ得ル部分ヲ既ニ一タビ議會ノ協賛ヲ經タル部分ニ制限セザリシカ。例ヘバ會計法補則第二條第二、三、四、五、六、七、項等ノ諸費目及ビ第三條ノ諸費目ノ如キモ、亦年々増額ノ必要ヲ見ルコトアルベシ。何スレゾ右二種ノ費目ニ關シテハ其年々ノ増額マデヲモ政府ノ專決權ニ一任シテ而シテ 天皇ノ大權ニ基ケルモノニ關シテハ政府ノ專決權ニ委任スルニ既ニ議會ノ協賛ヲ經タル分ノミヲ以テシタルカ、反對論者或ハ云ハム。法律ノ結果若クハ民法上ノ義務ニ屬スル費用モ亦タ大權ニ基ケルモノト同ジク、其新ニ増額シタル部分ニ對シテハ議會ガ所謂自由討議ノ權ヲ有スルナリト。果シテ然ラバ余輩ハ問ハム。何故ニ第六十七條ノ文章ハ既定ノ二字ヲ第一種即チ 天皇ノ大權ニ基ケ

ル費用ノミニ適用シタルカ。何故ニ之ヲ條文ニ記載シテ以テ三種ノ費用ニ通過セシメザルカ。

第六 反對論者說ヲ爲シテ曰ク、今年度豫算中官吏ノ俸給ヲ百萬圓ト確定シ、政府ニ於テ來年度豫算案中ニ之ヲ百五十萬圓ニ改メタリト假定セシニ、右百五十萬圓中百萬圓ハ既ニ一タビ本年度豫算ヲ以テ議會ノ協賛ヲ經テ確定シタル歲出ナルガ故ニ、來年度ニ於テハ既定ノ歲出トナルナリ。由テ來年度ノ議會ノ協賛權ハ來年度ノ豫算案ニ於テ増加シタル部分、即チ五十萬圓ニ對シテノミ生存スベキモノナリト。此論者ニ向テ余輩ノ第一ニ問ハザルベカラザルノ事實ハ、則チ今年度ノ豫算中掲載セル百萬圓ハ如何ナル原因ニ由テ既定ノ歲出トナリタルカ、政府單意ノ規定ニ依リテナリタルカ、將タ議會ノ協賛ニ依リタルカノ事是レナリ。若シ政府單意ノ規定ニ依テ既定ノ歲出トナリタルモノトセバ、何故ニ來年度ニ於テ政府ハ同費額ヲ百五十萬圓ト規定シ得ザルカ。若シ之ニ反シテ議會ノ協賛ヲ經タルガ故ニ既定ノ歲出トナリタリト云ハハ、來年度ニ於テモ亦同費額（即チ百萬圓）ニ對シテ議會ノ協賛ヲ經ルマデハ既定ノ歲出ト云フコト能ハザルベシ。如何トイフニ第六十四條ハ規程シテ曰ク、第六十八條ニ云フ所ノモノヲ除クノ外ノ費用ニ關スル協賛ハ、總テ毎年新ニ之ヲ爲スヲ要スト。若シ果シテ本年度ノ百萬圓ハ議會ノ協賛ヲ經テ既定ノ歲出トナリタリトセバ、來年度豫算案中ノ同費額モ亦來年度ノ協賛ヲ經ルマデハ政府ノ草案ニ過ギザルノミ。何ゾ百萬圓ト其ノ新ニ増加シタル額五十萬圓トノ間ニ區別

ヲナスノ理アラシキ。憶フニ此說ハ第六十七條ヲ以テ第六十四條ノ毎年ト云フ文字ノ取除ト爲シタルニモ拘ラズ、同條ノ協賛ト云フ文字ノ取除ニハ非ズト認メタルナリ。果シテ斯ノ如クンバ營ニ同條中ノ一部分ハ之ヲ第六十七條ニ適用シ他ノ一部分ハ之ヲ適用セザルノ不條理ヲ來タスノミナラス毎年協賛ナル分ツベカラザルノ一事件ヲ毎年ト協賛トノ二ツニ分割シタルモノナリト謂フベシ。余輩が見ル所ヲ以テスレバ此說タル一ノ論點ヲ其極端マデ論究スルノ勇氣ナキノ致ス所ナリ。政府既ニ本年度ニ於テ百萬圓ノ費額ヲ要セバ、來年度ニ於テモ亦同額ヲ超過セザラシムルハ政府ノ德義上應ニ勉ムベキ義務タルニハ相違ナシト雖モ、德義上ノ義務ヲ以テ直チニ其法律ニ依リテ規定セラレタルノ義務トナスベカラザルナリ。

右ノ如キ數項ノ不條理ヲ避ケムト欲セバ、必ズヤ既定ノ歲出ヲ解釋スルコト左ノ如クセザルベカラザルナリ。

- 一、既定ノ歲出モ亦タ他ノ二種ノ費目ト法律上同一ナル性質ヲ帶ブルモノニシテ、政府ガ此費目ニ於ケル權ハ他ノ二費目ニ於ケル權ト毫モ異ナルコトナシ。
- 二、然リ而シテ既定ノ歲出トハ議會ノ協賛ニ依リテ定マレル者ヲ示スニ非ズシテ、反ツテ天皇ガ其大權ニ基因シテ既定セラレタルモノヲ示スナリ。即チ毎年豫算提出前ニ憲法第一章ニ依リテ勅令ヲ以テ既定セラレタルモノヲ謂フナリ。

反對論者或ハ云ハン。若シ果シテ是說ノ如クンバ、政府ハ年々歲々第六十七條ニ云フ所ノ費目、即チ歲出ノ八分ノ七ヲ（第六十二條及第六十三條ニ抵觸セザル以上ハ）自由自在ニ變更増加スルコトヲ得ベシト。余輩ハ此論ニ對ヘテ云ハン、決シテ然ラズト。蓋シ此等ノ費用ニ關シテ政府ヲ制限スルモノ三アレバナリ。

一、既ニ議會ノ協賛ヲ經タル法律（恰モ歲入ノ部ニ於テ第六十三條及第六十二條第一項ノ制限アルガ如シ）

二、第七十六條末項ニ關スルモノヲ除キ第六十二條末項ニ依リテ經タル議會ノ協賛。

三、天皇ノ大權ニ基ケル勅令。

第一第二ノ制限ハ議會ガ一度承諾シ、若クハ參與シテ附シタルノ制限ナリ。故ニ政府ノ單意ヲ以テ規定シ得ルノ點ハ唯如何ナル費額ガ其ノ制限ノ結果ナルカラ認定スルニ在ルノミ。第三ノ制限ハ天皇ガ大權ノ範圍内ニ於テ規定セラル、モノナリ。故ニ若シ議會ニ於テ豫算協賛權ヲ名トシ、之ニ喙ヲ容レ豫算ヲ以テ大權ニ基ケル規定（勅令條約）ノ結果ヲ廢除シ、若クハ變更セントスルニ於テハ議會ハ大權ノ施行ヲ妨害スルモノト謂ハザルベカラズ。

故ニ憲法ハ既ニ議會ノ協賛ヲ經タル規定ノ結果ヲ認定スルニ過ギザルノ場合及ビ議會ニ於テ喙ヲ容ル、トキハ大權ヲ傷ツクルノ虞アルノ場合ニ於テ、政府ニ委任スルニ單意ヲ以テ其費額ヲ規定ス

ルノ權ヲ以テセリ。是ニ由テ之ヲ觀レバ政府ガ豫算中ニ單意ヲ以テ規定シ得ルノ事項ハ單ニ計算的ノ事務ニ過ギザルナリ。則チ如何ナル費額ガ法律及ビ勅令ノ規定ノ結果トナルカヲ認定スルニ外ナラズ、其權亦狹隘ナリト謂フベシ。況ンヤ此點ニ付テモ亦タ議會ハ尙ホ傍ヨリ政府ヲ監査スルノ權ヲ有シ、右計算ニ關シテ政府ト意見相合ハザルトキハ喋々其非ヲ鳴ラシテ輿論ニ訴ヘ或ハ上奏シ或ハ建議スルノ權ヲ有スルニ於テヲヤ。

如何ナル理由ニ依リテ憲法ハ立法ニ關スル議會ノ意思ヲ見ルコト第三十七條ノ如ク、其レ重クシテ、而シテ第六十七條ニ關スル其ノ意思ヲ見ルコト前陳ノ如ク夫レ輕キカト問ハ、余輩之ニ答ヘテ曰ハン。議會ニ於テ新法律案ニ同意セザルモ國家ハ依然舊法ニ依テ生存シ得ベシ。之ニ反シテ第六十七條ニ記載スルノ費目ヲ議會ノ承諾ニ一任セバ、其承諾ナキ場合ニ於テハ國家ノ存亡ニ關スルヤ量リ知ルベカラザレバナリト。

試ミニ外國ノ制度ヲ案シテ、以テ前陳ノ趣旨ノ參考トセムニ、彼立憲制度ノ本源トモ稱スベキ英國ニ於テハ、凡ソ法律ニ據リテ永遠王位(國家)ニ附屬シタルノ收入(總收入ノ約六分ノ五)ハ年々議會ノ承諾ヲ要スルノ限ニ非ズ。如何トナレバ右ノ如キ收入ハ議會ト王位トノ合意ニ依テ規定シタル法律ノ結果ニシテ、若シ議會ニ於テ年々之ヲ承諾スルノ權アリトセバ、議會ハ之ヲ拒ムノ權ヲモ有スベク、隨テ議會ハ單意ヲ以テ法律ヲ廢設スルノ權ヲ有スベケレバナリ。而シテ此ノ如キノ議

會ハ大權ヲ蹂躪スルモノナルベケレバナリ。

歲入ノ部ニ於テモ亦然リ。法律ニ據テ定メラタルノ費額ハ年々議會ノ承諾ヲ要スルノ限ニ非ズ。其理由ハ猶ホ收入ノ部ニ於テモ法律ニ依リテ定メラタルモノニ關シテハ、議會ガ協贊權ヲ有セザルガゴトシ。右ノ二原則ノ結果タルヤ、英國ニ於テハ議會ハ年々歲出歲入ノ一小部分ヲ政府ト與ニ俱ニ規定スルノ權ノミヲ有シ、其餘ハ總テ法律ニ據リテ固定シタルモノトシテ議會ハ豫算ノ議事ニ於テ之ニ啄ヲ容レザルノミナラズ、亦タ啄ヲ容ル、ノ權ヲ有セザルナリ。故ニ若シ英國ノ議會ニシテ政府ノ豫算案全體ヲ廢棄スルガ如キコトアラバ(實際ニ於テハ未ダ嘗テ遭遇セザリシ所ナリ)政府ハ仍法律ニ因テ固定セル歲入六千萬磅餘ト同ジク、法律ニ據リテ固定セル歲出三千萬磅餘トヲ以テ單意ヲ以テ國家ノ歲計ヲ營ムノ權ヲ有スルナリ。

歐洲大陸諸國ノ憲法ハ右ト大ニ異ナル所アリ。右諸國ノ憲法ハ大陸ノ學者ガ未ダ深ク英國ノ憲法ヲ講究セザリシ前ニ成リタルノミナラズ、之ヲ作りタルノ原因ハ佛國數度ノ革命ガ他國ニ及ボシタルノ影響ニ外ナラザルガ故ニ、佛國ノ革命的ノ思想ニシテ採用セラレタルモノ亦タ甚ダ多シ。例ヘバ國家ノ歲入歲出ハ總テ毎年豫算ヲ以テ議會ノ協贊ヲ要スルノミナラズ、豫算ヲ以テ一ノ法律ト看做シ、豫算ノ規定ハ他ノ法律ノ規定ト同ジク法律ヲ變更スルノ力ヲ有スルモノト爲シタルガ如キハ實ニ是レ千七百八十九年佛國大革命ノ結果ナリ。余輩ガ考フル所ニ依レバ、我が帝國憲法ハ其ノ第

六十四條ニ於テハ大陸ノ主義ヲ探リ、其第六十七條ノ費目ニ於テハ英國ノ制度ニ據リタルモノノ如シ。然リ而シテ第六十七條ハ英國ノ制度ヨリ尙ホ一步ヲ進メ、議會ハ豫算承諾權ヲ名トシテ、其單意ヲ以テ法律ヲ變更廢設スルノ權ナシトノ原則ヲ擴充シテ、以テ憲法ガ精密ニ其範圍ヲ定メタル天皇ノ大權ニ基ケル勅令ニ關シテモ亦議會ハ豫算ノ諾否ヲ名トシ之ヲ變更廢除スルヲ得ズト規定シタルガ如シ。

或ル人余ヲ詰テ曰ク、若シ果シテ是說ノ如クンバ、帝國ノ憲法ハ第六十七條ノ費目ヲ見ルコト第六十六條ノ費目ヨリ尙ホ一層重キヲ以テシタリ。然ルニ王國ニ於テ最モ重キヲ置クベキノ費用ハ王室ノ尊嚴ヲ維持スルガ爲メニ必要ナル費用ナリ。我ガ憲法ハ、王室費ニ於テスラ尙ホ其新ニ増加スル部分ハ議會ノ協贊ヲ經ベシト規定シタリ。王室ノ費用スラ尙ホ然リ、況ンヤ其他ノ費用ニ於テヤト。

余輩ハ之ニ答ヘテ曰ハシ、我ガ憲法ハ他ニ事故ノ生ゼザル以上ハ現今ノ王室ノ歲出三百萬圓ヲ以テ其尊嚴ヲ維持スルニ足レリト認メタルモノノ如シ。加之憲法ニシテ下ヨリ奉奏シタルモノタラシメバ難者ノ所說一理ナキニ非レ共、我ガ憲法ノ如キハ 陛下御欽定ノ上 之ヲ國家ニ付與セラレタルモノナリ。然リ而シテ 陛下ガ國家ノ生存ニ必要ナル費用ヲ以テ王家ノ爲メニ要セラル、費用ノ上ニ置カレタルハ、實ニ平素ノ 御仁德ノ然ラシムル所ニシテ、是レ則チ 陛下ノ英聖

ニ渡ラセラル、所以ニハ非ルカト。

明治二十五年一月十九日

憲法第六十七條ト豫算

大權ニ基ケル既定ノ歳出、法律ニ由レル歳出及政府ノ義務ニ屬スル歳出ハ、政府ノ同意ナケレバ帝國議會之ヲ廢除削減スルコトヲ得ザルハ憲法第六十七條ノ規定スル所ナリ。而シテ此ノ三種ノ歳出ハ獨リ其ノ大權ニ基ケル者ノ既定ナルヲ必要トスルノミナラズ、法律ニ由レル者政府ノ義務ニ屬スル者モ亦既定ノ法律既定ノ契約ニ由ラザルベカラズ。……而シテ政府新ニ大權ニ基ケル歳出ヲ設ケ、或ハ新ニ支出ヲ要スル法律ヲ制定シ、或ハ新ニ支出ヲ要スル契約ヲ締結セントスルガ如キハ、是レ皆未定ノ者ニシテ、其ノ種類ヲ甄別スレバ憲法第六十七條三種ノ歳入ニ入ルベキ者ト雖モ、一たび議會ノ議定ヲ經タル後ニ非ザレバ之ヲ既定ト爲スコトヲ得ズ。議會ガ始メテ之ヲ議定スル場合ニ於テハ自由ニ其ノ除減ヲ議決スルコトヲ得ベクシテ、政府ノ同意ヲ求ムルヲ要セザルナリ。然レドモ既ニ一たび之ヲ議定シタルトキハ、其翌年以後決シテ自由ニ廢除削減ヲ爲スコトヲ得ズ。必ズ政府ノ同意ヲ經ザルベカラザルナリ。

憲法第六十七條三種ノ歳出ハ其ノ性質右辯スルガ如クナルヲ以テ、其ノ始メテ之ヲ議會ニ提出スルニ如何ナル方法ヲ以テスベキヤヲ考フルニ、分テ二ト爲スベシ。

一、大權ニ基クベキ種類及政府ノ義務ニ屬スベキ種類ハ其ノ多寡ヲ豫算シテ議會ニ提出シ、其ノ金額ノ議定ヲ求メ、而シテ其ノ勅令ハ參照トシテ提示スベキモノトス。

二、法律ニ由レル種類ニ屬スベキ者ハ其ノ法律案及其ノ豫算案ヲ提出シ、先ヅ法律案ヲ議定セシメ、次ニ其ノ豫算ヲ議定セシムルノ順序ヲ取ラザルベカラズ。契約ニ由ル歳出モ亦此ノ手續ニ依ル。

勅令ハ 天皇ノ大權ヲ以テ實行ヲ命ゼラル、所ナリト雖モ、其ノ勅令中新ニ歳出ヲ要スル事項アルトキハ、其ノ歳出ニ就キ議會ノ協賛ヲ求ムルトキニ當リ、其ノ勅令ヲ議會ニ提示セザルヲ得ズ。是レ固ヨリ勅令ヲ以テ議會ノ議定ニ付スルニ非ズシテ、唯其ノ歳出ノ基ヅク所ヲ明ニスルガ爲メニ豫算ノ參照ト爲スニ過ギズ。然レドモ若シ議會ニ於テ其ノ支出ヲ否決シ、又ハ増減スルコトアルトキハ、隨テ其ノ年度ニ於テ其ノ勅令ノ實行ヲ停メ、又ハ其ノ事項ノ幾部ヲ實行スルコト能ハザルノ結果ヲ生ゼザルヲ得ザルベシ。

法律ハ必ズ議會ノ協賛ヲ經ザルベカラザル者タリ。故ニ政府新ニ法律ニ由レル歳出ヲ爲サントスルトキハ、先ヅ其ノ法律案ヲ議會ニ提出シテ議定ヲ求メザルベカラズ。其ノ法律案ニシテ既ニ議會ノ議定ヲ經レバ、之ニ對スル支出ハ議會亦隨テ議定ヲ爲サルベカラザルナリ。

新法律ニ由ルベキ新設ノ歳出ハ之ヲ追加豫算トシテ法律案ト共ニ提出スルヲ可トス。然レドモ場

合ニ依リテハ之ヲ總豫算中ニ組入ル、モ亦可ナリ。但之ヲ總豫算中ニ組入ル、トキハ特ニ其ノ新設ニ係ル費項ヲ明記シ、他ノ同種類ノ歳出ト混淆セシムベカラズ。蓋シ豫算案ハ法律案ト共ニ提出スルモ先ヅ法律案ヲ議定セシメ、次ニ豫算案ヲ議定セシムルノ順序ヲ取ラザルベカラズト雖モ、然レドモ其ノ費項ヲ總豫算中ニ組入レタルトキハ、法律案未ダ議定ヲ了セザルニ其ノ豫算ハ他ノ費項ト共ニ議定スルノ場合ナシトセズ。若シ此ノ如キ場合ニ於テ法律案終ニ議定セザルトキハ、豫算既ニ議定シタルモ行政官ハ之ヲ支出スルコトヲ得ズシテ、其ノ豫算ノ議定ハ自然ニ無効ニ歸スルナリ。契約ニ由リテ政府ノ義務ニ屬スル歳出モ、新設ニ係ル者ハ亦新法律ニ由ルベキ歳出ト其ノ手續ヲ同クセザルベカラズ。蓋シ憲法第六十二條二項ニ依リ國庫ノ負擔トナルベキ契約ヲ爲スハ、帝國議會ノ協賛ヲ經ベシトアルヲ以テ、其ノ契約書案ハ法律案ト同ク議會ノ議定ヲ求メザルベカラザレバナリ。

或ハ曰ク、第一期議會ニ於テ政府ガ議員ノ質問ニ對スル答辯ヲ見ルニ、豫算ハ法律ノ基礎ニ從ヒテ編制セラルベキモノナリトアリ。故ニ豫算ハ必法律ニ據ルニ非ザレバ之ヲ編制スルコトヲ得ザルナリ。然ルニ法律未ダ議定セザルニ當リテ、其ノ施行ニ要スル豫算ヲ編制スルハ答辯ノ主旨ニ悖リ批難ヲ免レズト。是レ大ナル謬ナリ。蓋シ憲法第六十七條ニ於テ特ニ政府ノ同意ナクシテ廢除削減ヲ爲スコトヲ得ザラシムルモノハ、國家ノ存立ニ必要ナル行政及法律ノ組織ヲ保續シ、以テ國家ノ

體裁ヲ毀損スルコトナカシメント欲スルニ出ルモノナルベシ。然ルニ今其ノ新設ニ係ル者ハ萬一之ヲ否決スルモ、從來存立スル所ノ行政法律ノ組織ヲ攪動スルモノニ非ズ。唯政府其ノ事ヲ行ハズシテ止ムニ過ギズ。其ノ事行ハレザレバ或ハ國家ノ爲メ不利益ノ結果ヲ生ズルコトナシト云フベカラザルモ、恐ラクハ國家ノ體制ヲ毀損スルニ至ルコトナカルベシ。是レ廢除削減ト新設トハ其性質全ク殊別ニシテ、一揆ニ論ズベカラザル所以ナリ。而シテ第一期議會ニ於ケル政府ノ答辯ハ、初メ議員ノ質問ニ豫算議定ノ際法律ノ結果ニ由レル歳出ヲ廢除削減スルモ、後ニ法律ノ改正案ヲ政府又ハ議院ヨリ提出シテ其ノ局ヲ了スレバ妨ナシトスルノ主意ニ對スルモノニシテ、憲法第六十七條法律ノ結果ニ由レル歳出ハ既定ノ法律ニ由レルモノナルガ故ニ、其ノ豫算ヲ編制スルハ必ズ其ノ法律ヲ基礎トシテ編制スベキモノニシテ、未ダ其ノ法律ヲ變更セズシテ先ヅ其ノ歳出ヲ廢除削減スベカラザルヲ言フニ過ギズ。然ルニ今論ズル所ノ場合ハ之ト同カラズシテ全ク新設ノ費項ニ係リ、議會ノ自由議決ヲ許スベキモノナリ。而シテ法律案ヲ提出スルニ當リ、共ニ豫算案ヲ提出スルニ非ザレバ以テ法律案ヲ議定スルノ資料ヲ缺キ、到底充分ノ審議ヲ盡スコト能ハザルベシ。然レドモ非難ヲ來スノ嫌ヲ避ケント欲セバ其ノ費項ヲ總豫算中ニ組入レズ、之ヲ分テ追加豫算トシテ提出スレバ少シモ其ノ嫌ナキナリ。

憲法第六十七條ト會計法補則

會計法補則ハ憲法第六十七條ニ關スル費額ニ就テ特ニ二十三年度ノ豫算ヨリ二十四年度ノ豫算ニ移ルベキ橋梁ニ過ギズ。故ニ二十五年年度豫算ニ在テハ復タ會計法補則ヲ適用スベカラズ。其憲法第六十七條ニ關スル費額ハ大概二十四年度豫算ノ確定スル所ニ依ラザルヲ得ズ。果シテ然レバ左ノ如キ疑問ヲ生ズベシ。

二十四年度豫算確定ノ後、本年官制改正ノ事アリタルヲ以テ、二十五年年度豫算ヲ以テ二十四年度ノ豫算ニ比スレバ特ニ俸給ノ一項中著シキ異動アルヲ免レザルニ由リ、二十四年度ニ於ケル既定歲出ハ其效力ヲ失フニ至ラザルカトノ疑問ヲ生ズ。然レドモ此異動ハ概ネ費額削減ノ一方ニ在リ。憲法第六十七條ハ政府ノ同意ナクシテ帝國議會ハ既定ノ費額ヲ廢除削減スルヲ得ズト云ヘルニヨリ、即チ其裏面ニ於テ政府ハ議會ノ協賛ヲ得ザレバ既定ノ費額ヲ創置増加スルヲ得ザルコトヲ意味スルモノニシテ、政府ハ政費節減其他必要ノ主義ニ基キ既定費額内ヨリ多少ノ削減ヲ爲ス如キハ當然ノ職分ニシテ、之ガ爲メ決シテ既定費額ノ效力ヲ失フニ至ルベキモノニアラズト立論シ得ベシ。然レドモ此等ノ議論ハ未ダ廟議確定ノ場合ニ至ラズ。今日ニ於テ之ヲ定メ置カザレバ他日或ハ閣員各

各其意見ヲ異ニスルノ恐アラシ。

又二十四年度豫算確定ノ前後ニ發布セラレタル法律中、其實施ノ期限ハ廿四年度以後ヨリ創始スルヲ以テ、廿四年度豫算中ニハ其費額ヲ要セザリシモ、廿五年度豫算ヨリ其費額ヲ必要トスルモノアリ。此種類ノ費目ハ廿五年度豫算ニ在テ法律ノ結果トシテ議會ハ政府ノ同意ナクシテ之ヲ廢除削減スルヲ得ザルモノトスベキカ如何。

又前項ニ云フ法律ノ結果ニ屬スル費目中、直接ニ其法律費目ニ關スル條項ヲ載セズト雖モ、之ヲ實施スル爲メ必要ナル勅令ヲ發布セラレ（譬ヘバ鑛業條例ニ基ヅキ鑛山監督署官制ノ發布アリタル類）其勅令ニ依リ必要トナスベキ費目ノ如キハ尙ホ法律ノ結果ニ屬スル費額ト看做シ得ベキモノアリ。何トナレバ此場合ニ於テハ法律ガ勅令ニ委託シテ某々ノ條項ヲ制定セシメタルモノト云フヲ得ベケレバナリ。此見解果シテ正當ナルカ如何。

二十五年年度豫算ニ於テ各省費目中右等ノ類例ニ當ルモノ頗ル多カルベシ。此等ノ場合ニ於テ各省ノ豫算明細書ニ多少ノ註解ヲ要スベキモノナラン。然レバ其見解彼此矛盾スルコトナキヲ要スル爲メ、特ニ期日ヲ定メ閣議ヲ開カレンコトヲ請フ。

憲法第六十七條同第六十八條第七十六條第二項費途ノ區分

例言

- 一、本書ハ憲法ノ明條ニヨリ各費途ヲ區分シテ之ヲ調製ス。
- 但明治二十三年法律第五十七號會計法補則ノ明文ハ△()ヲ付シテ之ヲ挿ム。
- 一、補助費及繼續費ハ其契約若クハ繼續期限ノ明治二十七年以降ニ互ルモノノミヲ掲グ。
- 一、金額ハ二十七年ノ概算ニ基クト雖モ概算書未出ニ係リ二十六年ノ豫算額ヲ假用セシモノノ類又ハ概算額ノ内分裂掲上ヲ要スベキモノ(假令バ既定歲出ニ屬スル費項ニシテ現員ニ屬スルモノト否ラザルモノノ類)ニシテ今之ガ區分ヲ知リ難キモノハ皆○印ヲ付ス。

憲法第六十七條ニ規定シタル大權ニ基ケル既定ノ歲出

△(第一條、明治二十三年度歲出豫算中左ノ費用ハ明治二十四年度ノ豫算ニ於テ憲法第六十七條ニ規定シタル大權ニ基ケル既定ノ歲出トス)

△(一、文武官ノ俸給及文官退官賜金)

勅任奏任官 俸給 ○八、五三、九四・五二 各廳官制及俸給ニ關スル各種ノ勅令ニ依リ要スルモノ。

△(二、陸海軍々事費憲兵費屯田兵費)

陸軍々事費 八、三〇、三〇・六二

俸給及諸給 ○四、四三、九七・三〇 (將校下士卒俸給) 明治二十三年三月勅令第六十七號陸

軍給與令第二章ニ依リ支給スルモノ但休職停職俸給ハ現員アルモノニ限ル。

(文官奏判任官俸給) 一般ノ官等俸給令ニ依リ支給スルモノ。

(諸手當) 明治二十三年三月勅令第六十七號陸軍給與令第三章第二十條ニ依リ支給スル「宅料」二十一年三月勅令第十四號陸軍乘馬飼養令第一條乃至第三條並ニ二十三年三月勅令第六十七號陸軍給與令第六章第四十三條ニ依

糧食費 ○一、八五、五四・六六

リ支給スル「馬飼料」但軍隊ニ屬スルモノニ限ル。
(糧米)(賄料) 明治二十三年三月勅令第六十七號陸軍給

被服費 ○一、四七、二六〇・五〇

與令第四章ニ依リ要スルモノ但軍隊ニ屬スルモノニ限ル。
(被服購買補修)(軍隊被服料)(下士以下被服料)(被服

修理料)(被服手入具永續料) 明治二十三年三月勅令第
六十七號陸軍給與令第五章ニ依リ要スルモノ但軍隊ニ屬
スルモノニ限ル。

馬匹費 ○四四、九四・二〇六

(將校馬匹費馬匹保續料ニ限ル)(飼養品)(馬療器械永續料)(裝

蹄剔毛料)(馬藥料) 明治二十三年三月勅令第六十七號

陸軍給與令第六章ニ依リ支給スルモノ但軍隊ニ屬スルモ
ノニ限ル。

雜給 ○五〇、〇〇〇

(給與) 明治二十三年三月勅令第六十七號陸軍給與令第

十一章第八十九條ニ依リ支給スル沖繩分遣隊手當。

憲兵費 三三、一八・四五

俸給及諸給 ○一九、五六・四〇 (上長官以下俸給) 明治二十三年三月勅令第六十七號陸

軍給與令第二章ニ依リ支給スルモノ。

(文官判任俸給) 一般ノ俸給令ニ依リ支給スルモノ。

(諸手當) 明治二十三年三月勅令第六十七號陸軍給與令

第三章第二十條ニ依リ支給スル「宅料」二十一年三月勅

令第十四號陸軍乘馬飼養令第一條乃至第三條並ニ二十三

年三月勅令第六十七號陸軍給與令第六章第四十三條ニ依

リ支給スル「馬飼料」但軍隊ニ屬スルモノニ限ル。

(被服購買補修)(下士以下被服料) 明治二十三年三月勅

令第六十七號陸軍給與令第五章ニ依リ要スルモノ但軍隊

ニ屬スルモノニ限ル。

(將校馬匹費馬匹保續料ニ限ル)(飼養品)(裝蹄剔毛料)(馬藥料)

同令第六章ニ依リ要スルモノ但同上。

馬匹費 ○八、一八・三五四

屯田兵費 二九、六八・八四九

俸給及諸給 ○一〇五、三二・七六二

(將校下士卒俸給) 明治二十三年九月勅令第二百一號屯

田兵給與令第二章ニ依リ支給スルモノ但休職停職俸給ハ

現員アルモノニ限ル。
(文官奏判任俸給) 一般ノ官等俸給令ニ依リ支給スルモノ。

(諸手當) 明治二十三年九月勅令第二百一號屯田兵給與令第三章第十六條ニ依リ支給スル「宅料」二十一年三月勅令第十四號陸軍乘馬飼養令第一條乃至第三條並ニ二十三年九月勅令第二百一號屯田兵給與令第六章第三十一條ニ依リ支給スル「馬飼料」閣令第九章第三十九條ニ依リ支給スル「下士卒勤務手當」但軍隊ニ屬スルモノニ限ル。
(扶助米)(鹽菜料) 明治二十三年五月勅令第七十六號屯田兵移住任給與規則第三條及第八條ニ依リ支給スルモノ但既ニ移住セシモノニ屬スル分ニ限ル。
(被服購買補修)(下士以下被服料)(軍隊被服料)(被服修理料)(被服手入具永續料)(被服永續料) 明治二十三年九月勅令第二百一號屯田兵給與令第五章ニ依リ要スル

糧食費 ○ 一五、三三・七三

被服費 ○ 二六、〇七・九四

馬匹費 ○ 五、〇四・四〇

海軍々事費 二、七九・九五・六三

俸給及諸給 ○ 二、〇二・〇三・六〇

糧食費 ○ 五五、三三・二天

被服費 ○ 三三、五七・八七

計 二〇、〇七・八五

△(三、賞勳年金及褒賞金)

△(四、外國條約及約束ニ依レル支出)

△(五、各廳ノ廳費及經常修繕費)

モノ但軍隊ニ屬スル分ニ限ル。

(將校馬匹費馬匹保護料ニ限ル)(飼養料)(馬療器械永續料)(裝

蹄料)(馬藥料) 同令第六章ニ依リ要スルモノ但同上。

(文武勅奏判任官及兵卒俸給) 一般ノ官等俸給令並ニ武

官ハ明治二十四年七月勅令第三百三十一號海軍々人俸給令

ニ依リ支給スルモノ但休職停職現員アルモノニ限ル。

明治二十三年二月勅令第十四號糧食條例ニ依リ要スルモノ但乘艦在營ノ將校以下ニ支給スルモノニ限ル。

明治二十三年三月勅令第六十五號海軍被服條例ニ依リ要スルモノ但乘艦在營ノ下士卒ニ支給スルモノニ限ル。

憲法第六十七條ニ規定シタル法律ノ結果ニ由ルノ歳出

△(第二條、帝國議會開會前ニ發布セラレタル法令ニ基ク左ノ費用ハ法律ノ結果ニヨルノ歳出トス。)

△(一、帝國議會經費)

帝國議會議長副議長議員歳費

四三、六〇〇・〇〇 明治二十三年二月法律第二號議院法ニ據リ要スルモノ。

△(二、裁判所並會計検査院經費)

△(三、恩給扶助料罷役恤金及死傷手當)

文 官 恩 給 ○ 四四、三六・七七 明治十七年一月太政官達第一號官吏恩給令及明治二十三年六月法律第四十三號官吏恩給法同年同月法律第四十四號官吏遺族扶助法同年十月法律第九十一號學校職員恩給法ニ據リ要スルモノ但權利確定シタルモノニ限ル。

陸 軍 恩 給 ○ 六五、六七・五九 明治九年太政官達陸軍武官恩給令明治十六年九月太政官達第三十七號陸軍恩給令及明治二十三年六月法律第四十

五號軍人恩給法ニ據リ要スルモノ明治二十四年十二月法律第四號明治七年以後ノ戰役ニ死歿シタル軍人軍屬ノ遺父母及祖父母扶助ニ關スル法律ニ據リ要スルモノ但權利確定シタルモノニ限ル。

海 軍 恩 給 ○ 一四、二〇・二四 明治八年太政官達海軍退隱令明治十六年九月太政官達第三十八號海軍恩給令及明治二十三年法律第四十五號軍人恩給法明治二十四年十二月法律第四號明治七年以後ノ戰役ニ死歿シタル軍人軍屬ノ遺父母及祖父母扶助ニ關スル法律ニ據リ要スルモノ但權利確定シタルモノニ限ル。

罷 役 恤 金 七〇・〇〇 明治九年十月太政官達第九十九號陸軍恩給令第一條第六項ニ據リ給スルモノ但權利確定シタルモノニ限ル。

市町村立學校職員恩給補助 一六、八四・九六 明治二十三年十月法律第九十號ニ依リ給スルモノ。
巡查看守給助費 ○ 二、五七・五九 明治九年十月太政官達第九十九號陸軍恩給令第一條第六項ニ據リ給スルモノ但權利確定シタルモノニ限ル。

△(四、徴兵費)

△(五、徵稅費) (證券印紙切手類製造買戻押印費鑑札製造費、所得稅調查委員手當
市町村ニ交付スル徵稅費滯納處分費差押物件買上代)

市町村交付金 一五〇、六四、〇〇〇 (大藏省) 明治二十二年法律第九號國稅徵收法ニ據リ要
スルモノ。

△(六、囚徒費)

△(七、遞信事業及航路標識費)

△(八、内外國難破船費)

△(九、沖繩縣及小笠原島地方費)

△(十、備荒儲蓄)

△(十一、北海道拂下土地買上代)

△(十二、恩賞及扶助費)

(十三、)

警察費連帶支辨金 九二、八三、〇〇〇 (府縣) 明治十四年二月第十六號布告ニ基キ明治二十一

年八月勅令第六十一號ニ依リ東京府ハ十分ノ四他府縣ハ
六分ノ一支出ヲ要スルモノ。

(十四、)

養育費 〇 二、四九、〇〇〇 (北海道廳、府、縣) 明治六年布告第三百三十八號ニ據リ
給スル棄兒養育料但權利確定シタルモノニ限ル。

計 二、七五、一九三、二〇四

憲法第六十七條ニ規定シタル法律上政府ノ義務
ニ屬スル歲出及第七十六條第二項ニ規定シタル
政府歲出上ノ義務ニ屬スル費用

△(第三條、明治二十四年度歲出豫算ニ於テ左ノ費用ハ憲法第七十六條第二項ニ規定シタル政府
歲出上ノ義務トス)

△(一、神社費)

△(二、公債償還利子及拂手數料)

(大藏省) 但償還期ノ來リタルモノニ限ル。

公債償還 〇一九、〇〇〇、〇〇〇、〇〇〇 (同上)

公債利子 〇一九、〇〇〇、〇〇〇、〇〇〇 (同上)

(同上) 但義務ノ確定シタルモノニ限ル。

公債元利拂手數料 (同上)

△(三、既ニ定マレル効力アル命令ニ依リ毎年各地方ニ付與スベキ公共工事費補助及警察費聯帶支辨金)

熊本縣熊本福岡縣間道路修築費補助 六、〇六、八三七 (同上) 總額三萬三百四十四圓十八錢二厘ヲ明治二十四

年度ヨリ二十八年度マデニ下付ヲ要スルモノ。

東京市水道費補助 一五〇,〇〇〇,〇〇〇 (同上) 明治二十四年度ヨリ同三十八年度迄十五ケ年間

大阪市水道費補助 五〇,〇〇〇,〇〇〇 (同上) 明治二十三年九月內務省指令ニヨリ同二十四年

度ヨリ十五ケ年間毎年度五萬圓宛補助ヲ要ス。

大分縣道路修築費補助 三二,二五,〇〇〇 (內務省) 明治二十六年度ニ於テ三萬千四百八十六圓二

十一錢七厘明治二十七年於テ三萬千二百六十五圓支出ヲ要スルモノ第四議會議決ノ分。

△(四、沖繩縣諸錄)

沖繩縣金祿 一四六、一五七、七四七 (大藏省) 明治十七年一月內務省大藏兩省伺ニ基キ支出

ヲ要スルモノ。

△(五、既ニ定マレル効力アル命令ニ依リ航運鐵道製造殖産ノ會社及病院學校ニ付

與スベキ補助又ハ利子保證)

沖繩縣先島航海費沖繩開運會社補助 五、〇〇〇,〇〇〇 (內務省) 明治二十二年八月內務遞信兩大臣ノ指令ニヨ

リ二十三年度ヨリ二十七年度マデ毎年五千圓宛支出ヲ要スルモノ。

沖繩縣各離島航海費補助 七〇〇,〇〇〇 (同上) 明治二十四年度ヨリ二十八年度マデ毎年七百圓

ヅツ支出ヲ要スルモノ(但風帆船輿論島丸林丸船主鹿兒島縣平民林尙五郎へ支拂フモノ)。

日本鐵道會社利益補助 六六九、四七、九四 (大藏省) 明治十四年十一月工部省ノ命令ニ依リ株金拂

込ノ翌月ヨリ一ケ年八分ノ利子ヲ每工區落成迄給シ開業後年八分ノ利益ニ上ラザルトキハ東京仙臺間へ十ケ年仙臺ヨリ青森迄ハ十五ケ年間其不足ヲ補給スルガ爲メ要スルモノ。

九州鐵道會社補助 (同上) 明治二十二年四月內閣總理大臣及大藏大臣ノ命

令ニヨリ工區哩數通計二百七十一哩四分ノ一ニ對シ一哩ニ付金二千圓宛給スル爲メ支出ヲ要スルモノ。

北海道製麻會社補助 ○ 四〇,〇〇〇,〇〇〇 (内務省) 明治二十年七月北海道廳長官上申ニヨリ六ケ年間株金募集ノ翌月ヨリ開業迄五朱ニ相當スル利子及開業後五朱ノ利益ニ上ラザルトキハ其不足ヲ補給スル爲メ支出ヲ要スルモノ。

北海道紋籠製糖會社補助 ○ 二,七五〇,〇〇〇 (同上) 明治二十年三月大藏省請議ニヨリ利益五朱ニ上ラザルトキハ十ケ年間利益補助トシテ支出ヲ要スルモノ。
 北海道炭鑛鐵道會社補助 ○ 一八,三三三,三三三 (同上) 明治二十二年十一月北海道廳長官内閣へ上申創業中株金拂込ノ翌月ヨリ五朱ノ利子及開業後八ケ年間五朱ニ達セザルトキハ資本額ノ五朱迄ヲ極度トシ利益補助トシテ支出ヲ要スルモノ。

山陽鐵道會社補助 一〇一,〇〇〇,〇〇〇 (大藏省) 明治二十三年三月閣裁ニヨリ凡二百七十二哩ニ對シ每工區落成ノ上一哩ニ付二千圓工事費補助トシテ支出ヲ要スルモノ。

日本郵船會社補助 八〇,〇〇〇,〇〇〇 (遞信省) 明治二十年十一月遞信大臣ノ請議ニヨリ十五ケ年間毎年金八十八萬圓宛支出ヲ要スルモノ。

大阪商船會社航海補助 五〇,〇〇〇,〇〇〇 (同上) 明治二十年五月農商務遞信兩大臣ノ請議ニヨリ二十一年度ヨリ八ケ年間毎年五萬圓宛支出ヲ要スルモノ。
 神戸那霸間航海費 一三,〇〇〇,〇〇〇 (同上) 明治二十二年十月内務遞信兩大臣ノ請議ニヨリ二十三年一月ヨリ二十八年十二月迄六ケ年金一萬三千圓宛支給ヲ要スルモノ。

傳染病研究所費補助 一五,〇〇〇,〇〇〇 (内務省) 明治二十六年度ヨリ向三ケ年間毎年一萬五千圓支出ヲ要スルモノ第四回議會議決ノ分。

僱外國人俸給恩給及手當 ○ 八〇,八〇〇,八三三 (各廳) 僱入ノ際締結セル約定書ニヨリ給スル俸給及手當旅費。

△(七、法律上ノ賠償及訴訟費)
 △(八、諸拂戻金)
 △(九、國庫金取扱費)
 日本銀行交付金 四五〇,〇〇〇,〇〇〇 (大藏省) 明治二十三年五月閣議裁日本銀行へ命令書ニヨリ支出スルモノ。

△(十、預金利子)

預金利子

一、〇一九、〇五三・〇〇〇

(大藏省) 明治二十三年三月法律第二十一號ニヨリ支出スルモノ但權利確定シタルモノニ限ル。

△(十一、既約アル地所家屋借料)

地所家屋借料

三三、三五・〇五三

(各廳) 但既約アルモノニ限ル。

(十二、)

鎖店銀行紙幣交換費

○ (大藏省) 明治九年第六號國立銀行條例ニ據リ要スルモノ。

(十三、)

賞勳年金

一三六、四五・〇〇〇

(大藏省) 明治十年七月賞勳局ニ於テ奏議ノ上決定セラレタル勳等年金額ニ依リ給スルモノ但權利確定ノモノニ限ル(外國人年金共)。

(十四、)

萬國關稅表刊行同盟費

四四・〇〇〇

(大藏省) 明治二十三年七月ベルギー國萬國關稅表刊行局へ加入セシニ依リ要スルモノ。

(十五、)

萬國度量衡會費

一、四九〇・五六〇

(農商務省) 明治十八年七月農商務省ノ請議ニ依リ佛國ニ設置セル萬國度量衡會ニ加盟セシニ依リ要スルモノ。

(十六、)

萬國郵便電信聯約費

一、五〇〇・九五〇

(遞信省) 明治十二年三月布告第十一號萬國郵便聯約條約第十六條及明治十九年六月遞信省告示第五十七號萬國電信條約書附屬細目規則第八十一條ニ依リ要スルモノ。

計

二三、〇七四、九三三・二八二

憲法第六十八條ニヨレル繼續費

△(第四條、明治二十三年度以前ノ歲出豫算ニ於テ數年ヲ期シタル事業ニシテ明治二十四年度ニ

至ルマデ未ダ竣工ニ至ラザルモノハ繼續費ノ例ニ依ル)

利根川修築費

八六、四九・八三七

(内務省) 明治二十年度以降三十八年度迄ニ要スル工費

計畫額ハ四百七萬七千二百十五圓六十五錢七厘ニシテ二十年度ヨリ二十二年度迄ニ於テ既ニ二十七萬三千七十八

北上川修築費

四〇,〇〇〇,〇〇〇

圓七十四錢二厘ヲ支出シ二十三年度以降ニ於テ要スル費額ハ三百八十萬四千百三十六圓九十一錢五厘ナリトス。
(同上) 明治二十年度以降三十三年度迄ニ要スル工費計畫額ハ八十二萬七千八百八十一圓四十二錢四厘ニシテ二十年度ヨリ二十二年迄ニ於テ既ニ二十一萬三千二百五十二圓五十八錢六厘ヲ支出シ二十三年度以降要スル費額ハ六十一萬四千三百二十八圓八十三錢八厘ナリトス。

最上川修築費

一〇,〇〇〇,〇〇〇

(同上) 明治二十年度以降三十五年度迄ニ要スル工費計畫額ハ六十八萬八千三百三圓四錢三厘ニシテ二十年度ヨリ二十二年迄ニ於テ既ニ十四萬七千八百三十九圓二十四錢九厘ヲ支出シ二十三年度以降要スル費額ハ五十四萬六十三圓七十九錢四厘ナリトス。

信濃川修築費

一七三,〇〇〇,〇〇〇

(同上) 明治二十年度以降三十七年度迄ニ要スル工費計畫額ハ百六十五萬六千三十七圓二十六錢八厘ニシテ二十年度ヨリ二十二年迄ニ於テ既ニ三十八萬四千七百五十

木曾川修築費

二七三,三四・八〇二

六圓七錢一厘ヲ支出シ二十三年度以降ニ要スル費額ハ百二十七萬千二百八十一圓十九錢七厘ナリトス。
(同上) 明治二十年度以降三十三年度迄ニ要スル工費計畫額ハ三百十二萬八千八百八圓五十五錢一厘ニシテ二十年度ヨリ二十二年迄ニ於テ既ニ六十二萬五千三百二十五圓九十八錢七厘ヲ支出シ二十三年度以降要スル費額ハ二百五十萬二千七百九十二圓五十六錢四厘ナリ。

筑後川修築費

八九,五七〇・一七三

(同上) 明治二十年度以降二十七年迄ニ要スル工費計畫額ハ六十四萬八百五十圓九十三錢五厘ニシテ二十年度ヨリ二十二年迄ニ既ニ十九萬三千五百三十圓七十六錢二厘ヲ支出シ二十三年度以降要スル費額ハ四十四萬七千三百二十圓十七錢三厘ナリトス。

東京灣砲臺建築費

三三三,〇〇〇,〇〇〇

(陸軍省) 本費ノ總額ハ概計八百二十六萬五千圓ニシテ四十四萬八千三百圓ハ二十三年度迄ニ支出シ殘額七百八十一萬六千七百圓ハ明治二十四年度ヨリ同四十四年度迄

下ノ關砲臺建築費

100,000.000

ニ支出ヲ要ス。
(同上) 本費ノ總額ハ概計百六十萬三千百六十圓ニシテ五十二萬七千圓ハ二十三年度迄ニ支出シ殘額百七萬六千六百六十圓ハ明治二十四年度ヨリ同三十四年度迄ニ支出ヲ要ス。

紀淡海峽砲臺建築費

100,000.000

(同上) 本費ノ總額ハ百五十一萬三百圓ニシテ内二十三萬千圓ハ二十三年度迄ニ支出シ殘額百二十七萬九千三百圓ハ二十四年度ヨリ三十六年度迄ニ支出ヲ要ス。

兵器彈藥費

590,451.954

(同上) 本費ノ總額ハ八百四十九萬五千一圓十八錢六厘ニシテ二十二年度ヨリ二十三年度迄ニ四十六萬二千九百二十二圓六十一錢五厘ヲ支出シ殘額八百三萬二千七十八圓五十七錢一厘ハ三十八年度迄ニ支出ヲ要ス。

軍艦製造費

999,474.000

(海軍省) 二十四年度以降起業ノ分總額五百二十一萬八千二百十六圓ニシテ同年度ニ於テ二十五萬七千二百二十一圓二十五年年度ニ於テ百九十七萬八千三百一十一圓二十六

年度ニ於テ百八十一萬九千二圓二十七年年度ニ於テ九十九萬九千四百七十四圓二十八年度ニ於テ十六萬四千三百八圓ノ支出ヲ要ス。

吳鎮守府建築費

200,000.000

(同上) 本費ノ總額ハ二百十六萬四千五十五圓十三錢六厘ニシテ明治二十二年年度ニ於テ三十萬五千圓ヲ支出シ二十三年度ニ於テ四十萬百八十三圓六十四錢三厘二十四年度ニ於テ四十一萬七千九百九十九圓六十錢二十五年ヨリ二十八年年度迄ニ於テ毎年度二十萬圓二十九年度ニ於テ二十四萬八千七十一圓八十九錢三厘ノ支出ヲ要ス。

佐世保鎮守府建築費

245,469.000

(同上) 本費ノ總額ハ百六十二萬二千四百二十圓十四錢ニシテ明治二十三年度ニ於テ十六萬千四百三十三圓七十錢二十五年年度ニ於テ十九萬五千二百四十三圓八十五錢二十六年度ニ於テ二十八萬七千七百五十一圓五十五錢二十七年年度ニ於テ二十四萬五千四百六十九圓二十八年度ニ於テ二十九萬五千七百六十九圓五十錢二十九年度ニ於テ十

七萬圓三十年度ニ於テ十一萬六千七百三十四圓五十四錢ノ支出ヲ要ス。

兵器製造所建築費

100,000,000

(同上) 本費ノ總額ハ二百五十三萬千五百圓ニシテ明治二十二年度ニ於テ七萬圓ヲ支出シ二十三年度ニ於テ五萬圓二十四年度ニ於テ七萬圓二十五年度ヨリ二十九年迄ニ於テ毎年度十萬圓三十年度ニ於テ二十萬圓三十一年度ヨリ三十三年迄ニ於テ毎年度四十萬圓三十四年度ニ於テ四十四萬千五百圓ノ支出ヲ要ス。

山林原野調査費

39,150,500

(農商務省) 總費額概計八十五萬五千八百餘圓ニシテ内十五萬六千八百八十七圓二十八錢六厘ハ二十三年度ニ於テ支出シ殘額六十九萬九千六百十二圓餘ハ二十四年度以降同三十七年度迄ニ支出ヲ要ス。

全國鐵道線路調査費

4,000,000

(遞信省) 總額四萬九千二百六十二圓ヲ明治二十五年ニ於テ二萬二千五百圓二十六年ニ於テ二萬二千七百六十二圓二十七年ニ於テ四千圓ノ支出ヲ要ス。

連發銃製造費

36,088,000

(陸軍省) 總額百六十三萬四千三百三十九圓三十一錢六厘ヲ明治二十五六七八ノ四ヶ年度ニ於テ各三十二萬六千八百八圓二十九年度ニ於テ三十二萬六千八百七圓三十一錢六厘ノ支出ヲ要ス。

コロンブス世界博覽會費

24,350,000

(農商務省) 總額六十二萬三千七百十六圓三十五錢三厘ニシテ明治二十四年度ニ於テ五萬千四百九十五圓五十七錢二十五年ニ於テ三十一萬三千九十八圓八十九錢二厘二十六年ニ於テ二十三萬四千四百八十六圓八十八錢一厘二十七年ニ於テ二萬四千六百三十五圓一錢ノ支出ヲ要ス。

十勝分監新營費

24,343,308

(內務省) 總額四萬九千六百八十五圓六十八錢八厘ヲ明治二十六年ニ於テ二萬五千四百六十一圓三十八錢明治二十七年ニ於テ二萬四千二百二十四圓三十錢八厘支出ヲ要スルモノ第四回議會議決ノ分。

紀淡海峽要塞砲兵營新營費

3,073,000

(陸軍省) 總額二十萬五千五百六十四圓四十六錢ヲ明治

憲法第六十七條同第六十八條第七十六條第二項費途ノ區分

二十六年度ニ於テ八萬六千四百四圓明治二十七年
度ニ於テ三萬二千七十三圓明治二十八年
度ニ於テ一萬九千百圓明治二十九年
度ニ於テ一萬五千五百五十六圓明治三十
年
度ニ於テ五萬七千四百三十一圓四十六
錢支出ヲ要スルモノ第四回議會議決ノ分。

下ノ關海峽要塞砲兵營新營費

五、四七〇〇〇

(同上) 總額十二萬四千四百六十九圓
明治二十六年
度ニ於テ六萬五千二十二圓明治二十七年
度ニ於テ五萬九千四百四十七圓支出ヲ要
スルモノ第四回議會議決ノ分。

二十六年度起業甲鐵戰艦製造費

二、三六、七七・七〇

(海軍省) 總額千五百四十二萬七千七百
四十五圓五十五錢八厘明治二十六年
度ニ於テ二百十四萬八千六百四十四圓
八十二錢明治二十七年
度ニ於テ二百三十三萬六千七百八十七圓
七十二錢明治二十八年
度ニ於テ二百三十三萬四千五百七十圓
八厘明治二十九年
度ニ於テ二百三十萬五千四百六十七圓
十三錢二厘明治三十一年
度ニ於テ二百三十

萬五千七百六十圓八十九錢八厘明治三十
二年
度ニ於テ二百五十五萬四千七百八十圓
明治二十六年
度ニ於テ九十五萬三千八百二十圓二十
錢明治二十七年
度ニ於テ九十三萬二千六百七十五圓十
四錢五厘明治二十八年
度ニ於テ三十七萬三千五百七十二錢五
厘明治二十九
年度ニ於テ三十萬三千九百九十一圓三
十八錢二厘明治三十年
度ニ於テ八萬八千八百十二圓五十一錢
一厘明治三十一年
度ニ於テ二千四百三十圓三錢七厘支出
ヲ要スルモノ第四回議會議決ノ分。

二十六年度起業巡洋艦及報知艦製造費

九三、七五・二五

(同上) 總額二百六十五萬四千七百八十圓
明治二十六年
度ニ於テ九十五萬三千八百二十圓二十
錢明治二十七年
度ニ於テ九十三萬二千六百七十五圓十
四錢五厘明治二十八年
度ニ於テ三十七萬三千五百七十二錢五
厘明治二十九
年度ニ於テ三十萬三千九百九十一圓三
十八錢二厘明治三十年
度ニ於テ八萬八千八百十二圓五十一錢
一厘明治三十一年
度ニ於テ二千四百三十圓三錢七厘支出
ヲ要スルモノ第四回議會議決ノ分。

帝國大學新營支出金

八〇、五五・〇〇〇

(文部省) 總額十五萬五千七百七十圓
明治二十六年
度ニ於テ七萬四千五百八十五圓明治二十
七年
度ニ於テ八萬五百八十五圓支出ヲ要ス
ルモノ第四回議會議決ノ分。

高等商業學校支出金

一五、〇〇〇・〇〇〇

(同上) 本費ノ總額ハ二十萬千七百八
十六圓ニシテ内八

憲法第六十七條同第六十八條第七十六條第二項費途ノ區分

萬五千七百八十六圓ハ特別會計ニ屬スル諸收入ヲ以テ支辨シ十一萬六千圓ハ二十二年度ヨリ二十七年迄支出ヲ要ス。

第四回内國勸業博覽會費

三〇一、八〇〇・三九〇

(農商務省) 總額四十萬四千九百八十二圓四十八錢二厘ヲ明治二十六年於テ五千六百七十四圓九十二錢明治二十七年於テ三十萬千八百三十圓三十九錢明治二十八年於テ九萬七千四百七十七圓十七錢二厘支出ヲ要スルモノ第四回議會議決ノ分。

日ノ岬航路標識新設費

一九〇八・九五二

(遞信省) 總額二萬七千四百三圓九十錢四厘ヲ明治二十六年於テ八千三百二十一圓九十五錢二厘明治二十七年於テ一萬九千八十一圓九十五錢二厘支出ヲ要スルモノ第四回議會議決ノ分。

計

七、三〇〇、一九・七六一

合計

五三、三三三、二五二・二八

憲法第六十七條及第七十六條第二項ノ費途

四、九〇三、〇五三・三三七

憲法第六十八條ニ係ル繼續費

七、三〇〇、一九・七六一

政府ノ見解

官制軍制ノ 君主ノ大權ニ屬スルコトハ我帝國憲法ノ明文ニ於テ百歲ノ下一點ノ疑義ヲ殘サザラシメタリ。但シ豫算ヲ議定スルニ當テ其ノ款項ヲ修正スルノ名義ニ依托シテ、間接ニ行政ノ組織ヲ改革シ、又ハ之ヲ存廢スルノ結果ヲ得ベシ。即チ官制又ハ軍制ヲ動カスノ結果ヲ得ベシ。如斯豫算議定ノ働キハ果シテ立憲ノ主義ニ合スルヤ否ヤ固ヨリ一ノ重大ナル問題ナリ。

今日ハ諸君ト共ニ既ニ事實問題ヲ協議シ了ルノ日ニ當レリ。而シテ法律上ノ議論ヲ以テ諸君ノ前ニ喋々スルハ却テ諸君ノ笑ヲ招カンコトヲ恐ル。但諸君ノ質問ニ對シ政府ハ答辯ノ義務ヲ缺クベカラザルガ爲ニ、務メテ簡單ナル論理ヲ以テ諸君ノ満足ヲ得ンコトヲ希望ス。

文武官吏ハ 君主ノ股肱耳目ナリ。故ニ官ヲ分チ職ヲ設クルハ 君主ノ大權ナリ。若シ豫算議定權ニ依リテ年々此ノ 君主ノ股肱耳目ヲ變動スルコトヲ得バ、行政ノ大權ハ實際ニ於テ全ク豫算議定者ノ手ニ移ラントス。如此ハ彼ノ或共和國ニ於テ豫算ヲ以テ行政組織ヲ設置シ、又ハ變更シテ之ヲ行政府ニ委託シ、行政府ヲシテ豫算ノ範圍内ニ於テ運動スルノ義務ヲ有セシメ、即チ豫算ヲ以テ最高法律トシ及行政組織ヲ基本トスルノ制度ト何ゾ異ナラン。

豫算ヲ以テ行政組織ヲ變更センコトヲ試ミルハ譬ヘバ冠ヲ正サントシテ額ヲ削ルガ如シ。尙ホ一ノ淺近ナル譬ヲ取テ之ヲ云ハシニ、行政組織ハ譬ヘバ人ノ身體ノ如シ。歳出豫算ハ其ノ身體ヲ蔽フベキ衣服ノ如シ。仕立屋ガ衣服ヲ作ルニ當リ、其ノ衣服ノ長短大小又ハ厚薄ノ宜シキヲ酌量スルハ其ノ受前ナリト雖モ、仕立屋ニシテ手ノ長キヲ論ジ、足ノ短キヲ論ジ、或ハ手ノ指ヲ斬取リテ之ヲ足ニ加ヘントスルガ如キコトアラバ之ヲ仕立屋ノ職ヲ踰エタルモノト云ハザル事ヲ得ズ。

前ニ述ベタル所ノ事ハ諸君ノ既ニ熟知セラル、所ニシテ、更ニ政府ノ辯明ヲ俟タザルベク、而シテ今諸君ノ疑問トセラル、所ノモノハ豫算議定ノ際ニ官制又ハ軍制ニ立入り、即チ 天皇ノ大權ニ立入り修正ヲ加フルモ、之ヲ以テ政府ノ同意ヲ求ムル時ハ憲法上ノ手續ヲ履行スルモノニシテ、豫算議定權ノ區域ヲ超越スルモノト謂フコトヲ得ズト云フニアラガ如シ。今之ニ答フルタメニ前段ニ述ベタル比喻ヲ適用スルコトヲ得ベシ。即チ憲法第六十七條ハ仕立屋ガ仕立ツル所ノ衣服ノ長短大小又ハ厚薄ヲ決メントスルニ當リ、其ノ依頼人ノ同意ヲ求ムベキヲ謂フモノニシテ、仕立屋ガ其ノ依頼人自ラノ身體手足ヲ改良セントシテ其ノ依頼人ノ同意ヲ求ムベシト謂フニアラズ。其ノ費額ノ廢除削減ニ對シテ同意ヲ求ムベシト謂フ者ニシテ、其ノ費額ノ屬スル所ノ官制又ハ軍制其者ニ對シテ同意ヲ求ムル時ハ、之ヲ改正スルコトヲ企テ得ベシト謂フニアラズ。議院ニシテ若シ官制軍制ノ改正ヲ必要ナリト認ムルトキハ、上奏ナリ建議ナリ他ノ方法ニ依リテ之ヲ企ツルコトヲ得ベシ。而シ

テ之ヲ憲法上ノ手續ニ依ルモノト謂フコトヲ得ベシ。此ニ反シテ若シ憲法第六十七條ノ手續ヲ利用シテ、豫算議定ノ際其ノ費額ヲ議スルニ由リテ、併セテ其ノ費額ノ附屬スル官制軍制其者ノ變更ヲ試ミルニ至リテハ、之ヲ正當ナル豫算議定權ノ區域ヲ守ルモノナリト謂フコトヲ得ズ。

例ヘバ或ル廳ヲ廢シ、或ル局ヲ廢シ、又ハ或ル一局ヲ其ノ省ニ廢シテ之ヲ他ノ省ニ遷スガ如キ、及ビ或ル官ヲ廢シタルガ如キハ是即チ官制其者ヲ改革シタルモノナリ。或ル局或ル廳ニシテ之ヲ廢スルコトヲ得ベケレバ、上ツテ或ル一省モ亦之ヲ廢スルコトヲ得ベシ。又或ル一省ヲ起スコトヲ得ベシ。豫算ニ依テ省局ノ分合廢置ヲ行フコトノ自由アラシメバ、憲法第十條ハ已ニ其ノ効力ヲ失フニ至ルベシ。政府ハ官制軍制ハ豫算ノ基礎タルベシト云フノ主義ヲ執ル。而シテ豫算ハ官制軍制ノ基礎タルベシト云フノ主義ニ反對スル者ナリ。

併ナガラ豫算議定ノ際、其ノ區域判然タラザルモノアルニ當リテ、或ハ一二官制軍制ノ區域ニ侵入スルコトアルハ、時トシテ事情ノ免レザルモノアルベク、政府ハ好ンデ刻論ヲ爲シテ以テ議院ノ議決ヲ非難スルニ非ズト雖モ、政府ガ此度修正案ニ對シテ全部ノ不同意ヲ表シ、議院ノ再考ヲ求メタル所以ノモノハ、修正案ノ全體全部ハ豫算ニ依テ行政ヲ組織スルヲ以テ目的トシタルモノニシテ、行政組織ノ基礎ニ依テ豫算ヲ修正シタルモノト認ムルコトヲ得ズ。歳出費額ノ同意ヲ求メタルニ止ラズシテ、官制改革ノ同意ヲ求メタルモノナリ。是レ政府ガ修正案ノ全部ニ對シ止ムヲ得ズ議

院ノ再考ヲ求メタル所以ノ一タリ。

第二法律ニ關スル問題ニ付テハ、又前項ト同一ノ主義ニ依リ諸君ノ了解ヲ求ムルコトヲ得ベシ。諸君ハ既ニ豫算ヲ以テ法律ヲ改正スルノ効力ヲ有セシムベカラザルコトヲ熟知セラレタリ。尙一步ヲ進メテ言ヘバ、法律ハ本ナリ、豫算ハ末ナリ。豫算ハ法律ノ基礎ニ從ヒテ編成セラルベキモノナリ。若シ豫算ニ依テ假ニ法律ヲ改正シ、又ハ間接ニ法律改正ノ効力ヲ有セシメ、然後ニ政府ヨリ、或ハ議院ヨリ、其ノ法律修正案ヲ提出シテ以テ其ノ局ヲ結ベシト云ハ、是レ本末ヲ誤リ、從ヒテ前後ノ順序ヲ誤ルモノナリ。法律ノ改正ハ必ズ立法三部ノ（即チ兩院ト政府）合意ヲ得テ然後ニ成立スルモノナリ。或ル一部ヨリノ議案ノ提出ニ依テ即時ニ決定スベキモノニアラズ。而シテ其ノ決定發布ハ一年又ハ二年ヲ遅クスルモ亦知ルベカラズ。且各議院ハ前日豫算議決ノ結果ニ依テ、後日法律修正案ヲ必然ニ協賛スベキノ義務アルモノニアラズ。若シ前日ニ豫算ヲ議定シ、間接ニ法律ヲ改正スルノ結果ヲ有セシメテ而シテ後日ニ法律其者ノ議案ニシテ成立セザルノ事實ヲ生ズルコトアラバ、其ノ情況ハ如何ナルベキヤ。議院并ニ若モ之ニ同意ヲ表シタル政府ハ、法律ニ背キ金額ヲ支出シ、又ハ支出セザルノ場合アルニ迫ルベシ。果シテ此ノ如キアラバ政府ノ同意スルコト能ハザル所ナルノミナラズ、政府ノ同意不同意アルニ拘ラズ、議院モ亦法律ヲ保護スルノ義務ヲ缺クモノト謂ハザルコトヲ得ズ。